

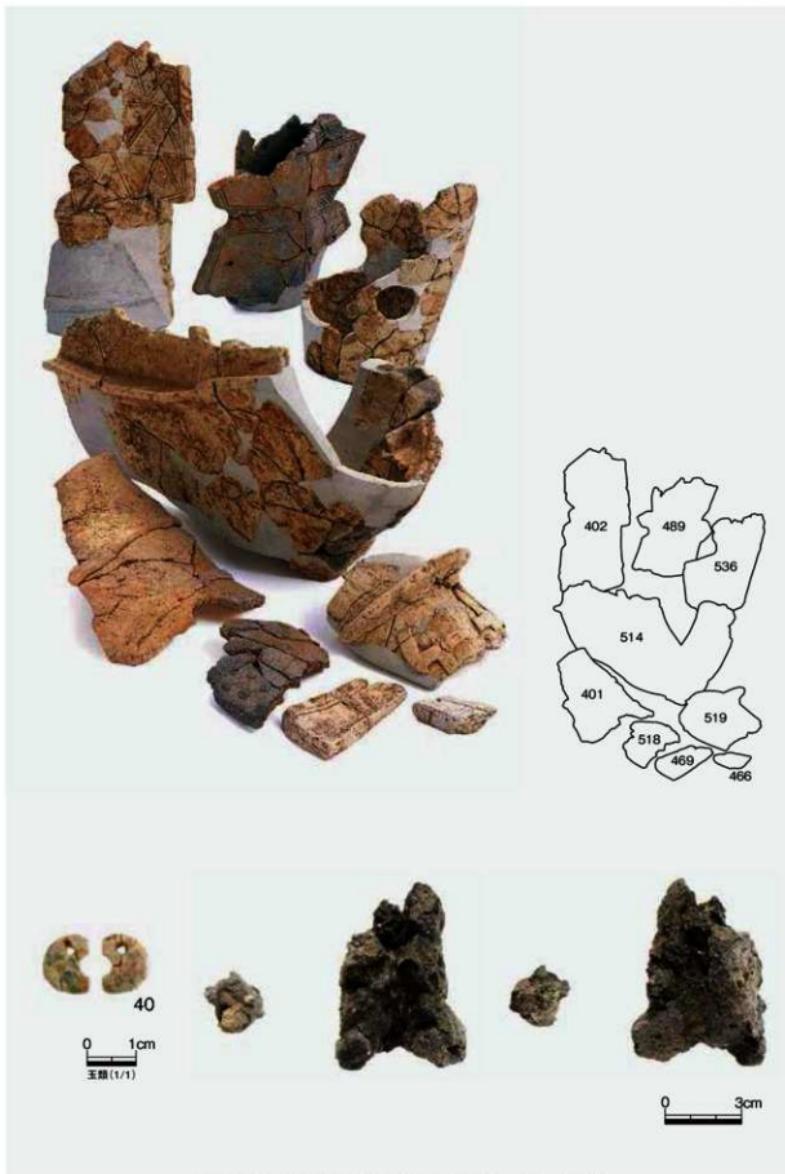
国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第 1 冊

仲戸遺跡・仲戸東遺跡

2016. 3

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局



仲戸東遺跡出土埴輪（上）・勾玉（下左）・塗壁（下右）

序 文

本書には、国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県東かがわ市川東に所在する仲戸遺跡（なかといせき）と仲戸東遺跡（なかとひがしいせき）の報告を収録しています。

仲戸遺跡では、縄文時代後期から中世初頭にかけての複数の自然河川や溝が検出され、このうち縄文時代後期の自然河川からはクヌギの木株が出土しました。あわせて各流路の花粉分析を実施し、本地域の自然環境の変遷について明らかにすことができました。

仲戸東遺跡では、古墳時代後期の埴輪が多量に出土し、周辺に埴輪窯の所在が想定されます。また、同時期の粘土採掘土坑も見つかり、埴輪生産に関する遺跡であることが明らかとなりました。出土した埴輪には、本県初となる石見型埴輪や、古墳時代後期のものとしては西日本ではまだ出土例の少ない船形埴輪があり、本地域の埴輪祭祀について貴重な資料と評価されます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、国土交通省四国地方整備局並びに関係各機関・地元関係各位には、多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年3月

香川県埋蔵文化財センター

所長 真鍋 昌宏

例　　言

1 本報告書は、一般国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県東かがわ市川東に所在する仲戸遺跡（なかといせき）1次調査と、仲戸東遺跡（なかとひがしいせき）1・2次調査の報告である。

2 発掘調査は、香川県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から委託され、香川県教育委員会が調査主体、香川県埋蔵文化財センターを調査担当者として実施した。

3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

仲戸遺跡1次調査

期間 平成20年10月1日～平成21年1月30日

担当 文化財専門員 山元素子・藏本晋司

仲戸東遺跡1次調査

期間 平成20年7月1日～9月30日

担当 文化財専門員 山元素子・藏本晋司

仲戸東遺跡2次調査

期間 平成25年3月1日～3月29日

担当 文化財専門員 山元素子・藏本晋司

4 調査にあたっては次のの方々、関係機関の協力を得た。また、石器・石製品の石材同定については、徳島大学総合科学部 村田明広・青矢睦月両氏のご教示を得た。記して謝意を表したい。

一瀬和夫、鐘方正樹、池見渉、塙治琢磨、久保田昇三、藤川智之、古野徳久、松浦暢昌、松田朝由、山内英樹、山本一伸

香川県立ミュージアム、観音寺市教育委員会、小松島市教育委員会、讃岐宮、さぬき市教育委員会、尽誠学園高等学校、普通寺市教育委員会、高松市教育委員会、徳島県立埋蔵文化財センター、三豊市教育委員会、国土交通省四国地方整備局香川河川国道事務所、地元自治会、地元水利組合（順不同、敬称略）

5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は藏本晋司が担当した。

6 本報告書で用いる座標系は国土座標第IV系（世界測地系）で、方位の北は国土座標第IV系による。また、標高は東京湾平均海面を基準とした。

7 遺構は次の略号により表示した。

SB 挖立柱建物 SP 柱穴・小穴 SK 土坑 SD 溝 SR 旧河道
SX 性格不明遺構

- 8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線（単位m）である。
- 9 遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。
- 10 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。また、残存率は遺物の固化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。
- 11 石器実測図中の外郭線周囲の線は潰れの範囲を示している。図の左側に展開した面をA面、右側の面をB面として記述する。剥片石器の場合はA面が背面、B面が腹面となる。石材は表記がない限りサヌカイトである。
- 12 遺物の時期や分類は次の文献を参照した。
- 弥生土器：信里芳紀 2002「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相－集落の検討を中心にして－」『第16回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集 弥生時代前期末～中期初頭の動態』
信里芳紀 2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年－四線文期を中心にして－』『香川県埋蔵文化財センター研究紀要 I』
信里芳紀 2011「弥生中期後半から古墳初頭の土器編年』『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 旧練兵場遺跡II』、香川県教育委員会
大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VII 下川津遺跡』、香川県教育委員会
- 須恵器： 田辺昭三 1981「須恵器大成」、角川書店
大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006『年代のものさし－大阪府立近つ飛鳥博物館図録40－』
佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年』『関西大学考古学研究室開設40周年記念 考古学論叢』
- 中世土器：佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡IV』、香川県教育委員会
- 貿易陶磁：太宰府市教育委員会編 2000『太宰府条坊跡XV - 陶磁器分類編 -』
- 近世土器：佐藤竜馬 2003「近世在地土器の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡（西の丸町地区）II』、香川県教育委員会

* 地図は国土地理院地形図を使用しました。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査と整理作業の経過	2

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4

第3章 仲戸遺跡の調査

第1節 概要と調査の方法	11
第2節 基本層序	12
第3節 遺構・遺物	15

第4章 仲戸東遺跡の調査

第1節 概要と調査の方法	38
第2節 基本層序	38
第3節 遺構・遺物	45

第5章 自然科学的分析の成果

第1節 仲戸東遺跡、仲戸遺跡出土木製品の樹種同定及び放射性炭素年代測定	117
第2節 仲戸遺跡・仲戸東遺跡から出土した木材・炭化材の樹種	132
第3節 仲戸東・仲戸遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	135
第4節 仲戸遺跡における花粉、植物珪酸体分析	138
第5節 仲戸東遺跡出土勾玉の螢光X線分析	148
第6節 埋蔵文化財整理業務（仲戸東遺跡）に係る埴輪胎土分析業務	151
第7節 動物遺存体分析	159

第6章 まとめ

第1節 遺跡の時期的推移	160
第2節 仲戸東遺跡出土埴輪の占める位置	160

挿図目次

第1図	道路位置図	1
第2図	道路位置図	5
第3図	道路周辺地形分類と道路分布図	7
第4図	調査区配置図	11
第5図	I・II区調査区北壁土層断面図	13
第6図	I・II区調査区東・西壁土層断面図	14
第7図	III区調査区北壁土層断面図	15
第8図	IV区調査区北・西壁土層断面図	16
第9図	SR01・SR02平面・断面図・出土遺物実測図1	17
第10図	SR01・SR02出土遺物実測図2	18
第11図	SR03平面・断面図・出土遺物実測図	19
第12図	SR06土層断面図	20
第13図	SR06下層出土遺物実測図	21
第14図	SR06中層出土遺物実測図	22
第15図	SR06上層出土遺物実測図	23
第16図	SD02・SD03・SD04平面・土層断面図	25
第17図	SD02・SD04出土遺物実測図	26
第18図	SD05平面・土層断面・出土遺物実測図	27
第19図	SD06土層断面・出土遺物実測図	28
第20図	SD06・SD07・SR06・SR07・SR08平面図	29
第21図	SD07土層断面・出土遺物実測図	31
第22図	SR04土層断面図	32
第23図	SR04出土遺物実測図	33
第24図	SD01平面・土層断面・出土遺物実測図	34
第25図	SK01・SK02・SK03・SK04平面・土層断面図	35
第26図	SK01平面・土層断面図	36
第27図	包含層出土遺物実測図	37
第28図	I区調査区北壁土層断面図	39
第29図	I区調査区東壁土層断面図	40
第30図	I区調査区南壁土層断面図	41
第31図	II区調査区北・東壁土層断面図	42
第32図	SB01平面・土層断面・出土遺物実測図	43・44
第33図	SB02平面・土層断面図	45
第34図	I区土坑群分布図	46
第35図	SK03平面・土層断面図	47
第36図	SK03出土遺物実測図	48
第37図	SK04・SK05平面・土層断面図	49
第38図	SK04・SK05出土遺物実測図	50
第39図	SK06平面・土層断面・出土遺物実測図	50
第40図	SK07・SK08・SK09平面・土層断面・ 出土遺物実測図	51
第41図	SK10平面・土層断面図	52
第42図	SK11・SK12平面・土層断面図	53
第43図	SK11・SK12出土遺物実測図	54
第44図	SK13・SK14平面・土層断面実測図	54
第45図	SK15・SK16・SK17・SK18平面・土層断面図	55
第46図	SK19平面・土層断面図	56
第47図	SK20平面・土層断面・出土遺物実測図	56
第48図	SK21・SK23平面・土層断面・ 出土遺物実測図	57
第49図	SK24平面・土層断面・出土遺物実測図	58
第50図	SK25・SK26平面・土層断面図	59
第51図	SK27平面・土層断面・出土遺物実測図	60
第52図	SK28平面・土層断面・出土遺物実測図	61
第53図	SK29平面・土層断面・出土遺物実測図	62
第54図	SK30平面・土層断面・出土遺物実測図	63
第55図	SK31平面・土層断面・出土遺物実測図	64
第56図	SK32平面・土層断面図	65
第57図	SK33平面・土層断面図	66
第58図	SK33出土遺物実測図	67
第59図	埴輪窯・工房推定位置図	68
第60図	SD01平面・土層断面・出土遺物実測図	69
第61図	SR01平面・土層断面・出土遺物実測図	70
第62図	SR02平面・土層断面図	71
第63図	SR02出土遺物実測図	72
第64図	SR03平面・土層断面図	73
第65図	SR03出土遺物実測図1	74
第66図	SR03出土遺物実測図2	75
第67図	SR03出土遺物実測図3	76
第68図	SR03出土遺物実測図4	77
第69図	SR03出土遺物実測図5	78
第70図	SD02平面・土層断面図	79
第71図	SD02出土遺物実測図1	81
第72図	SD02出土遺物実測図2	82
第73図	SD02出土遺物実測図3	83
第74図	SD02出土遺物実測図4	84
第75図	SD02出土遺物実測図5	85
第76図	SD02出土遺物実測図6	86
第77図	SD02出土遺物実測図7	87
第78図	SR04出土遺物実測図1	90
第79図	SR04出土遺物実測図2	91
第80図	SR04出土遺物実測図3	92
第81図	SK01・SK02平面・土層断面・ 出土遺物実測図	93
第82図	I区包含層出土遺物実測図	94
第83図	口縁部分頸部(十河2003より)	95
第84図	突帯分頸部(十河2003より)	95
第85図	主要埴輪(円筒)出土位置図	96
第86図	主要埴輪(形象)出土位置図	97
第87図	I区出土円筒埴輪実測図1	99
第88図	I区出土円筒埴輪実測図2	100
第89図	I区出土円筒埴輪実測図3	101
第90図	I区出土円筒埴輪実測図4	102
第91図	I区出土形象埴輪実測図	103
第92図	I区出土肩形埴輪実測図1	104
第93図	I区出土肩形埴輪実測図2	105
第94図	I区出土石見型埴輪実測図1	107
第95図	I区出土石見型埴輪実測図2	109
第96図	I区出土船形埴輪実測図1	110
第97図	I区出土船形埴輪各部名称	111
第98図	I区出土馬形埴輪実測図	112
第99図	I区出土形象埴輪底基部実測図	113
第100図	I区出土不明埴輪実測図	114
第101図	樹種鑑定用プレパラート作製 フローチャート	117
第102図	暦年較正結果	124
第103図	花粉分析フローチャート	139
第104図	植物珪酸体分析フローチャート	139
第105図	花粉ダイアグラム	141
第106図	植物珪酸体ダイアグラム	142
第107図	四国地方の中央構造線	149
第108図	蛍光X線分析スペクトル図 1a-b. 勾玉(試料No1)	150
第109図	各粒度階における鉱物	

岩石出現頻度と粒度組成（1）	155	第 123 図 大龜古墳出土埴輪実測図 5	173
第 110 図 各粒度における鉱物		第 124 図 大龜古墳出土埴輪実測図 6	174
岩石出現頻度と粒度組成（2）	156	第 125 図 大龜古墳出土埴輪実測図 7	175
第 111 図 各粒度における鉱物		第 126 国 大龜古墳出土埴輪実測図 8	176
岩石出現頻度と粒度組成（3）	157	第 127 国 大龜古墳出土埴輪実測図 9	177
第 112 国 破片類・基質・孔隙の割合	157	第 128 国 王墓古墳出土埴輪実測図	178
第 113 国 道構変遷図 1	161	第 129 国 青木 1 号墳出土埴輪実測図	179
第 114 国 道構変遷図 2	162	第 130 国 出土地不明資料埴輪実測図 1	181
第 115 国 墳輪出土古墳・道路分布図	163	第 131 国 出土地不明資料埴輪実測図 2	182
第 116 国 丸山古墳・奥方 6 号墳		第 132 国 住吉神社古墳出土埴輪実測図 1	183
泥宮万塚出土埴輪実測図	165	第 133 国 住吉神社古墳出土埴輪実測図 2	184
第 117 国 末期古墳出土埴輪実測図 1	167	第 134 国 若宮古墳出土埴輪実測図	184
第 118 国 末期古墳出土埴輪実測図 2	168	第 135 国 ひさご塚古墳出土須恵器・埴輪実測図 1	185
第 119 国 大龜古墳出土埴輪実測図 1	169	第 136 国 ひさご塚古墳出土埴輪実測図 2	186
第 120 国 大龜古墳出土埴輪実測図 2	170	第 137 国 長尾八幡旗山出土埴輪実測図	187
第 121 国 大龜古墳出土埴輪実測図 3	171	第 138 国 石見型埴輪年表	188
第 122 国 大龜古墳出土埴輪実測図 4	172		

表 目 次

第 1 表 树種同定結果表 1	118	第 28 表 仲戸東遺跡土器観察表 (8)	202
第 2 表 树種同定結果表 2	119	第 29 表 仲戸東遺跡土製品観察表	203
第 3 表 年代測定結果	124	第 30 表 仲戸東遺跡円筒埴輪観察表 (1)	203
第 4 表 树種同定結果	133	第 31 表 仲戸東遺跡円筒埴輪観察表 (2)	204
第 5 表 微化石検査結果 (残存状況)	138	第 32 表 仲戸東遺跡円筒埴輪観察表 (3)	205
第 6 表 同定・検討対象分類群 (同定分類群と推定母植物の関係)	140	第 33 表 仲戸東遺跡円筒埴輪観察表 (4)	206
第 7 表 花粉組成表	143	第 34 表 県内出土円筒埴輪観察表 (1)	207
第 8 表 植物圧縮形態組成表	144	第 35 表 県内出土円筒埴輪観察表 (2)	208
第 9 表 半定量分析結果 (重量 %)	148	第 36 表 県内出土円筒埴輪観察表 (3)	209
第 10 表 分析試料一覧	151	第 37 表 県内出土円筒埴輪観察表 (4)	210
第 11 表 薄片観察結果	153	第 38 表 県内出土円筒埴輪観察表 (5)	211
第 12 表 胎土および堆積物の分類	158	第 39 表 県内出土円筒埴輪観察表 (6)	212
第 13 表 動物遺存体一覧	159	第 40 表 県内出土円筒埴輪観察表 (7)	213
第 14 表 墳輪出土古墳・道路概要一覧	164	第 41 表 県内出土円筒埴輪観察表 (8)	214
第 15 表 仲戸東遺跡土器観察表 (1)	191	第 42 表 県内出土円筒埴輪観察表 (9)	215
第 16 表 仲戸東遺跡土器観察表 (2)	192	第 43 表 県内出土円筒埴輪観察表 (10)	216
第 17 表 仲戸東遺跡土器観察表 (3)	193	第 44 表 県内出土円筒埴輪観察表 (11)	217
第 18 表 仲戸東遺跡土製品観察表	193	第 45 表 県内出土円筒埴輪観察表 (12)	218
第 19 表 仲戸東遺跡石器観察表	194	第 46 表 仲戸東遺跡形象埴輪観察表 (1)	219
第 20 表 仲戸東遺跡木器観察表	194	第 47 表 仲戸東遺跡形象埴輪観察表 (2)	220
第 21 表 仲戸東遺跡土器観察表 (1)	195	第 48 表 仲戸東遺跡形象埴輪観察表 (3)	221
第 22 表 仲戸東遺跡土器観察表 (2)	196	第 49 表 県内出土形象埴輪観察表	221
第 23 表 仲戸東遺跡土器観察表 (3)	197	第 50 表 仲戸東遺跡瓦類観察表	222
第 24 表 仲戸東遺跡土器観察表 (4)	198	第 51 表 仲戸東遺跡石器観察表	222
第 25 表 仲戸東遺跡土器観察表 (5)	199	第 52 表 仲戸東遺跡玉類観察表	222
第 26 表 仲戸東遺跡土器観察表 (6)	200	第 53 表 仲戸東遺跡木器観察表 (1)	223
第 27 表 仲戸東遺跡土器観察表 (7)	201	第 54 表 仲戸東遺跡木器観察表 (2)	224

写 真 目 次

図版1 木製品の顕微鏡写真1	125	IV区 SD02 全景(北より).....	236
図版2 木製品の顕微鏡写真2	126	IV区 SD02 全景(南より).....	236
図版3 木製品の顕微鏡写真3	127	IV区 SD01 全景(北より).....	236
図版4 木製品の顕微鏡写真4	128	IV区 全景(西より).....	237
図版5 木製品の顕微鏡写真5	129	IV区 連景(北より).....	237
図版6 木製品の顕微鏡写真6	130	IV区 調査区南壁土層断面(南より).....	237
図版7 木製品の顕微鏡写真7	131	調査前風景(東より).....	242
図版8 木材・炭化材の顕微鏡写真.....	134	調査前風景(西より).....	242
図版9 花粉化石顕微鏡写真.....	146	I区 SK01 土層断面(南より).....	242
図版10 植物珪酸化鉄体顕微鏡写真.....	147	I区 SK24 遺物出土状況(南より).....	243
図版11 伸戸東遺跡出土勾玉とその元素マッピング図 1 a - f. 勾玉(試料No.1).....	150	I区 SK24 遺物出土状況(北より).....	243
調査前風景(東より).....	226	I区 SK23 土層断面(西より).....	243
調査前風景(西より).....	226	I区 SK19 土層断面(西より).....	244
I・II区 SR05 土層断面(南より).....	226	I区 SK20 土層断面(南より).....	244
I・II区 SR06 土層断面(北より).....	227	I区 SK20 遺物出土状況(西より).....	244
I・II区 SR06 土層断面(北より).....	227	I区 SK20 遺物出土状況(北より).....	245
I・II区 SR06 全景(北より).....	227	I区 SK20 遺物出土状況(南より).....	245
I・II区 SR04 土層断面(北より).....	228	I区 SK26 土層断面(南東より).....	245
I・II区 SR04 南半全景(北より).....	228	I区 SK29 土層断面(北より).....	246
I・II区 SR04 北半全景(北より).....	228	I区 SK29 板材出土状況(南より).....	246
I・II区 SR04 立木出土状況(南より).....	229	I区 SK29 遺物出土状況(北より).....	246
I・II区 SR04 立木周辺繩文器出土状況(南より).....	229	I区 SK30 土層断面(南より).....	247
I・II区 SD05 全景(北より).....	229	I区 SK30 遺物出土状況(北より).....	247
I区 SR04 遺物出土状況(東より).....	230	I区 SK30 遺物出土状況(北より).....	248
I・II区 SR04 下層遺物出土状況(北より).....	230	I区 SK30 遺物出土状況(南より).....	248
I・II区 SD05 土層断面(西より).....	230	I区 SK30 遺物出土状況(東より).....	248
I・II区 SD06 土層断面(南より).....	230	I区 SK31 土層断面(南より).....	249
I・II区 SD06 下層遺物出土状況(西より).....	230	I区 SK31 遺物出土状況(南より).....	249
I・II区 SD07 土層断面(南より).....	230	I区 SK32 土層断面(南より).....	249
I・II区 SD07 全景(北より).....	230	I区 SK21 土層断面(南より).....	250
I・II区 SD07 最下層遺物出土状況(東より).....	230	I区 SK27 土層断面(東より).....	250
I区 SK04 土層断面(南より).....	231	I区 SK27 遺物出土状況(西より).....	250
I区 SK04 全景(南より).....	231	I区 SK27 板材出土状況(北より).....	251
II区 SK03 土層断面(南より).....	231	I区 SK27 板材出土状況(東より).....	251
II区 SK03 全景(南より).....	231	I区 SK13 土層断面(北東より).....	251
II区 SK02 土層断面(南より).....	231	I区 SK13 遺物出土状況(北より).....	252
II区 SK02 全景(南より).....	231	I区 SK16 土層断面(南より).....	252
I区 SX01 南北土層断面(東より).....	231	I区 SK04 土層断面(南より).....	252
I区 SX01 炭層検出状況(北より).....	231	I区 SK14 土層断面(西より).....	253
I区 全景(東より).....	232	I区 SK11 土層断面(南より).....	253
II区 全景(東より).....	232	I区 SK11 土層断面細部(南より).....	253
I区 全景(西より).....	232	I区 SK11 遺物出土状況(西より).....	254
I区 連景(南より).....	233	I区 SK12 遺物出土状況(西より).....	254
III区 SR03 全景(西より).....	233	I区 SK12 遺物出土状況(西より).....	254
III区 SR03 全景(北より).....	233	I区 SK12 板材出土状況(西より).....	255
IV区 SR02 全景(南より).....	234	I区 SK09 土層断面(南より).....	255
IV区 SR02 最下層遺物出土状況(南より).....	234	I区 SK09 遺物出土状況(東より).....	255
IV区 SR02 全景(北より).....	234	I区 SK10 土層断面(南より).....	256
IV区 SR02 下層遺物出土状況(北より).....	235	I区 SK03 遺物出土状況(北より).....	256
IV区 SR01 中層遺物出土状況(南より).....	235	I区 SK03 遺物出土状況(北より).....	256
IV区 SR01 下層遺物出土状況(南より).....	235	I区 SK03 遺物出土状況(北より).....	257
IV区 SD02 土層断面(南より).....	235	I区 SK03 木製品出土状況(北より).....	257
IV区 SD03 土層断面(西より).....	235	I区 SK03 遺物出土状況(東より).....	257
IV区 SD04 土層断面(西より).....	235	I区 SK06 土層断面(南より).....	258
IV区 SD04 下層遺物出土状況(南より).....	235	I区 SK08 土層断面(南より).....	258
IV区 SD01 土層断面(南より).....	235	I区 SK07 土層断面(南東より).....	258

I 区 SK33 土層断面（西より）	259	I 区 SR03 灰層検出状況（西より）	261
I 区 SK33 遺物出土状況（南より）	259	I 区 SR03 全景（南より）	261
I 区 SK33 遺物出土状況（北より）	259	I 区 SR03（調査区北壁）土層断面（南より）	261
I 区 SD02 土層断面（西より）	260	I 区 半部全景（西より）	261
I 区 SD02 土層断面（西より）	260	I 区 SR03 土層断面（西より）	262
I 区 SD02 遺物出土状況層遺物出土状況（東より）	260	I 区 SR03 遺物出土状況（東より）	262
I 区 SD02 遺物出土状況（南より）	260	I 区 東半部全景（東より）	262
I 区 SD02 遺物出土状況（西より）	260	I 区 全景（西より）	263
I 区 SD02 遺物出土状況（南より）	260	II 区 SP04 横石出土状況（東より）	263
I 区 SD02 下層遺物出土状況（南より）	260	II 区 SP12 横石出土状況（北より）	264
I 区 SD02 下層遺物出土状況（南より）	260	II 区 SB01 全景（北より）	264
I 区 SD02 下層遺物出土状況（北より）	261	II 区 SD01 遺物出土状況（南西より）	265
I 区 SR03 遺物出土状況（南より）	261	II 区 SR01 全景（南西より）	265
I 区 SR03 遺物出土状況（南より）	261	II 区 調査区北壁土層断面（南西より）	265

付図目次

付図1 仲戸遺跡・仲戸東遺跡平面図

付図2 舟形埴輪実測図

第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

一般国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴い、香川県教育委員会では平成19・21年度に川東地区において試掘調査を実施した。その結果、調査対象地のうち一部のトレンチで、弥生時代と古代の遺構・遺物が確認されたことから、古川以東を仲戸東遺跡、以西を仲戸遺跡としてそれぞれ文化財保護法にもとづく保護措置が必要と判断し、事前に発掘調査を実施することとなった。



第1図 遺跡位置図

第2節 発掘調査と整理作業の経過

香川県埋蔵文化財センターでは、用地買収の終了した仲戸東遺跡1,009m²、仲戸遺跡3,695m²について平成20年7月1日～平成21年1月30日に、仲戸東遺跡242m²について平成25年3月1日～同年3月29日にそれぞれ発掘調査を実施した。調査はいずれも、直営方式である。

なお、平成20年12月6日には両遺跡において現地説明会を実施した。寒さの厳しい季節ではあったが、市内外より多数の参加者があり、考古学的な関心の高さが伺われた。

整理作業は、平成26年6月1日から同年11月28日に香川県埋蔵文化財センターにおいて実施した。遺物の接合・図化・写真撮影と遺構図の浄書、遺構写真の整理等を行い、本書にまとめた。出土遺物量は、28%入りコンテナ225箱である。遺構については、本遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構について報告した。また、遺物については、遺構出土遺物のなかでも遺構の時期を直接反映するものを最優先とし、混入遺物や遺構外出土遺物についてはとくに必要と認めるもののみ掲載した。

発掘調査及び整理作業の体制は下表のとおりである。

平成20年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長 春山 浩康 課長補佐（総括） 武井 寿紀	総括 所長 大山 漢光 次長 岩瀬 常雄			
総務・生涯学習推進グループ	副主幹 香西 としみ 主任 林 照代	総務課 課長 宮田 久美子 主任 鳥田 和司 主任 古市 和子			
文化財グループ	主幹（兼）課長補佐 蕨好 史郎 主任文化財専門員 森 格也 文化財専門員 乗松 真也	調査課 課長 岩瀬 常雄 文化財専門員 山元 素子 文化財専門員 藏本 晋司 嘱託（土木） 砂川 赳夫 嘱託（調査技術員） 今井 佳子			

平成24年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長 岩井 実秋 副課長 木虎 淳	総括 所長 蕨好 史郎 次長 真鍋 正彦			
総務・生涯学習推進グループ	副主幹 松下 由美子 主任・主事 丸山 千晶	総務課 課長 岩鍋 正彦（兼務） 副主幹 林 文夫 主任 宮武 みみ代			
文化財グループ	課長補佐 西岡 連哉 主任文化財専門員 森下 美治 文化財専門員 松本 和彦	調査課 課長 高木 秀哉 文化財専門員 森 格也 文化財専門員 山元 素子 文化財専門員 藏本 晋司 嘱託（土木） 山田 隆 嘱託（調査技術員） 東原 雄明			

平成26年度整理体制一覧表

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長 増田 宏 副課長 川上 泰	総括 所長 真鍋 昌宏 次長 前田 和也			
総務・生涯学習推進グループ	副主幹 松下 由美子 主任 和木 麻佳	総務課 課長 前田 和也（兼務） 主任 佐野 英二 主任 寺岡 仁美			
文化財グループ	課長補佐 片桐 孝浩 主任文化財専門員 山下 平重 文化財専門員 松本 和彦	資料普及課 課長 高木 秀哉 主任 岩崎 昌平 主任 森 格也			

主任文化財専門員	歳本 晋司
嘱託	伊藤 真紀
嘱託	岡崎 江伊子
嘱託	加藤 恵子
嘱託	合田 和子
嘱託	竹村 恵子
嘱託	田中 沙千子
嘱託	正本 由希子
嘱託	山地 眞理子

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

仲戸東遺跡は香川県東かがわ市川東 692-1 番地ほかに、仲戸遺跡は東かがわ市川東 563 番地ほかにそれぞれ所在する。

四国は、本州・北海道・九州とともに日本列島を構成する主要4島の一つで、面積約 18,300km²と4島の中では最小である。南部は太平洋に、東～北部は紀伊水道や瀬戸内海を介して本州に、西部は豊後水道を介して九州に、それぞれ面する。地形面では、四国の北半部を東西に走行する中央構造線により、それ以北の西南日本内帯と、以南の西南日本外帯に区分される。外帯には、最高標高 1,982 m の四国山地が構造線に沿って東西に聳え、以南の太平洋側は温暖で多雨なのに対して、以北の瀬戸内側は温暖で少雨と気候が相違する。この気候に対応して、瀬戸内側では弥生時代より土器製塙が盛んにおこなわれてきた。

香川県は四国の北東部に位置し、南縁には最大標高約 1,060 m の等高性のよい讃岐山脈が東西に走行し、徳島県との県境となる。

遺跡が所在する香川県東端部地域は、東より馬宿川、湊川、与田川などの讃岐山脈に源を発する中小河川が北流して播磨灘に注ぐ。各河川の下流部には、扇状地性の沖積平野が形成されるが、ビュートやメサといった溶岩台地起源の山塊や讃岐山脈より派生した低丘陵によって分断され、さらに讃岐山脈から海岸線までの距離が短く、まとまった平野部に乏しい。

遺跡が所在する与田川下流の平野は、北は北山、南は讃岐山脈、東は讃岐山脈より派生した秋葉山丘陵等によって3方を画され、北東方向に開けた面積約 9.7km²の小規模な平野部で、遺跡はその南東隅部に位置する。

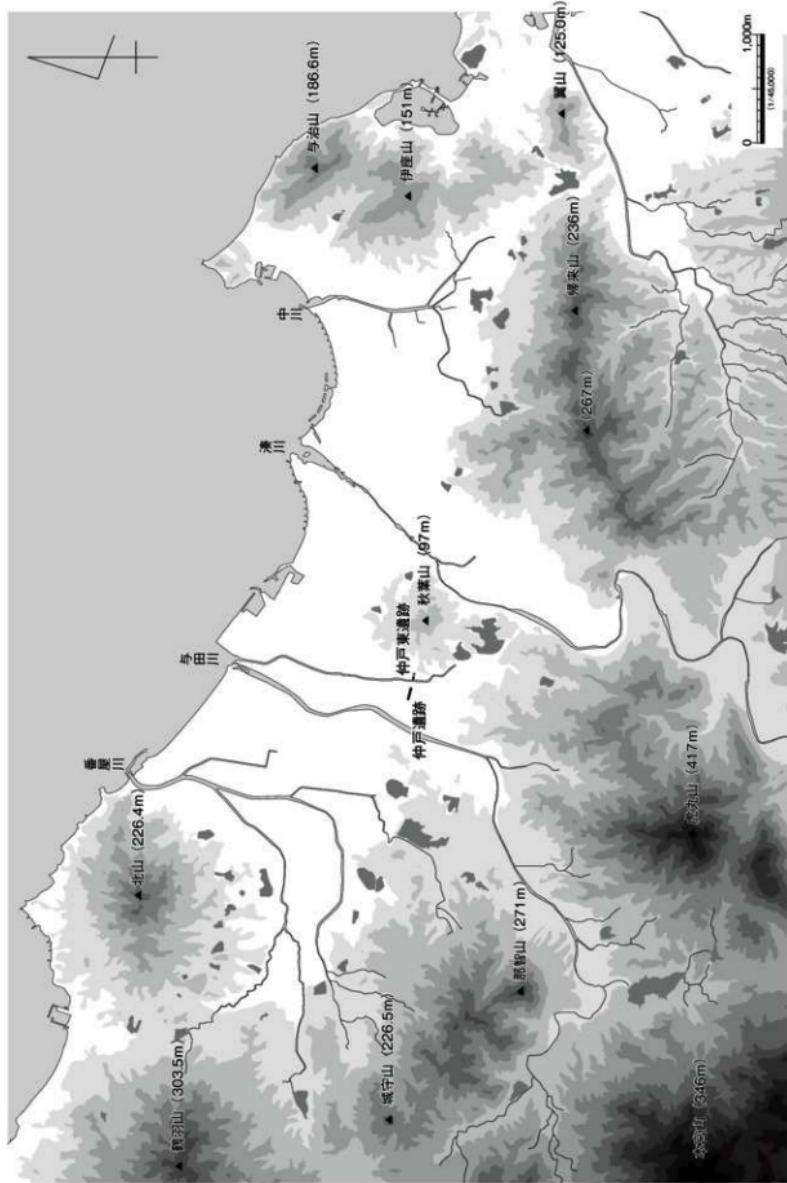
仲戸東遺跡は古川と秋葉山丘陵との間の狭小な平地上に、仲戸遺跡は与田川と古川との間の平地上にそれぞれ立地する。与田川流域には、地割の乱れや標高差から明瞭な氾濫原面が連続し、仲戸遺跡の立地する平地との間には、比高約 0.8 m 前後の段丘崖が認められる。

第2節 歴史的環境

旧石器・縄文時代

本地域において、明確な旧石器時代に遡る遺物の出土は報告されていない。今後丘陵裾部の段丘面の調査が進展すれば、当該期の遺構・遺物の出土も期待される。

香川県において縄文時代の遺跡数は乏しく、とくに前半期の遺跡は丘陵裾部を中心に散発的にみられる程度である。近年の大規模開発に伴う調査で、当該期の遺跡数は増加してきており、本地域においても原間遺跡や金毘羅山遺跡で、遺物の出土が報告されている。また、与田川河床で有舌尖頭器等の石器が採集されており、仲戸遺跡においても小型有舌尖頭器が1点出土した。後・晩期になると遺跡数は増加に転じ、本地域では善門池西遺跡、田中遺跡、大社遺跡、西内遺跡、仲戸遺跡、仲戸東遺跡、田中遺跡で遺物の出土が報告されている。ただし、いずれの遺跡においても、旧河道や包含層等からの遺物の出土にとどまる。



第2図 遺跡位置図

原間遺跡では、旧河道より縄文時代早期？～晚期前半の土器片に伴い、打設された多量の杭群が出土している（香川県 2005）。杭群の帰属時期は不詳であるが、縄文時代後期以前に遡る可能性がある。金毘羅山遺跡においても、弥生時代以降の遺構埋土中より、前・中・晚期の土器片や硃塗耳飾が出土している（香川県 2000a）。縄文時代各期の土器片が、少量ではあるが断続的にまとまって出土したことは、長期的な土地利用の傾向を考察する資料となろう。また、原間遺跡より出土した土器のうち、中期と晚期前半の土器の一部に結晶片岩粒の混入が認められ、徳島県吉野川流域の遺跡からの搬入の可能性が想定されている。本地域においては、以後弥生時代にかけて石器素材や土器の当該地域からの搬入が継続し、両地域間の交易の始点として評価できるものである。

弥生時代

弥生時代の前半、前期から中期中葉までは、採集資料や遺物のみ出土した遺跡を加えても、遺跡数は縄文時代と同様に低調である。また、成重遺跡では、前期以降終末期まで遺構・遺物の出土が認められるが、前期前葉・中期前葉・後期前葉頃に、短期間にながらも空白期が存在し、確認された竪穴建物数の時期別の偏差等、安定した経営がなされたわけではないことが指摘されている（信里 2004）。居住域の移動は頻繁になされていたようだが、その背景は明確ではない。

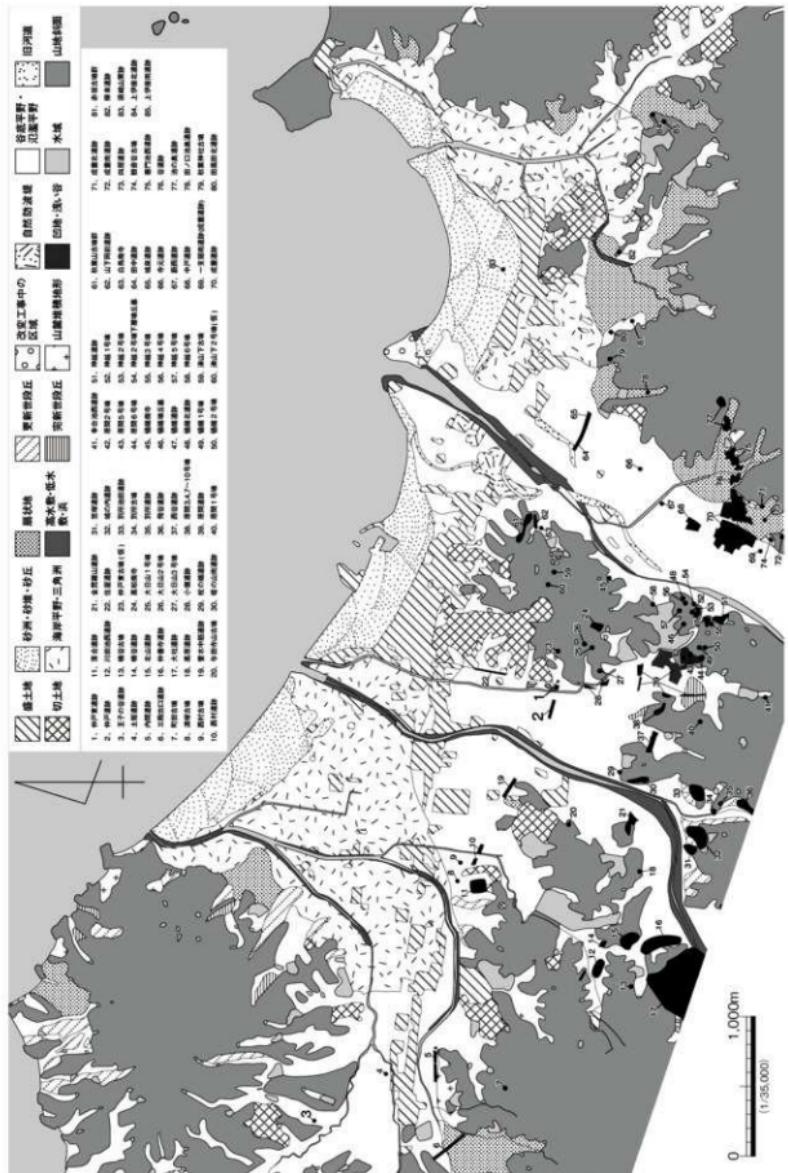
遺跡数の増加傾向が顕著になるのは、中期後葉及び後期後半から終末期である。こうした遺跡の動態と連動するかのように、丘陵縁辺に位置する池の奥遺跡では、中期中葉～後葉の竪穴建物群より、柱状片刃石斧を主体とする多量の磨製石器類やサスカイト素材が出土し、集落間での分業の可能性が指摘されている（信里 2004）。居住人口の増加が、まず遺跡単位での分業を促進したものと評価できよう。

原間遺跡では、後期後半から古墳時代前期初頭の大型竪穴建物への鉄器と玉類の集中保有が明瞭に確認され、後述する樋端・寺田墳墓群での埴丘墓の様相とも関係して、非自給物資の専有や居住施設の格差が、階層性を表示する機能を具備していた可能性も考えられる。

後期には、墓域も顕在化する。後期前葉には、成重遺跡で成人用埋葬施設としての木棺墓と小児用埋葬施設としての土器棺墓が成立する。土器棺には、生駒西麓産の広口壺が使用されており、これら墓制の導入絆縛を暗示しているのかもしれない。成重遺跡に導入された弥生墓制は、後期中葉以降、成重・原間遺跡で集落内埋葬として継続する一方、樋端・寺前遺跡の丘陵上で集団墓を形成する。

樋端遺跡では土壙墓 35 基、土器棺墓 21 基が、寺前遺跡では土壙墓 41 基、土器棺墓 15 基がそれぞれ検出された（樋端遺跡は丘陵鞍部を介して北丘陵の墓群と南丘陵の墓群に分割され、北丘陵の墓群は寺前遺跡と同一丘陵に展開する。したがって報告書とは異なり、樋端遺跡北丘陵の墓群を寺前遺跡に含め、樋端遺跡南丘陵の墓群のみ樋端遺跡とする。）。副葬品は乏しく、鉄鎌と鉄鎌各 1 点が出土したのみで、おそらくは棺固定のための石材の有無に、僅かな差異を見出せるのみで、各墳墓は等質的な集団墓の様相を呈する。

埴丘墓は、墓域形成の嚆矢となった樋端台状墓と終末期に下る樋端埴丘墓の 2 基が確認されている。台状墓は土壙墓群と近接して築造されているが、埴丘墓は鞍部を介して同一丘陵上ながら偏在し、集団墓からの離脱傾向が伺える。また、埋葬施設への竪穴式石室の導入や水銀朱の使用など、土壙墓群とは乖離した埋葬儀礼を導入していることも重要であり、前期古墳成立へ他地域と同様な歩調をとっていたものと評価したい。



第3図 連跡周辺地形分類と道路分布図

古墳時代

集落

原間遺跡の集落は、前期初頭頃まで経営が維持され、以後本地域での集落の動態は不明瞭となる。原間遺跡にみられる動向は、香川県下の各地域で概ね共通し、弥生終末期以降、集落遺跡数は大きく減少するようだ。

次に本地域で居住構造が顕在化するのは、須恵器出現前後の前期末～中期初頭である。成重遺跡で堅穴建物が確認されているほか、金毘羅山・田中・城泉・仲善寺の各遺跡で遺構・遺物が出土しており、遺跡数は飛躍的に増加する。なお、成重遺跡では、韓式系土器平底鉢片が出土しており、後述する原間6号墳の内容とも絡めて、本地域の集団が大陸と何らかの接点を有した証左となろう。

また城泉遺跡では、中期後半とされる旧河道より碧玉製管玉、石製紡錘車、有孔石製品、耳環などとともに、刀形、劍形などの木製品が多量に出土し、祭祀に伴う可能性が指摘されている。

やや空白期を挟んで、TK208～47型式併行期には原間遺跡で堅穴建物群が検出されており、隣接する古墳群の被葬者集団との関係が考えられよう。続くMT15～TK10型式併行期には、住屋・金毘羅山・善門池西遺跡で建物群が検出されている。比較的短期で集落經營が終焉する遺跡が多いなかで、住屋遺跡はその後TK217型式併行期まで建物遺構が営まれ続けるようであり、古川下流の海浜部に立地し、陸海上交通の要所を占める拠点的性格が付与されよう。また、仲戸東遺跡の埴輪窯經營期をそのなかに含み、近接した位置関係からもその関係性については検討課題である。

墳墓

本地域の前期古墳としては、これまで大日山古墳のみが知られていたが、近年調査例が増加してきている。大日山古墳は、全長約38mの本地域唯一の前方後円墳で、刎抜式石棺の出土が伝えられ、円筒埴輪が採集されている。これが事実とすれば、前期後葉の築造と考えられるが、前方部が撥形を呈するなど、やや古い様相も見受けられ、築造時期を含め詳細は今後の調査を待ちたい。

湊山下古墳は、径20m程度の円墳で、堅穴式石室と割竹形木棺を直葬した粘土櫛、小児用の箱式石棺の3基の埋葬施設を有する。その内容や規模は、高松市国分寺六ツ目古墳に近似し、近接した時期の築造の可能性が考えられるとともに、六ツ目古墳が全長21mの前方後円墳であるのに対して、湊山下古墳が円墳である点は、被葬者の政治的位相の差を反映しているものとして興味深い。湊山下古墳が所在する前山丘陵には、前～中期の古墳の存在が知られるようになってきており（仲戸東古墳・山下岡前遺跡ST01・02）、今後の調査の進展により、後述する原間古墳群成立の経緯も明らかとなるに違いない。

また、堅穴式石室、石蓋土壙墓、箱式石棺墓等で構成される塔の山南遺跡と金毘羅山遺跡については、時期決定の根拠となる遺物は出土しておらず、弥生期の墳墓と考えられてきた。しかし、墓域内に土器棺葬を伴わないこと、小児埋葬として箱式石棺が採用されていることなどから、古墳時代前葉以降の墳墓を考えたい（藏本2012）。

中期には、原間・樋端地区に墓域が移動する。既述したように、前山丘陵でも中期古墳の築造が継続した可能性が高いが、有力墳の築造は原間古墳群へ移動する。原間6号墳は、径30mの円墳で、木櫛木棺に三累環頭太刀、三角板皮綴短甲、頭甲、肩甲、有肩鉄斧など豪華な副葬品を有する單葬墳で、TK216併行期に築造されたとみられる。埋葬施設や副葬品の内容から、その被葬者像や職掌として、早くから韓半島との関係、瀬戸内海を介した海上交通路へのアクセスが指摘されてきた。

本墳に先行するとみられる古墳も同一丘陵上に所在するが、未調査のため詳細不明である。後続する原間5号墳は、径20mの円墳で、埋葬施設として2基の箱形木棺の直葬が検出されている。副葬品はなく、6号墳の後継首長としての調落は著しい。TK208型式併行期の築造とされる。

既述した未調査の1基を含めた3基は、後述する古墳群と異なり、周辺に近接した時期の古墳を伴わず、各々が単独で立地する首長墓墳である点に特徴を見出せ、強いて言えば前期的な様相を認めることもできよう。また、原間6号墳にみる特殊性は、それが次世代に継続されなかつたことから、その特殊性のありかが、集団ではなく、被葬者個人に帰納されるものであったことを示していよう。

原間5号墳の築造以降、TK23・47型式併行期には、3群9基の古墳が築造されている。いずれも径10mクラスの小円墳で、粘土塚や木棺直葬、箱式石棺など埋葬施設は多様である。少量の鉄製武器や農耕具類を副葬するのがやっとで、副葬品を欠落するものが多く、調落傾向は一段と進展する。その被葬者像も、前代の地域統括者の様相から後退して、より狭小な領域のリーダー的性格へと変化したとみたい。そうした変化が何を背景として表出したのかは、集落遺跡の動向や他地域との比較などを通じて、検討する必要がある。

本期には、さぬき市大井七ツ塚古墳群、三木町権八原古墳群、綾川町末則古墳群、同岡の御堂古墳群など、県下で計20基未満の小円墳で構成される古墳群が増加する。なかには甲冑を副葬する古墳もあり、被葬者像もさまざまのようだ。既述したように、本期以前に半島地域との交流がみられることを示した。古墳数の増加は、半島からもたらされた技術や情報により、各種の生産活動や開発が活発になされたことを背景としていよう。

原間・樋端地区の造墓活動も中期末には終焉し、後期には継続しない。本地域では、後期前葉の古墳の動向は不詳である。この空白期に、仲戸東遺跡で埴輪の生産がなされる。既述した原間・樋端地区の諸墳には埴輪は導入されず、本遺跡での埴輪生産は唐突ともいえる様相を呈する。香川県下では、TK10型式併行期前後に善通寺市王墓山古墳や観音寺市ひさご塚古墳において、中期前葉以降途絶えていた前方後円墳の築造が再開し、坂出市雄山古墳群や王墓山古墳において初期の横穴式石室が導入される。本遺跡における埴輪窯の築造も、こうした変革期的動向と無関係ではなかろう。

本地域に再度古墳が築造されるのは、TK43型式併行期の神越2号墳で、横穴式石室の導入を伴う。以後、TK209型式併行期に原間2号墳、神越5号墳、藤井古墳、TK217型式併行期に原間1号墳、成重1・2号墳などの横穴式石室墳が相次いで築造される。これらの古墳は、玄室床面積を基準に比較すると、3m程度の成重1・2号墳、5m前後の神越2号墳、藤井古墳、(神越5号墳)、8m前後の原間1・2号墳の3群に分類され、各々被葬者の階層差を表示している可能性がある。

古代

律令期には、大内郡が置かれ、管内には引田・白鳥・入野・与泰の四郷があった。遺跡周辺は白鳥郷に含まれる。大内郡はもと小郡であったが、『続日本後紀』承和10(843)年5月8日条に「又讃岐国大内郡小郡。只有領帳。領則領調入京。帳猶留。國釐務。非常移病。无入從公。加郷戸田数。既堪下郡。改爲下。加領一員焉。」(黒板1971)とあり、郷戸田数の増加などを理由に下郡に改め、領一員を加えている。

讃岐国内を東西に横断する古代南海道は、現在の地表面にみられる一町四方の方格地割(条里型地割)及び余刺帶の分析作業から、ルート復元が進められてきた(金田1988)。本遺跡周辺の与田川流域では、

真北より約7度東偏した条里型地割が、隣接する漆川流域では同様に約34度東偏した条里型地割がそれ respective 広がり、現国道11号付近に余刺帶の存在が指摘され、古代南海道と推定されてきた。考古学的な検証は今後の課題だが、大内町坪井遺跡の調査成果より、その施工時期は8世紀中頃との推定がなされている。

与田川流域に分布する条里型地割の施工時期については、今後の考古学的調査の進展を待つ必要がある。仲戸遺跡で検出された条里型地割の方向に合致する溝は、本遺跡周辺での地割施工時期が南海道隣接地域に比して、やや遅れる可能性のあることを示している。

集落

住居遺跡での集落経営の継続とともに、7世紀前葉に原間遺跡において集落が再度成立する。原間遺跡では、8世紀前葉にかけて堅穴建物5棟、掘立柱建物30棟が確認されている。集落の中心は7世紀中葉前後にあり、床面積41.8m²の大型建物に直交する建物が配され、官衙的様相も見受けられる。近接する原間1号墳の被葬者との関係も視野に入れるなら、地域最大規模墳の被葬者の居宅などとの評価も可能であろう。

成重遺跡でも3棟の掘立柱建物が検出され、直接時期を示す遺物に恵まれてはいないが、近接する土坑等の遭埋より8世紀代の可能性が推定される。また、田中遺跡でも古代の掘立柱建物1棟が検出されている。

寺院

本地域への仏教施設の導入は、白鳳期創建とされる白鳥廃寺を嚆矢とする。過去の調査により、塔や金堂とみられる基壇や心礎石が検出され、一町四方の寺域に南滋賀廃寺式の伽藍配置が想定されている。隣接する北側丘陵斜面には焼土や炭化材の散布が確認され、瓦窯の可能性がある。法隆寺式の一様式とみられる八葉複弁蓮華文軒丸瓦や型挽きによる四重弧文軒平瓦より、白鳳期の創建とされる。また近年には、隣接する山下岡前遺跡の調査により、塑像螺髪が出土し、9世紀代の僧坊と考えられる掘立柱建物群が確認されている。

墳墓

成重遺跡では、8世紀代の土壤墓群32基が検出されている。墓壙は、長軸1.4～2.2m、短軸0.6～1.2mの平面隅丸長方形のプランを呈し、基本的に副葬品を伴わず、列状に配される特徴を有する。以後12世紀代と14世紀代、15～16世紀代にかけて類似した墳墓群が形成されている。類似した墳墓は、徳島県敷地遺跡などで検出されている。

引用・参考文献

- 香川県教育委員会編 2000『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第36番 金毘羅山道路1・塔の山南道路・庵の谷道路』
香川県教育委員会編 2005『県道大内白鳥インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 原間道路』
金田章裕 1988『「吉岐の条里遺構」[香川県史]第一巻通史編、香川県』
藏本晋司 2012『四国「古墳出現と展開の地域相」』、同成社
黒板勝美編著 1971『新訂増補国史大系〔普及版〕 続日本後紀』吉川弘文館

第3章 仲戸遺跡の調査

第1節 概要と調査の方法

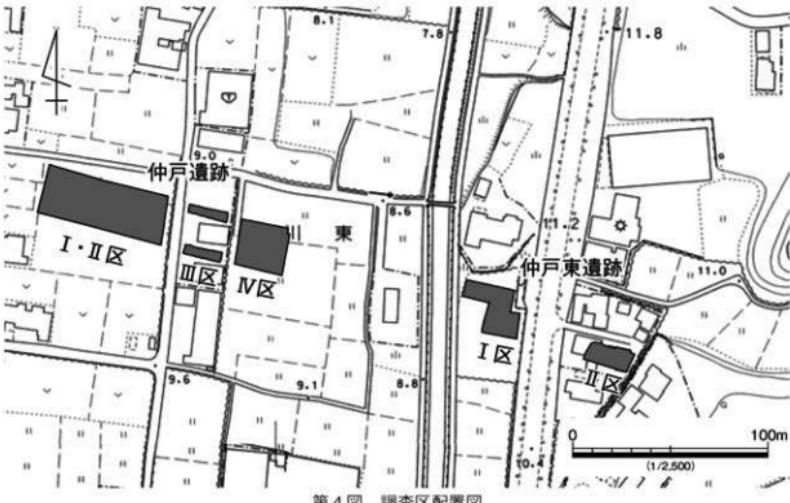
調査区は、南北幅約25m、東西延長約129mと東西にやや長い配置となっており、現地表の地割りや調査工程等によって、I～IV区に区分して調査を実施した。各調査区の面積は、I区848m²、II区786m²、III区1,011m²、IV区1,050m²である。なお、各調査区の配置は、第4図のとおりである。

調査前は、I・II・IV区は水田等の耕作地、III区は宅地として利用されていた。I・II区の調査前の地表面の標高は9.18～9.54m、III区は9.45m、IV区は8.60mである。

測量に要する基準杭については、業者に委託し設置した。発掘区内のグリッドは設定せず、包含層等より出土した遺物については、おおよそ各調査区を四分割して取り上げ、とくに重要な遺物については、トータルステーションで出土位置を記録した。

調査においては、遺構検出面までを重機により掘削し、以下を人力により掘り下げをおこなった。III区を除く各調査区で薄い包含層堆積を確認したが、それらはすべて人力で掘り下げている。

調査着手前より各調査区において、埋没旧河道の存在が予想されていたので、各流路の平面プランと堆積状況、埋土各層の堆積時期の確認を目的に掘り下げをおこなうこととした。また、I・II区では、柱穴や土坑等の遺構が試掘調査時に確認されていたので、集落域が検出される可能性が想定された。明確な居住遺構は確認されなかつたが、検出された溝・土坑等の遺構については、平面プラン確認後小トレンチを設定して半裁し、土層の堆積状況を確認・記録した後、遺構を三分割ないし四分割したおおよその平面位置と、出土層位を基準に遺物を取り上げつつ掘り下げをおこなった。なお、遺物については、



必要に応じて、トータルステーションで出土位置の記録と出土状況の写真撮影をおこなった。

第2節 基本層序

土層序の観察は、I・II区では調査区西・北・東壁、III区では調査区北壁、IV区では北・西・南壁においてそれぞれおこない、土層断面図に記録した。

I・II区では、現在の耕作土下に近世後半以降と考えられる数層に細分される旧耕作土（第5・6図5～7・12～18層）の水平堆積が確認され、旧耕作土層を除去すると、調査区西半部で、にぶい黄橙色～褐灰色シルト・灰白色～暗灰黄色粗砂混粘土層（第5・6図21～24層、包含層I）が、SR06上面を中心に露出する。本層は、下位層の影響により、観察位置で土質や色調に若干の差異を認めるが、基本的に2層に細分され、出土遺物より中世後半～近世初頭を中心とする時期の作土層と考えられる。本層上面で、近世以降と考えられる土坑（SK04）が検出され、これを第1遺構面aとする。遺構面上の標高は、8.76～9.20mである。

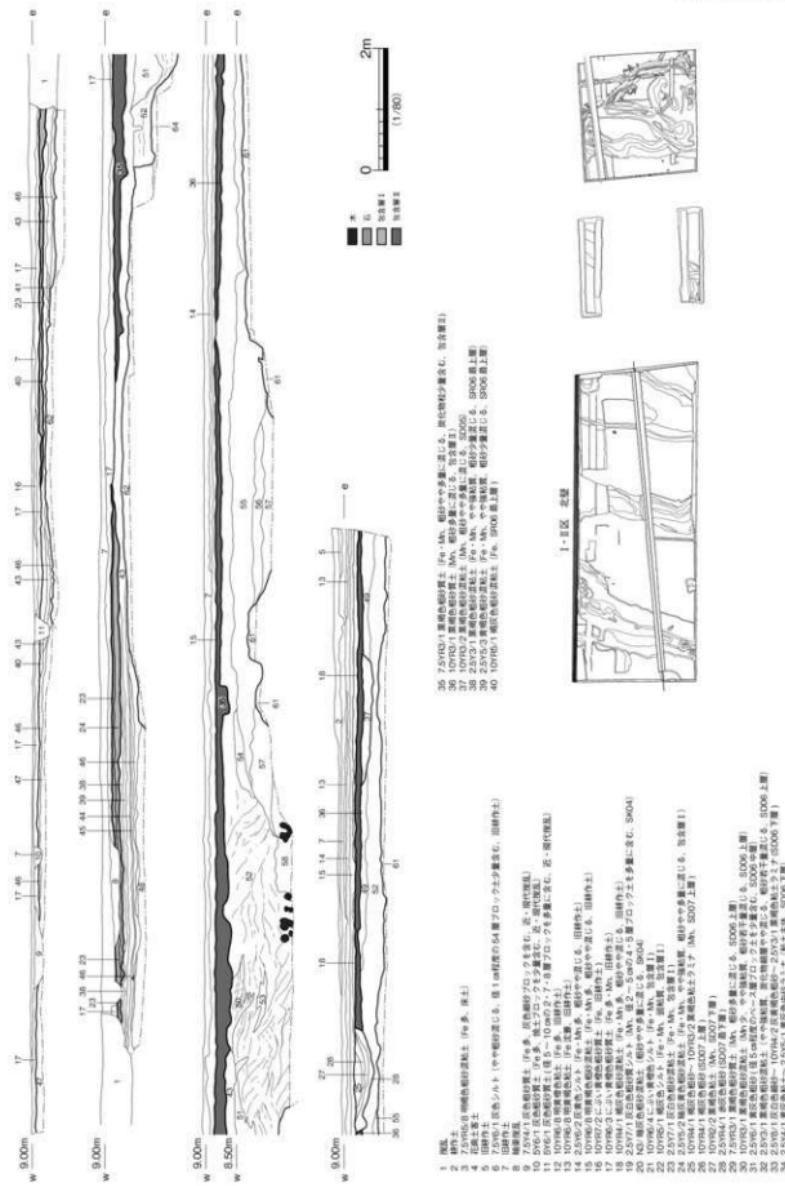
調査区東半部では、包含層Iは近世以降の耕地開発に伴う地下げ等により削奪され残存せず、黒褐色粗砂質土（第5・6図35・36層、包含層II）がSR04上面を中心に分布する。本層上面で、中世後半～近世と考えられる土坑（SK02・SK03）や弥生時代終末期～古墳時代前期前葉の溝（SD06・SD07）を検出し、本遺構面を第1遺構面bとする。本遺構面は、調査区東半部では、近世以降の旧耕土層下で検出され、第1遺構面aと同一面となるが、所属時期は異なるため、別遺構面として報告する。なお、調査区西半部では、包含層I下面が本遺構面に相当する。本遺構面の標高は、8.70～9.10mである。

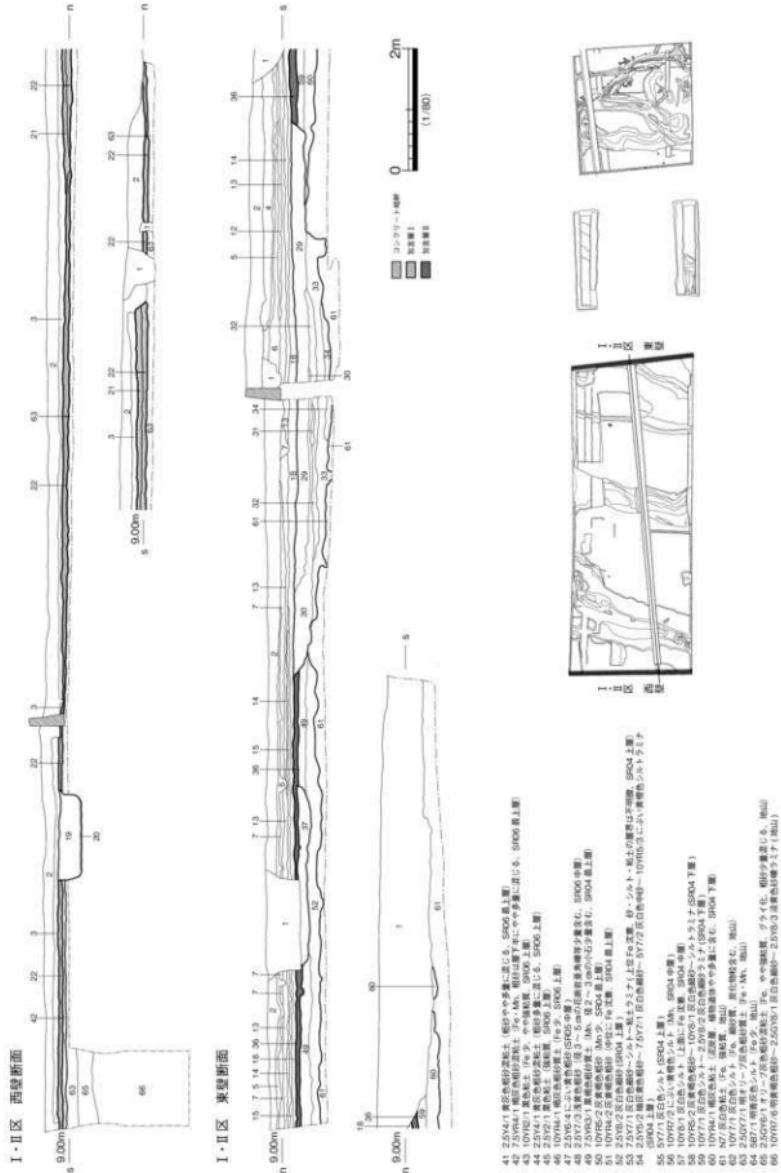
第1遺構面bのベースとなる包含層IIからは、弥生時代終末期前後を下限とする遺物が出土しており、当該期の堆積層と考えられる。本層下面で、縄文時代後・晚期と弥生時代後期前葉の旧河道（SR04・SR05・SR06）や弥生時代後期後半の溝（SD05）を検出し、本遺構面を第2遺構面とする。本遺構面の標高は、8.58～9.10mである。

III区は宅地となっていたため、現地表下0.9m程度花崗土で盛土されていた。盛土層下には、2～3層に細分される宅地造成前の旧耕土層が最大0.2m程度残存しており、盛土及び旧耕土層下に縄文晚期の旧河道SR03の埋土が、調査区のほぼ全域で確認された。遺構面の標高は8.50m前後である。ベースは、I・II区と同じ灰白色粘土（第7図9層）が連続する。

IV区では、現在の耕作土下に1～2層に細分される近世後半期以降と考えられる旧耕作土層の水平堆積が観察され、旧耕作土層下に調査区西南部を中心に暗灰色砂混粘土層（第8図9層、包含層I）が水平堆積する。本層からは遺物は出土していないが、後述する包含層IIとの関係より、中世後半期に下る包含層と考えられる。本層下面で、調査区西半部を中心に柱穴を確認しており、これを第1遺構面とする。本遺構面の標高は、8.20～8.32mである。

包含層Iを掘り下げるに、調査区北西部を中心に褐灰色中砂混粘土層（第8図11層、包含層II）の水平堆積が確認された。本層からは、須恵器杯や土師質土器足釜等の遺物が出土しており、中世前半期の作土層の可能性がある。本層下面で、中世初頭の溝（SD01）や弥生時代の溝（SD02～SD04）、縄文時代～弥生時代の自然河川（SR01・SR02）を検出しており、本層下面を第2遺構面とする。本遺構面の標高は、8.10～8.25mである。





第6図 I・II区調査区東・西壁土層断面図



第3節 遺構・遺物

縄文時代の遺構・遺物

自然流路

SR01・SR02 (第9・10図)

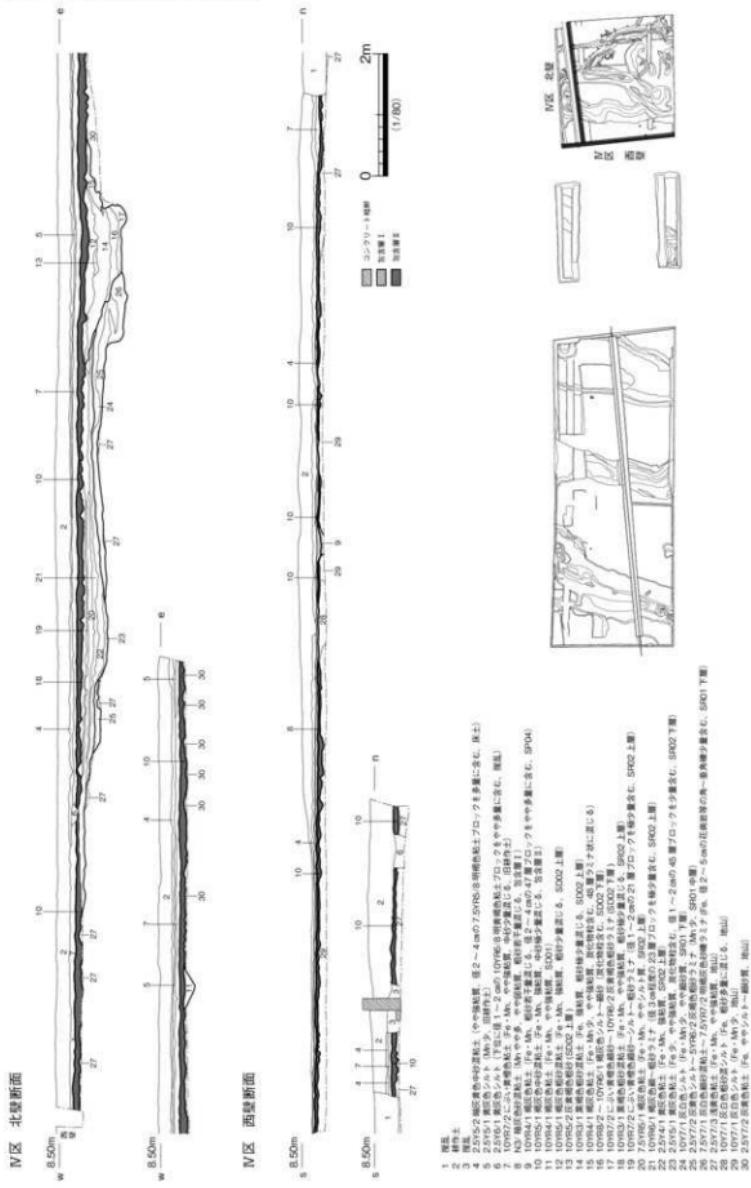
いずれもIV区第2遺構面で検出した旧河道である。挿図では、SR02上層堆積を掘り下げ、SR01の平面プランを検出したレベルで作図したため、両流路は重複のない個別の流路として図示しているが、土層図に示されるように両流路は重複し、切り合い関係よりSR01がSR02より先行する。また調査区南端部では、半円形状の大きな落ち込みとして検出され、おそらく両流路の重複以外に、別の流路が重複して流下していた可能性も考えられたが、平面プランとしては把握できなかった。

SR01は、緩やかに蛇行しながら北東から北に流下する。検出面幅2.95~3.47m、残存深0.7m、断面逆台形形状を呈する河道で、底面は水流により抉れた窪地が、流路方向に平行して認められた。埋土は、灰褐色粗粒砂や明褐灰色砂砾などを主とし、灰黄色シルトや灰白色粘土が介在するラミナの顯著な水成層で、比較的短期に埋没したと考えられ、上面に灰白色シルトが覆う。

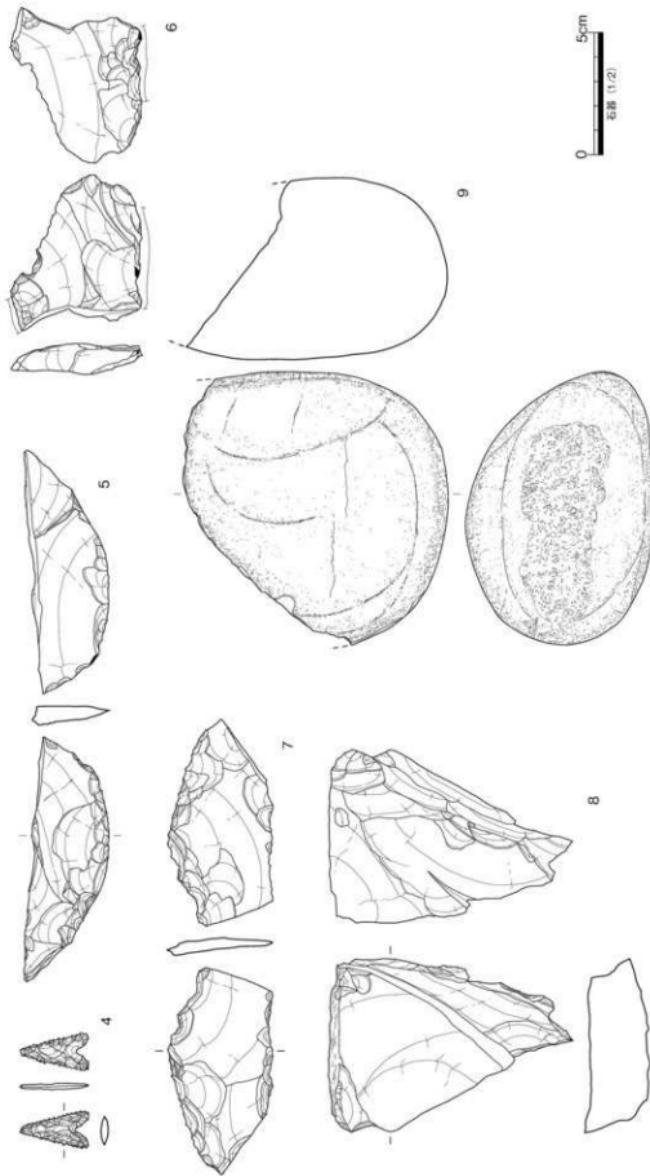
SR02は、調査区南半部で北西方向から大きく蛇行して北東に流下する河道である。北半部検出面幅3.25~4.21m、残存深0.38m、断面は逆台形ないし椀底状を呈する。底面は、蛇行部を中心に、水流による影響を大きく受け、土坑状の窪みが隨所に認められた。埋土は、橙色ないし灰褐色の細~粗流砂、黄灰色ないし褐灰色粘土がラミナ堆積する水成層である。

遺物は、SR01及びSR02下層より縄文土器やサヌカイト製石器が、SR02上層より弥生土器やサヌカイト製石器等がそれぞれ少量出土した。いずれも器種不詳の小片が大半を占め、図化可能な資料は乏しい。1・3がSR01出土資料である。

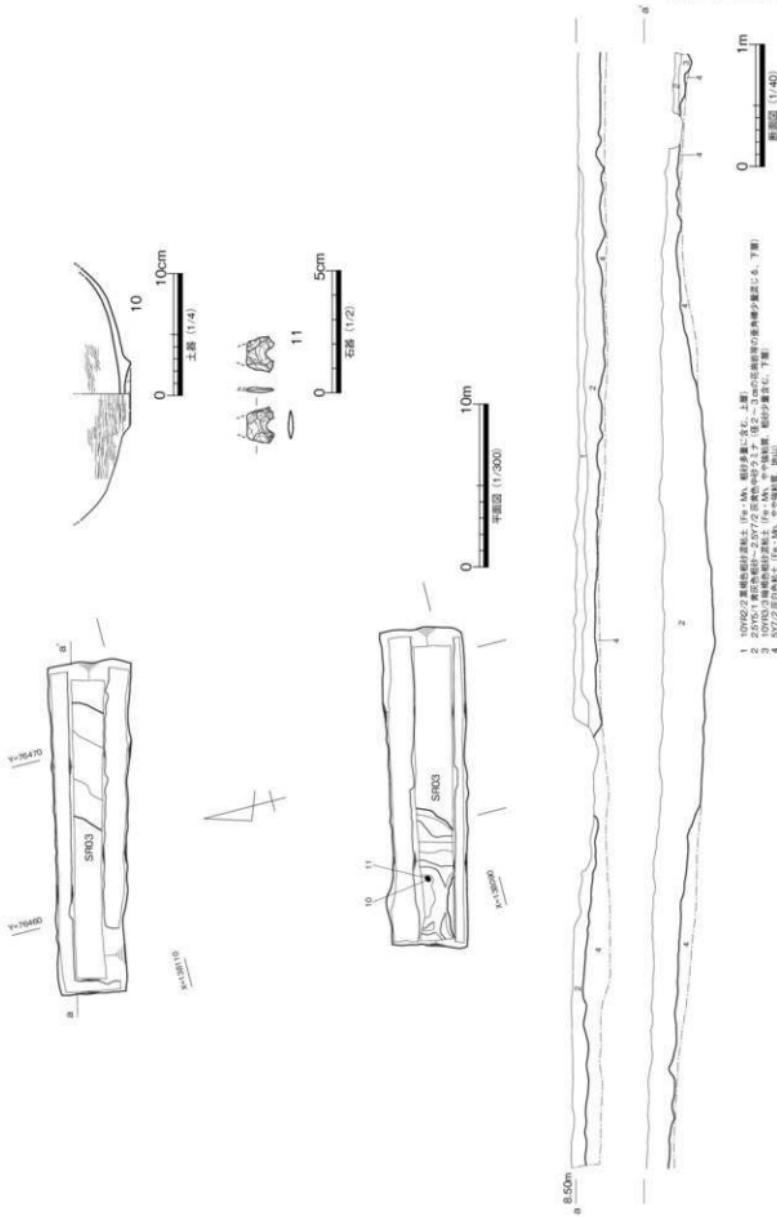
1は波状口縁を有する浅鉢の口縁部小片で、波頂部は大きく肥厚するが、加飾に乏しい。縄文後期



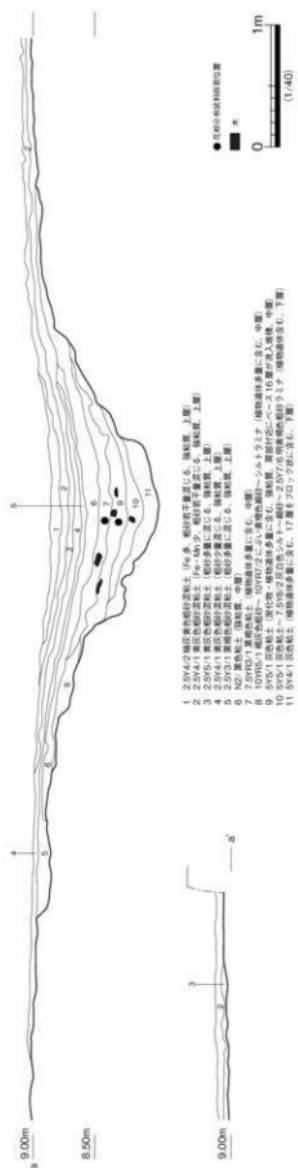




第10図 SR01・SR02出土遺物実測図2



第11図 SR03 平・断面図・出土物実測図



に週り、SR01埋没の上限を示唆する資料である。**3**はSR01下層出土の焼土塊である。図左面に幅0.8cm程度の棒状の圧痕2条が縦方向に併走し、本面を中心に熱変による赤色化を認める。素地粘土はほとんど砂粒を含まず緻密である。

4～6・8・9の石器が、SR02下層出土の資料である。打製石鏃**(4)**、スクレイパー**(5)**、楔形石器**(6)**、石核**(8)**がある。**9**は、デイサイトとみられる円盤を使用した叩石。下端面を中心に顕著な敲打痕を認める。

2と**7**が、別の流路と考えられる位置から出土した遺物である。**2**は、口縁部内面が肥厚する浅鉢で、内外面磨滅のため調整等は不詳である。**7**はサスカイト製の剥片である。

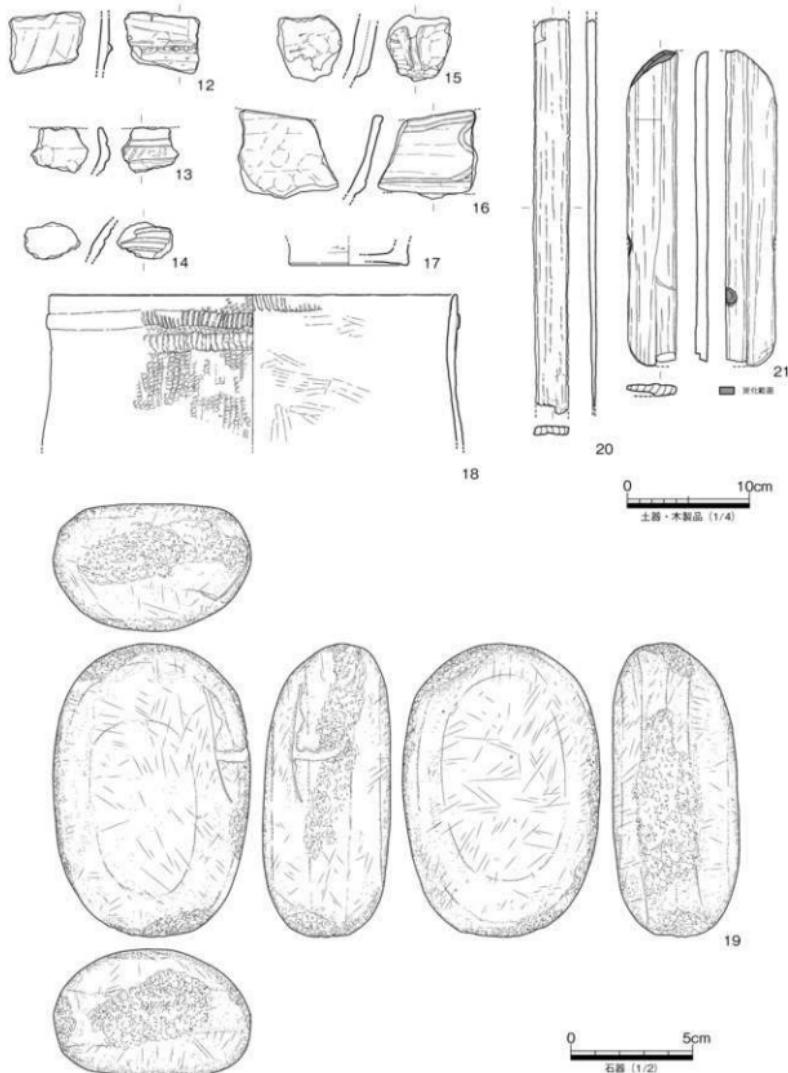
上述した出土遺物だけでは、各々の流路の埋没時期を積極的に特定することは困難と考える。周辺の調査の進展により、良好な出土遺物が得られるまでは、SR01が縄文時代後期を上限とし、弥生時代まで下降しないこと、SR02が弥生時代に埋没が下ることを指摘するにとどめたい。なお、SR02について花粉分析を実施した（第5章参照）。調査当初はSR02を縄文時代後期の構造と考えていたが、上述のように整理の過程でより後出する可能性が高くなつた。分析結果には反映できなかつたため、ここに記載し訂正しておきたい。

SR03（第11図）

III区で検出した旧河道で、南北両端は調査区外へ延長する。調査区のはば全面で流路堆積を確認し流路幅は不詳だが、流路最深部は北東方向に連続するとみられ、およそその流下方向を示してよい。当遺跡では、流路幅は最も広いが、後述するようにその残存深度は浅い。なお、南端部で大きく蛇行して西へ流路を変更するとみられるが、トレチ状の調査区であったため、詳細は不明である。残存深0.61m、断面形は両肩部が緩やかに落ち込む皿状を呈する。

埋土は、2層に細分された。下位層は黄色系の粗粒～中粒砂のラミナが顕著な上方級化する河成層（第11図6層）で、黒褐色粘土の低湿地堆積層（同図5層）が上面を覆う。

遺物は、図示した以外にはローリングを受けた器種不詳の縄文土器小片等が極少量出土したのみである。**10**は晩期浅鉢底部片、**11**は凹基式石鏃。脚部の加工が粗雑で、未成



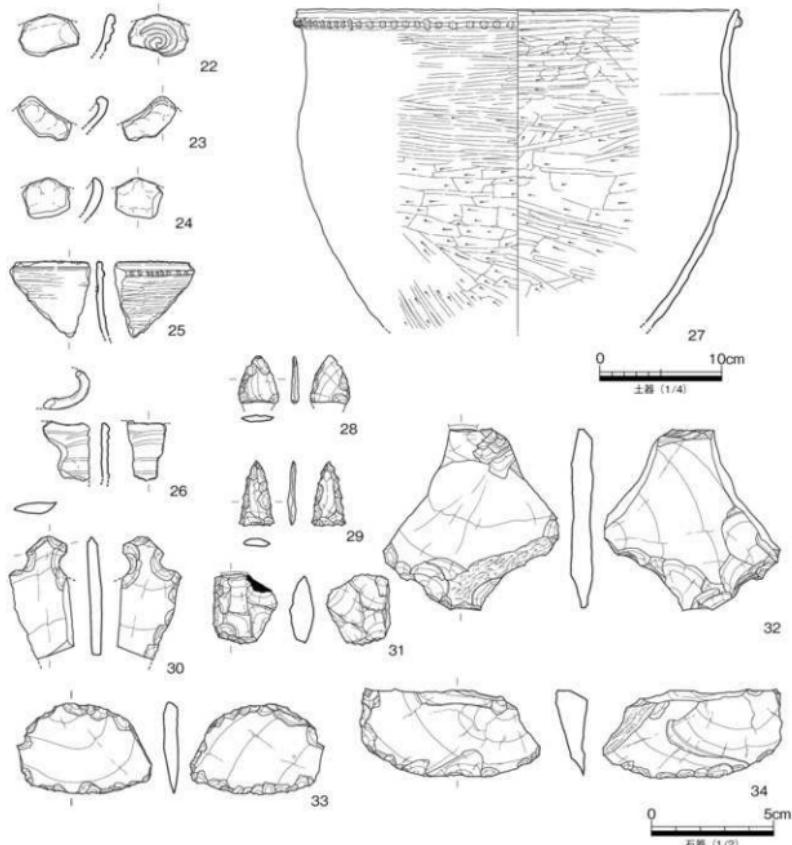
第13図 SR06 下層出土遺物実測図

品の可能性が高い。いずれも下層出土の資料である。出土遺物より、後述するI区SR06下層と近接した時期に流下していたことが考えられる。

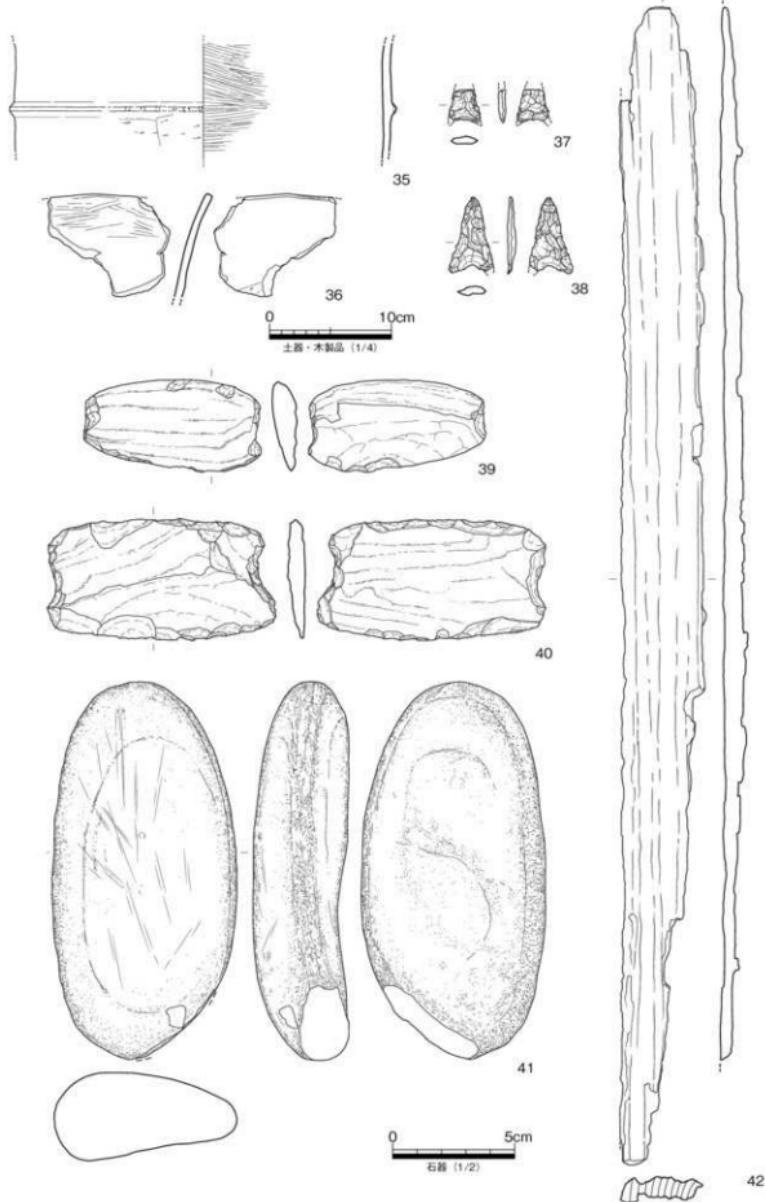
SR06（第12～15図）

I・II区西半部で検出した旧河道で、北東方向へ流下し、南北両端は調査区外へ延長する。北端付近でSR05が分岐して、北へ流下する。検出面幅7.32～11.21m、残存深142m、断面形はやや歪な逆台形状を呈し、底面は流水による影響のためか土坑状の凹凸を顕著に認める。

埋土は11層に細分され、調査時には5層に大別して遺物を取り上げたが、以下では3層にまとめて報告する。上層（第12図5～9層）は、流路上面に薄くレンズ状堆積した土壤で、中位と下位に一時的な流水による粗粒砂を多量に含む堆積を認めるが、基本的に穏やかな環境下で自然堆積した土壤であ



第14図 SR06 中層出土遺物実測図



第15図 SR06 上層出土遺物実測図

る。洪水による冠水と離水が繰り返される環境下にあったようだ。中層（同図10～13層）は、滞水と流水状況を交互に繰り返す河道機能時の堆積層で、植物遺体を多量に含む。下層（14・15層）は、中層と一連の堆積層で、流路底面に堆積した埋没初期の堆積層として区別する。

遺物は、中・下層を中心に、縄文土器やサヌカイト製石器、結晶片岩円礫などがコンテナ1箱程度出土した。**12～18**が下層、**22～27**が中層出土のそれぞれ縄文土器である。**18**は、口縁端部直下の隆起帶上及びその下位に平行する爪型文を、内面にも爪型文をそれぞれ配する船元Ⅱ式に遡る資料である。**27**は晚期突帯文土器で、突帯文期中葉前後の資料と考える。本流路埋没の下限を示す資料である。なお、**35・36**など、突帯文期の資料は上層からも出土しており、本流路は比較的短期間に埋没したことと考えられる。**13・22～24**は、体部が内湾しながら開く浅鉢で、いずれも口縁部は波状を呈する。**22**の外面には1条の沈線により渦状文を描く。**13**は2条の沈線間にからうじて縄文を認める。**25**は浅鉢でしたが、別の器種の可能性もある。**16**は、外傾する体部より口縁部が緩やかにく字状に屈曲し、波状を呈する深鉢で、口縁部外面に2条の沈線を横走させ、その間にS字状の文様を描く。**14**は外面に3条の沈線を描く。**15**もく字状に屈曲する口縁部を有する深鉢で、外面を縦方向の隆帯により分割し、その間に横走する沈線を描く。**13～16**などの縄文時代後期に遡る資料は、器表面が磨滅し、細片化したものが多く、混入の可能性が高い。**17**は深鉢の底部片か。**27**は異形の容器形土器として図示した。外面には沈線による線刻を認めるが、磨滅が進んでおり不明瞭である。

19は、ランプロファイアの円礫を使用した叩石で、周縁に顕著な敲打痕を、また表裏面は光沢痕を認める。**28・29・37・38**はサヌカイト製の打製石鎚で、**28**は未成品とみられる。**30**は、縦形のサヌカイト製石匙。頂部に比較的大きな摘みを付す。**33・34**はスクレイバー、**31**は楔形石器、**32**は石核である。**39・40**は、上層出土の打製石庖丁で、いずれも徳島県吉野川流域産の結晶片岩の扁平な亜円礫を使用する。上層の堆積は、弥生時代に下る可能性も考えられるが、時期を特定できる土器資料は出土していない。**41**は、砂岩円礫を使用した叩石で、左図右側縁部を中心に敲打痕を、同図正面に擦痕を認める。

20は、下層より出土した板材である。器表面は腐食等により、調整痕は認めない。**21**は上下両端を弧状に加工した板材で、一部が炭化する。**42**は、上層より出土した長さ95cm以上の板材で、建築部材と考える。

弥生時代の遺構・遺物

溝

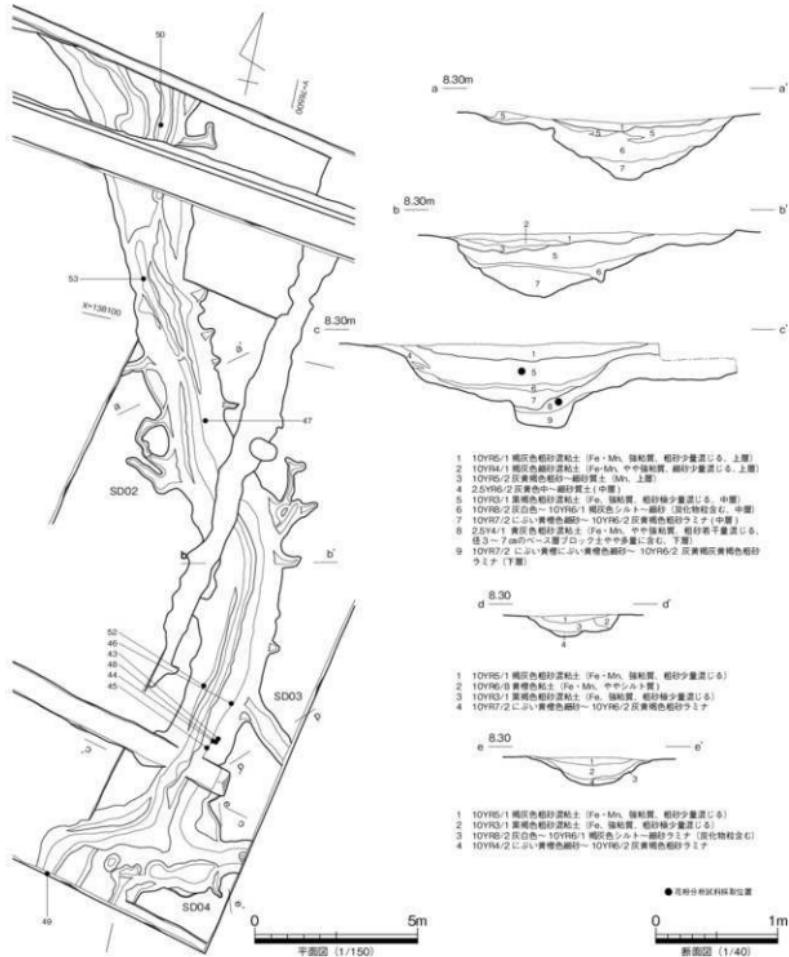
SD02（第16・17図）

IV区東半部で検出した溝で、流路方向は南半部で概ねN 5.19° E、北半部でN 26.62° Wと、調査区中位で大きく屈曲して北西方向へ配される。南東隅部でSD03・SD04が合流・分岐する。規模等より、幹線水路と考えられる。検出面幅2.06～2.43m、残存深0.52～0.70m、断面形は椀底状ないしは逆台形状を呈する。底面の標高は、南端部で7.57m、北端部で7.49mを測り、高低差より北へ流下するとみられる。

埋土は、9層に細分され、3層に大別して遺物を取り上げた。上層（第16図1～4層）は、褐色系粘土を主体とする堆積層で、下位に粗粒砂等を含み流水下堆積の可能性が考えられるものの、基本的に溝廃絶後の自然堆積層と考えられる。中層（同図5～7層）は、細～粗粒砂の水成堆積層であり、後

述するように改修後の溝機能時の堆積層と考えられる。下層（同図8・9層）は、改修前の溝の堆積層である。2層に細分され、下位層は溝機能時の堆積層と考えられ、細～粗粒砂がラミナ堆積する。上位層中には、多量のブロック土が含まれることから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

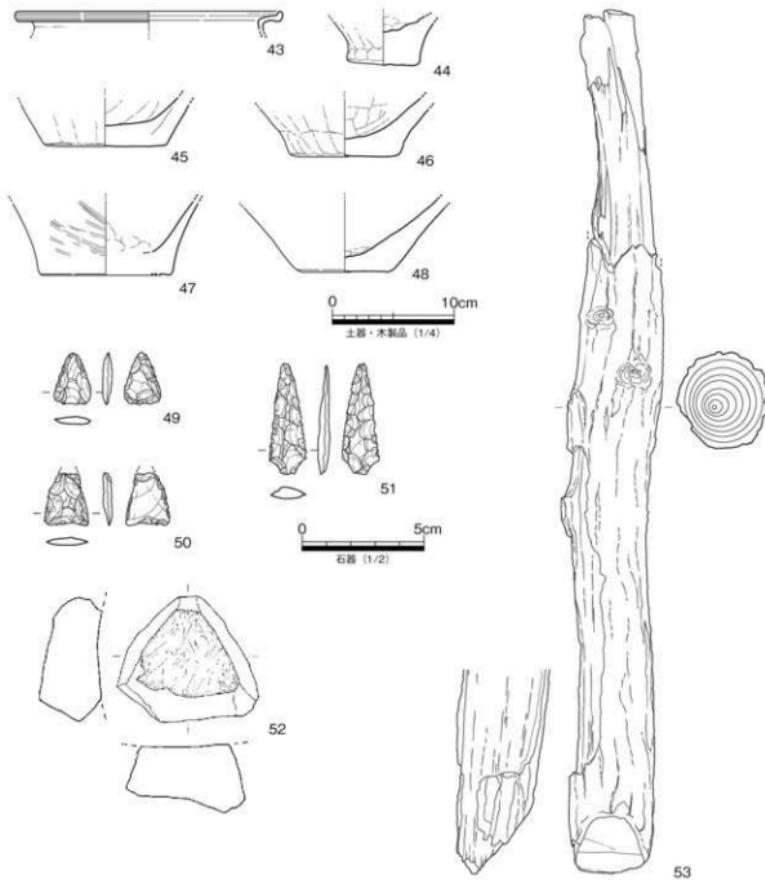
遺物は、弥生土器甕（43）の小片やサスカイト製石器類が、上層を中心にコンテナ半箱程度出土した。図化可能な土器類は上層出土遺物に限られ、底部片が中心となることから、詳細な時期を特定することは困難である。43より、弥生時代中期後葉を上限として埋没したことが指摘できるが、改修溝は埋土



第16図 SD02・SD03・SD04平面・土層断面図

より後述するSD04と同時期に機能していたことが確認され、弥生時代終末期を中心とした時期に埋没し、上掲資料は混入資料と考えられる。49は、サヌカイト製の打製石錐。50も打製石錐だが、先端部が折損しており、未成品の可能性がある。52は細粒砂岩製の砥石。砥面1面を認め、顕著な使用により浅く窪む。

なお、後述するSD08との合流部付近の本溝上層より、ウシの臼歯片2点が出土した。近接して出土したことから、同一個体のものと考えられる。出土位置は埋土上面で、後述するSD05の延長位置にも近く、本来は本溝に帰属するのではなく、SD01もしくは上面の包含層の遺物であった可能性が高い。



第17図 SD02・SD04出土遺物実測図

SD03（第16図）

IV区南東隅部で検出した東西溝で、西端はSD02に合流し、東端は調査区外へ延長する。検出面幅0.73m、残存深0.18m、断面形は逆台形状を呈する。

埋土は4層に細分され、その大半をSD02上・中層と連続することから、SD02改修後に本溝も開削されたと考えられる。上（第16図1～3層）・下（同図4層）2層に大別して、遺物の取り上げをおこなった。

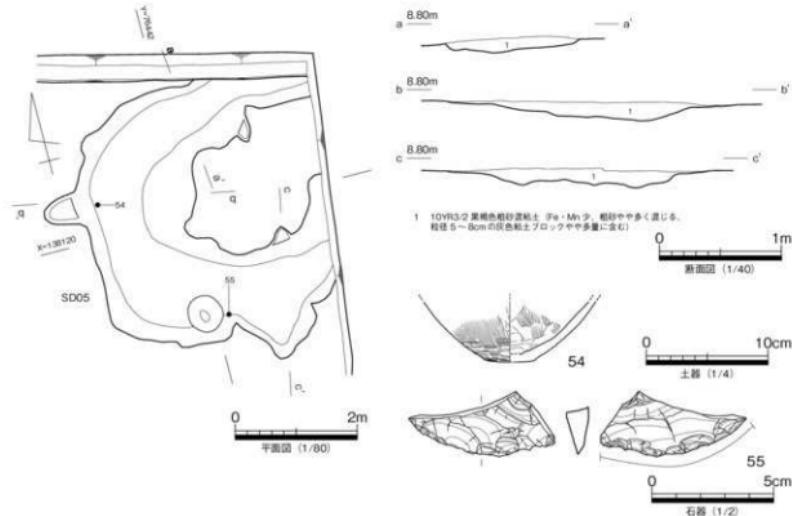
遺物は、器種不詳の土器小片が極少量出土したのみである。時期を特定することは困難だが、埋土よりSD02と同時期に機能していたことを確認しており、弥生時代終末期を中心とした時期に埋没したものと考えられる。

SD04（第16・17図）

IV区東南隅部で検出した溝状遺構で、SD02より分岐して、北東方向へ流下する。検出面幅1.01m、残存深0.21m、断面形は椀底状を呈する。SD02の屈曲部に位置し、底面標高はSD02より高いため、SD02の流水を本溝へ導水するためには、SD02の合流部北側に井堰等を設置する必要があるが、調査では確認していない。

埋土は、4層に細分され、いずれもSD02上・中層と連続することから、SD02改修に際して本溝も開削されたと考えられる。上（第16図1・2層）下（同図3・4層）2層に大別して、遺物の取り上げをおこなった。

遺物は、弥生土器の小片が15点程度出土したのみである。固化可能な遺物はないが、器壁が薄い小形鉢と考えられる土器片が含まれるため、弥生時代後期後半から終末期前後に機能・埋没したことが考



第18図 SD05 平面・土層断面・出土遺物実測図

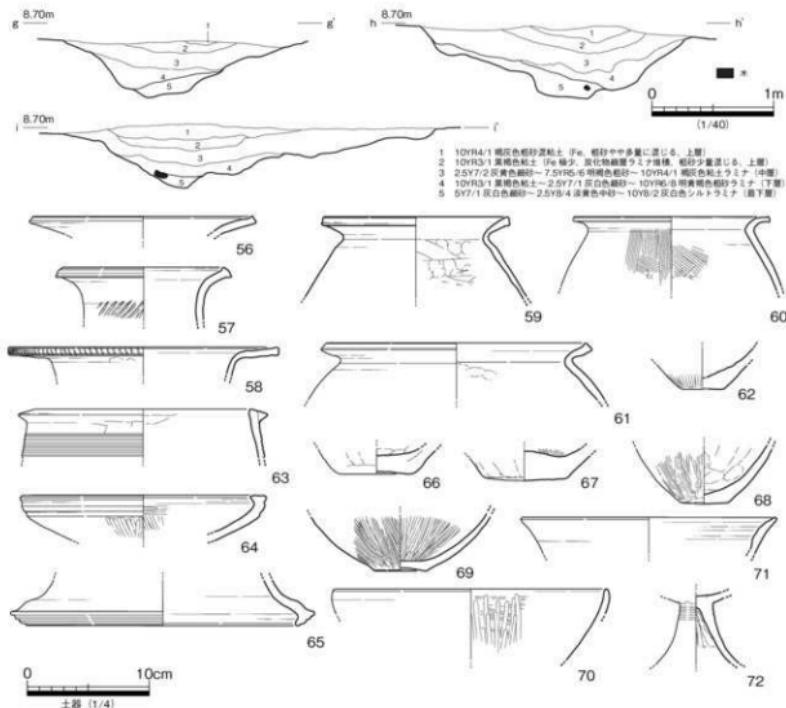
えられる。51はサスカイト製の小型の有舌尖頭器とした。混入資料である。

SD05（第18図）

II区北東隅部第2遺構面で検出した、最短内径1.82m程度の環状を呈する溝である。南西半部を検出し、北東半部は調査区外へ延長するため、全形は不明である。検出面幅1.10～2.38m、残存深0.11～0.16m、断面形は浅い皿状を呈し、底面には細かな凹凸がやや顕著に認められる。底面の標高は、8.55～8.57mと一定しており、後述する埋土の状況からも、給・排水路としての機能は想定し難い。

埋土は、黒褐色粘土の単層で、ブロック土が多量に混入することから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器鉢（54）以外には、器種不詳の弥生土器片やサスカイト製スクレイパー（55）や剥片が若干量出土したのみである。54は小さな平底に張りの強い体部を有することから、概ね弥生時代後期後半を前後する時期に位置付けられよう。55は下縁に刃部を有しスクレイパーとしたが、別の器種となる可能性もある。



第19図 SD06 土層断面・出土遺物実測図



SD06 (第19図)

II区東南隅第1遺構面bで検出した溝である。小刻みに蛇行して北東流し、南北両端は調査区外へ延長する。検出面幅1.85～3.07m、残存深0.44～0.53m、断面形はやや歪な逆台形状を呈し、流路方向は概ねN 43.69°Eに配される。底面の標高は、南端部で8.20m、北端部で8.10mを測り、高低差より北へ流下すると思われる。

第20図 SD06・SD07・SR06・SR07・SR08 平面図

埋土は5層に細分され、上～最下層の4層に大別した。上層（第19図1・2層）は、褐色系粘土層で、上位にやや多量の粗粒砂が混じることから、滞水しないしは弱水流下での堆積が考えられ、溝機能停止後の堆積層である。中～最下層（同図3～5層）は、いずれも流水下の堆積層で、溝機能時の堆積層と考えられる。断面形状より、下層と最下層間で、改修の可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器甕（59～61）、壺（56～58）、高杯（71・72）や古式土器器、サヌカ

イト製石器類等がコンテナ2箱程度出土した。改修前の最下層より出土した遺物は少なく、70の1点が図化できたにすぎない。弥生時代後期中葉前後の遺物と考えられ、改修前の溝の埋没の下限を示している。さらに、改修溝の下層より出土した56・58・69・71等の弥生時代後期末から終末期中葉の遺物が改修時期の上限を示し、上層出土遺物も大差ないことから、改修溝は短期間に埋没したものと考えられる。71は胎土中に角閃石粒を含み、高松平野香東川下流域からの搬入資料である。65は台付鉢もしくは高杯の脚部片としたが、小片のため別の器形となる可能性がある。また、胎土中に多量の雲母粒を含み、64とともに高松平野周縁部からの搬入品の可能性がある。なお、63等の弥生前期末から中期初頭に遡る遺物は混入資料であり、周辺に当該期の遺跡の所在を示唆するものと考える。

SD07（第21図）

II区東半部第1遺構面bで検出した溝である。僅かに蛇行して北東流し、南北両端は調査区外へ延長する。検出面幅1.70～2.12m、残存深0.30～0.37m、断面形は逆台形状ないし椀底状を呈し、流路方向は概ねN43.68°Eに配される。底面の標高は、南端部で8.51m、北半部で8.44mを測り、高低差より北へ流下するとみられる。

埋土は、6層に細分され、2層に大別して遺物を取り上げた。上層が改修溝の堆積層、下層が開削時の溝の堆積層である。上層（第21図1～3層）は、褐～橙色系の粗粒の水流堆積砂を中心とする、改修溝の主たる堆積層である。下層（同図4～6層）は、褐色ないし橙色の細～粗粒砂のラミナ堆積層で、溝開削時の堆積層の可能性がある。

遺物は、下層を中心に、弥生土器壺（73～75）、壺（77～86）、高杯（88・89）、鉢（90・91）、古式土器壺（76）、高杯（87）、土錘（92）、サヌカイト製石器（93～95）等がコンテナ2箱程度出土した。76は球形・丸底を呈する頸・体部の形状より、古墳時代前期前葉の広口壺となろう。78・82・88は高松平野香東川下流域からの搬入土器である。80は庄内甕の模倣土器で、体部内面のケズリ調整や、胎土中の角閃石等の含有を認めない。77は布留系壺である。84は外面が剥離しており、焼成時破裂の可能性がある。92は下層出土の大型の管状土錘である。93・94は打製石鎌。95は石槍だが、折損後楔形石器に転用されたとみられる。96は珪質泥岩製の片刃石斧の刃部小片である。下層より出土した76・77・80・87・90等の弥生時代終末期後半から古墳時代前期初頭の遺物が、本溝の機能時の上限を示しており、上層出土の遺物も大差ないことから、短期間に埋没したものと考えられる。また、73・88等の中層後葉から後期前葉の遺物の混入もみられ、上述した埋土も近似していることから、SD06改修溝とほぼ同時期に機能しており、調査区南側で両溝が合流していた可能性は高い。

自然流路

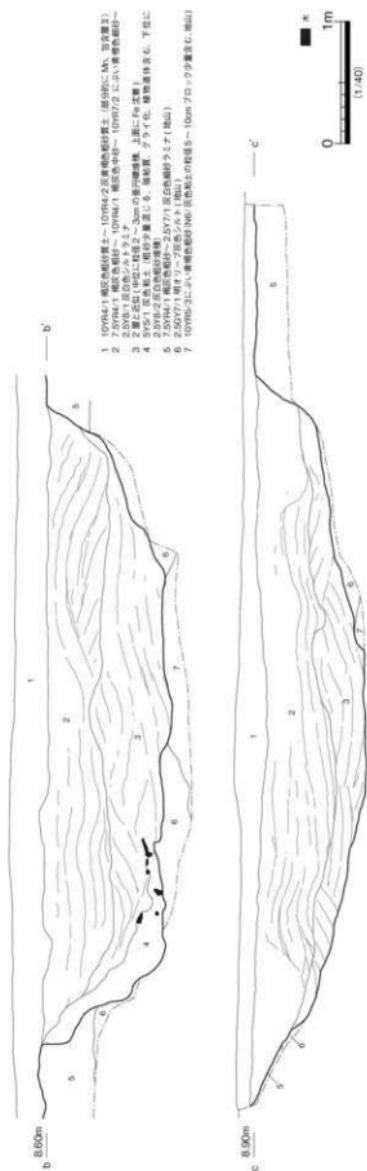
SR04（第22図）

I・II区東半部で検出した北東流する旧河道で、南北両端は調査区外へ延長する。検出面幅5.25～6.0m、残存深1.02～1.09m、断面形は逆台形ないし椀底状を呈する。

埋土は、上下2層に大別する。上層（第5図50～53層）は、褐灰色粗粒砂や黄橙色細粒砂を主体に、灰白色シルトや粘土が介在するラミナが顕著な水成層で、比較的短期間に埋没したことが考えられる。下層（同図54～58層）は、上位に灰白色やにぶい黄橙色のシルト層が水平堆積し、下位に灰黄褐色粗粒砂や灰白色細粒砂を主体とする水成堆積層を認める。しかし、下層の堆積が確認されるのは、調査



第21図 SD07 土層断面・出土遺物実測図



区北端部に限られ、検出した流路の大半では、第22図に示したように上層の堆積のみが確認された。こうした埋土堆積状況の相違は、後述する出土遺物の点からも、上層と下層が本来は別の流路の堆積層であり、南半部を中心とした下層流路の大半は、上層流路により削奪され、調査区北端部を除いて残存していないものと判断した。つまり、出土遺物より下層が縄文時代後期、上層が弥生時代中・後期のそれぞれ流路と考えられる。調査時に両流路の平面プランは把握できなかったが、以下では、SR04下層流路をSR04A、同上層流路をSR04Bとして報告する。SR04Bはほぼ直線的に北へ流下するが、SR04Aは調査区北端部で大きく北東方向へ屈曲する。こうした流路方向の相違により、本流路が2時期の異なる流路が重複したものであることが判明した。なお、SR04Bの埋土の一部は、I・II区東半部を広く包含層状に堆積し、本流路の埋没に連続して、縄文期以降残されてきた調査区周辺の浅い窪地の平準化が始まっていったことが確認された。

また、調査区北端部でSR04A下位層を掘り下げ中に、クヌギの木株が出土した。流路の埋没が比較的緩慢なSR04A上位層の堆積に移行した段階で、周辺ではクヌギ等の落葉樹等が自生する環境が広がっていたものと考えられる。

遺物は、上述したように、SR04Bより弥生土器壺(98・103)・台付鉢(104)、サヌカイト製石錐(112・113・115)や緑色片岩や紅簾片岩の剥片が、SR04Aより縄文土器浅鉢(106～108)、深鉢(109～111)、サヌカイト製打製石錐(116・117)等がそれぞれ出土した。SR04B出土の遺物が多数を占める。106は口縁部内面が肥厚する浅鉢で、磨滅のため断定はできないが、無文となる可能性がある。107は内湾する体部を有する浅鉢で、外面には2条の竹管文等で加飾し、肥厚する口縁部内面に縄文を施す。SR04Aより出土した縄文土器は、器表面の調整が残存しているものも多いが、いずれも小片化しており、近接地において当該期の遺跡の

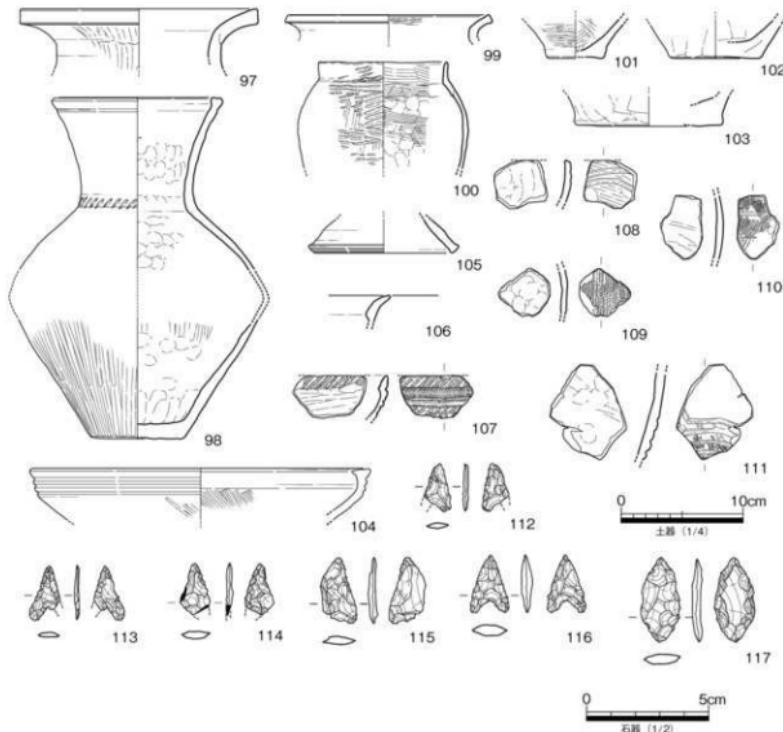
所在を示唆する資料と考えられる。SR04 Bは98・104等より、弥生時代中期後葉から後期前葉の比較的短期間に埋没したことが想定され、埋土の堆積状況も矛盾しないと考える。なお、弥生土器甕（99・100）・壺（97）・高杯（105）等の下限を弥生時代終末期前後に求められる資料は、本流路上面に堆積した包含層II（第21図1層）より出土したものである。本層は、流路上面より調査区東半部にかけて広範に堆積しており、上述したSR04 Bの埋没に連続して開始した調査区周辺の低地部分の埋没は、当該期には一定程度平準化されたと考えられる。

古代の遺構・遺物

溝

SD01（第24図）

IV区東半部で流路方向N 8.04° Eに配された南北溝で、北端は調査区外へ延長し、南端は調査区内で途切れ、延長17.5 mを検出した。流路方向は、周辺地域の条里型地割の方向と概ね合致する。検出面幅0.57～1.15 m、残存深0.10～0.25 m、断面形は歪な逆台形状を呈し、底面には凹凸が顕著に認め



第23図 SR04 出土遺物実測図

られた。底面の標高は、南端部で 7.99 m、北端部で 7.86 m を測り、高低差より北へ流下する可能性が考えられる。

埋土は、4 層に細分され、上～下層の 3 層に大別し、遺物の取り上げをおこなった。上・中層（第 24 図 1・2 層）は、褐色灰色粘土で、下位層に薄い細粒砂の堆積が認められることから流水を伴う堆積があったとみられるが、基本的には溝廃絶後の自然堆積層であろう。下層（同図 3・4 層）は、溝機能時の水成堆積層である。

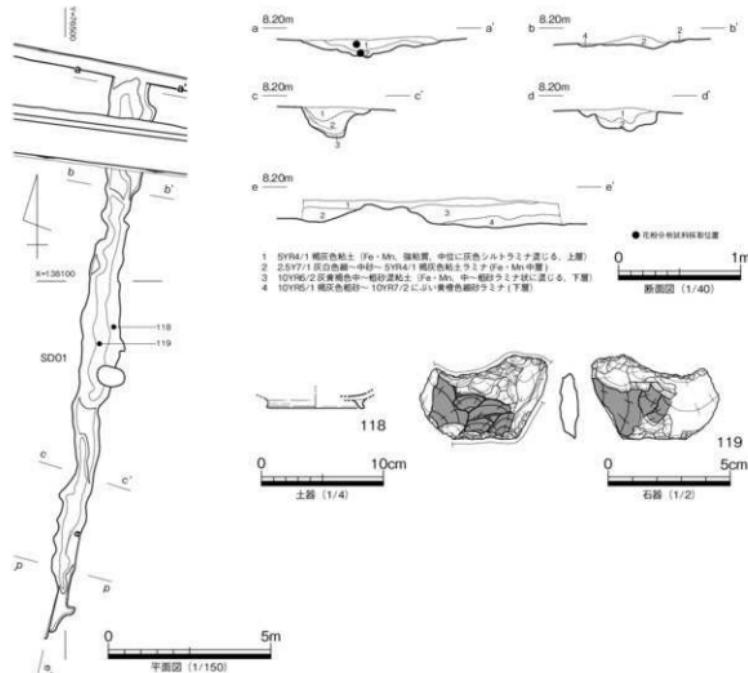
遺物は、図示した以外には弥生土器の小片が 9 点出土したのみ。**118** は黒色土器碗。**119** は楔形石器である。表裏面に磨滅痕が残り、打斧を転用したものと考える。遺物量が乏しいため詳細な時期を特定しがたいが、**118** より概ね 12 世紀前半を中心とする時期に位置付けられる。

中世以降の遺構・遺物

土坑

SK01（第 25 図）

IV 区東半部で検出した土坑で、SD01 と重複し、切り合い関係より後出する。長軸 0.85 m、短軸 0.59 m、



第 24 図 SD01 平面・土層断面・出土遺物実測図

平面形はやや歪な隅丸方形を呈し、主軸方位はN 78.84°Wを指向する。残存深0.25m、断面形は概ね逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。

埋土は、褐色粘土の単層で、ブロック土を多量に含み人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は出土しておらず、時期を特定することはできない。SD01より後出することや、埋土の特徴より、近世の遺構の可能性を想定しておきたい。

SK02（第25図）

I・II区東半部で検出した土坑である。長軸0.77m、短軸0.47m、平面形は南北にやや長い楕円形を呈する。残存深は0.31mあり、断面形は土坑南西部下半が抉れた一部袋状を呈する。

埋土は2層に細分され、いずれも褐色系粘土が堆積する。埋土中には多量の炭化物粒を含むことが特徴で、下位層には壁面の崩落に起因するとみられるブロック土が混入する。

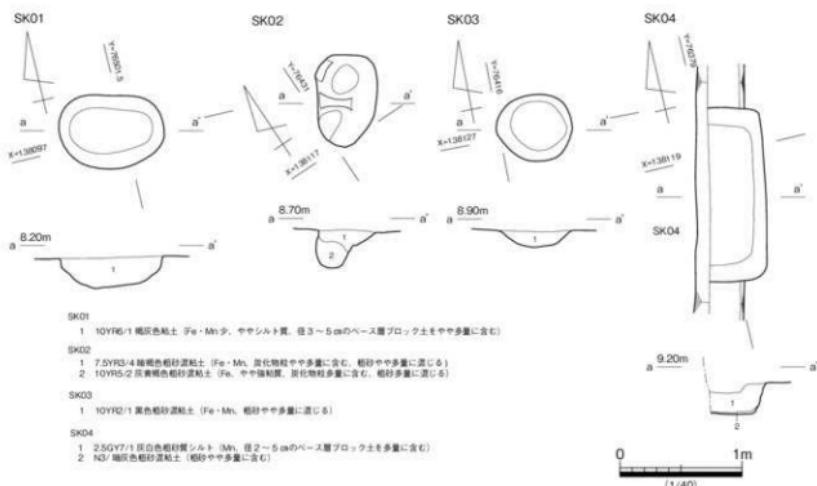
遺物は出土しておらず、時期を特定することはできない。埋土の特徴等より、中～近世の遺構の可能性を考えておきたい。

SK03（第25図）

I・II区中央北半部で検出した土坑である。長軸0.61m、短軸0.54m、平面形は楕円形を呈する。残存深は0.14mで、断面形は椀底状を呈する。

埋土は、黒色粘土の単層で、ベース層の粗粒砂をやや多量に混入する。

遺物は、器種不詳の土器小片が1点出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難であり、埋土の特徴等より、中～近世の遺構の可能性を考えておきたい。



第25図 SK01・SK02・SK03・SK04 平面・土層断面図

SK04（第25図）

I区南西隅で検出した土坑である。西半部は調査区外へ延長し、全形は不明。検出面長1.41m、同幅0.47m以上、平面形は整った隅丸方形を呈するとみられ、主軸方向はN 10.33° Eを指向する。残存深は0.24m、断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦である。

埋土は2層に細分された。上層（第25図1層）は、ブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。下層（同図2層）は、土坑底面に薄く堆積し、底面に敷設していた、例えは板材等の有機質のものが土壤化した可能性も考えられる。

遺物は、時期不詳の土器小片が1点出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難であり、埋土の特徴より近世以降のものと考えておきたい。

性格不明遺構

SX01（第26図）

I・II区西南部で検出した落ち込みで、南端部は調査区外へ延長するが、調査区界で浅くなり、南側へはそれほど延長しないと思われる。検出面東西長2.73m、同南北長2.07m以上、平面形はやや歪な隅丸方形を呈する。残存深は0.17mで、断面形は浅い逆台形ないし皿状を呈する。

埋土は3層に細分された。上層（第26図1層）は、遺構廃絶後の自然堆積層と考えられる。中層（同図2層）は、土坑南端部で僅かに確認した土層で、炭化物や焼土粒を多量に含む。層下面に被熱痕は認められず、遺構南側より流入堆積したものと考えられる。下層（同図3層）は、土坑底面に広く堆積した灰層と考えられる土壤で、本層も遺構南側より流入堆積したものとみられる。遺構南側に何らかの焼成遺構が存在するものと考えられるが、詳細は不明である。

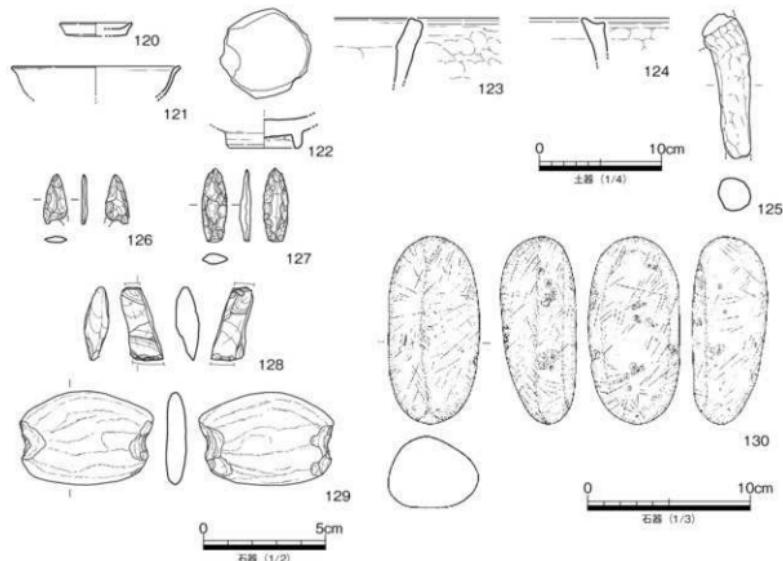
遺物は、上層より器種不詳の土器小片が数点出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難だが、埋土の特徴等より、中～近世の遺構の可能性を考えておきたい。

遺構外出土の遺物（第27図）

本章第2節で既述したように、III区を除く各調査区で包含層を検出し、遺物が出土している。以下で



第26図 SX01 平面・土層断面図



第27図 包含層出土遺物実測図

は、図化可能な資料が出土したI・II区の包含層出土資料について記述する。

129は、I区包含層より出土した紅麻石英片岩製の打製石庖丁である。扁平な円盤を使用し、短側両辺を打ち欠いて抉りを入れ、刃部は磨製により成形する。同種石材による打製石庖丁のような打ち欠きによる刃部調整は認めない。120・125は、I区包含層Iより出土した中世土師質土器。120の皿はやや小型だが、13世紀前半を中心とした時期と考えられ、125もほぼ同時期であろう。122は、I区包含層Iより出土した龍泉窯系青磁碗で、大宰府分類碗IV類に分類される。以上の資料より、包含層Iは13～14世紀代に堆積したと考えられる。121は、I区床土層より出土した景德鎮窯系白磁皿。16世紀後半から17世紀前葉。124は、II区床土層より出土した土師質土器足釜。16世紀代。123は、II区床土層より出土した土師質土器鍋。これら資料は、概ね16世紀後半から17世紀前葉の資料と考えられ、当該期の村落が遺跡周辺に所在した可能性が考えられる。130は砂岩円盤を使用した叩石。側縁と正面に敲打痕を、正面を中心に弱い研磨面を認める。126はI区包含層Iより、127はII区包含層IIより、それぞれ出土したサヌカイト製の打製石鎌である。

第4章 仲戸東遺跡の調査

第1節 概要と調査の方法

調査は、平成20年度調査区をI区、同24年度調査区をII区とし、I区については掘削土を調査区内へ仮置きする必要から、北半部（Ia区）と南半部（Ib区）の2小区に区分して調査を実施した。各調査区の対象面積はI区1,009m²、II区242m²である。なお、各調査区の配置は、第4図に示した。

調査前は、I区は水田等の耕作地、II区は宅地として利用されていた。I区の調査前の地表面の標高は8.5～8.6m、II区のそれは11.50mである。

基準杭や調査区のグリットの設置等については、既述した仲戸遺跡に準じるため、省略する。

調査においては、基本的に包含層以下を人力により掘り下げをおこなった。後述するように、各調査区で2～3面の遺構面を確認したが、包含層は極力人力で掘り下げている。

調査着手前よりI区北半部を中心に谷状地形が埋没していることは予想されていたので、谷部の平面プランと堆積状況、埋土各層の堆積時期の確認を目的に掘り下げをおこなうこととした。なお、遺物については、必要に応じて、トータルステーションで出土位置の記録と出土状況の写真撮影をおこなった。

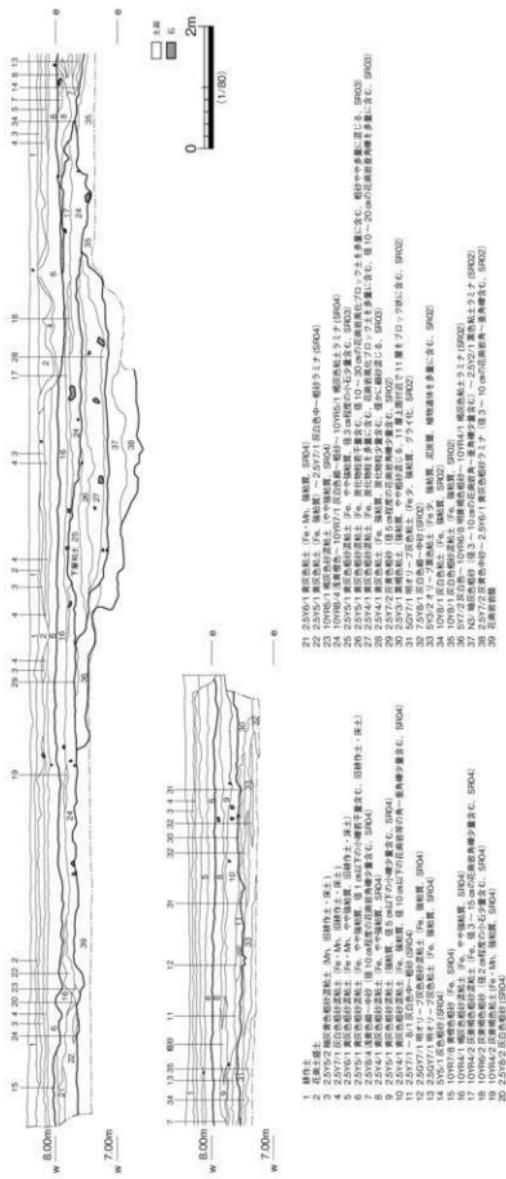
I区南半部及びII区では、柱穴や土坑等の遺構が試掘調査時に確認されていたので、集落域が検出される可能性が想定された。調査の結果、粘土探掘坑と推定される土坑群や掘立柱建物が検出された。土坑については、各土坑の平・断面形状及び掘削深度、土層の堆積状況などに留意して調査を進めた。土坑は平面プラン確認後、中・小規模なものについては半截し、土層の堆積状況を確認・記録し、各層単位で遺物を取り上げつつ、掘り下げをおこなった。

第2節 基本層序

土層序の観察は、I区では調査区北・東・南壁で、II区では調査区北・東壁においておこない、土層断面図に記録した。

I区では、現耕作土及び造成土（第28～30図1・2層）の下位には、4層以上に細分される床土もしくは旧耕土（第28図3～7層、第29図4～7層、第30図2～5層）の薄い水平堆積が認められ、これらの耕土層を取り除くと、褐色砂混粘土層等の堆積層（第28図17層等・第29図8層）が露出し、本層上面で土坑SK01・SK02を調査した。本遺構面を第1遺構面とする。I区では、本遺構面上まで重機で掘り下げ、以下を人力により調査をおこなった。旧耕土層は、肥前系陶器刷毛目碗などの遺物の出土により、近世後半～末頃を上限とする。第1遺構面の所属時期については、遺構出土の遺物が乏しく詳細は不明ながら、後述するように第2遺構面出土遺物より、中世後半期以降の時期が想定される。

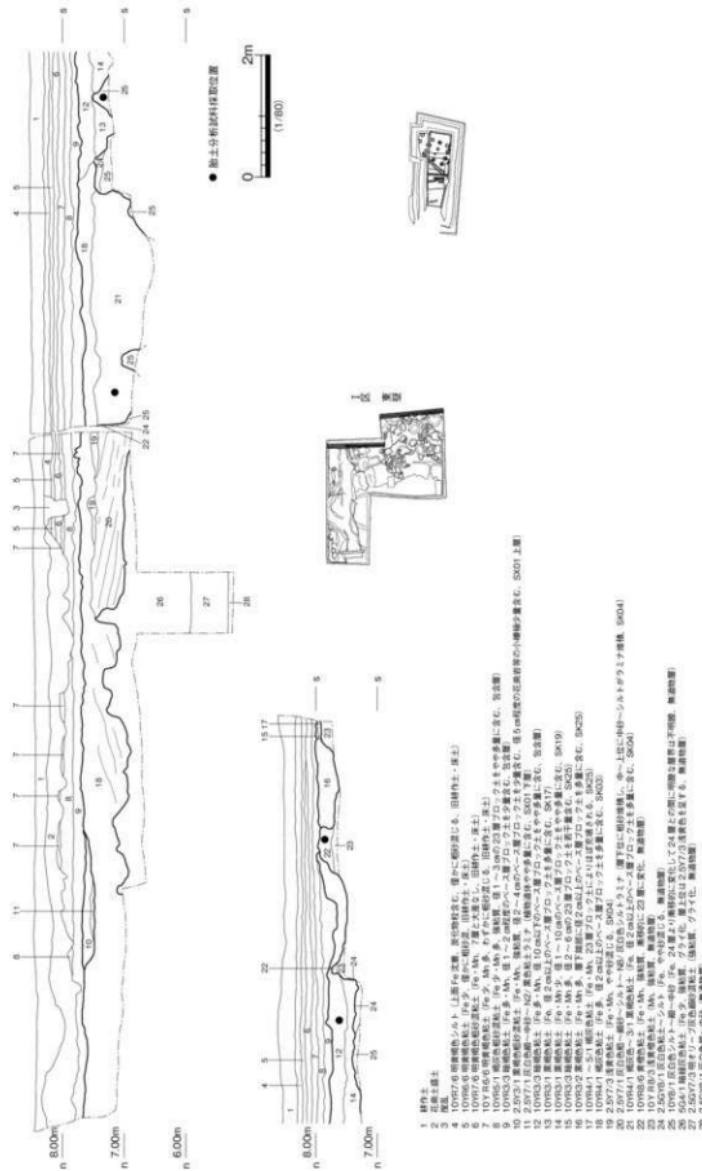
第1遺構面のベース層は、専ら谷部となる調査区北半部と微高地となる同南半部でやや異なる。北半部では、東側丘陵部から西へ流下するとみられる、複数の小規模な流路堆積（第28図7～9・14層等）が確認された（SR04）。一方調査区南半部では、2層に細分される褐色系粘土層が包含層状に調査区全面において確認され（第29図8・9層、第30図7層）、中世前半期を下限とする遺物が出土した（第82図）。これら包含層堆積と、SR04埋土との関係については、調査時にはいずれも包含層として掘り下げたため、明らかにできていない。調査後の土層断面の検討により、南半部を中心確認された包含層に対応する堆積層は、調査区北半部にも一部確認され（第28図17・25層）、それを開析してSR04



1区



第28図 1区調査区北壁土層断面図



第29図 I区調査区東壁土層断面図



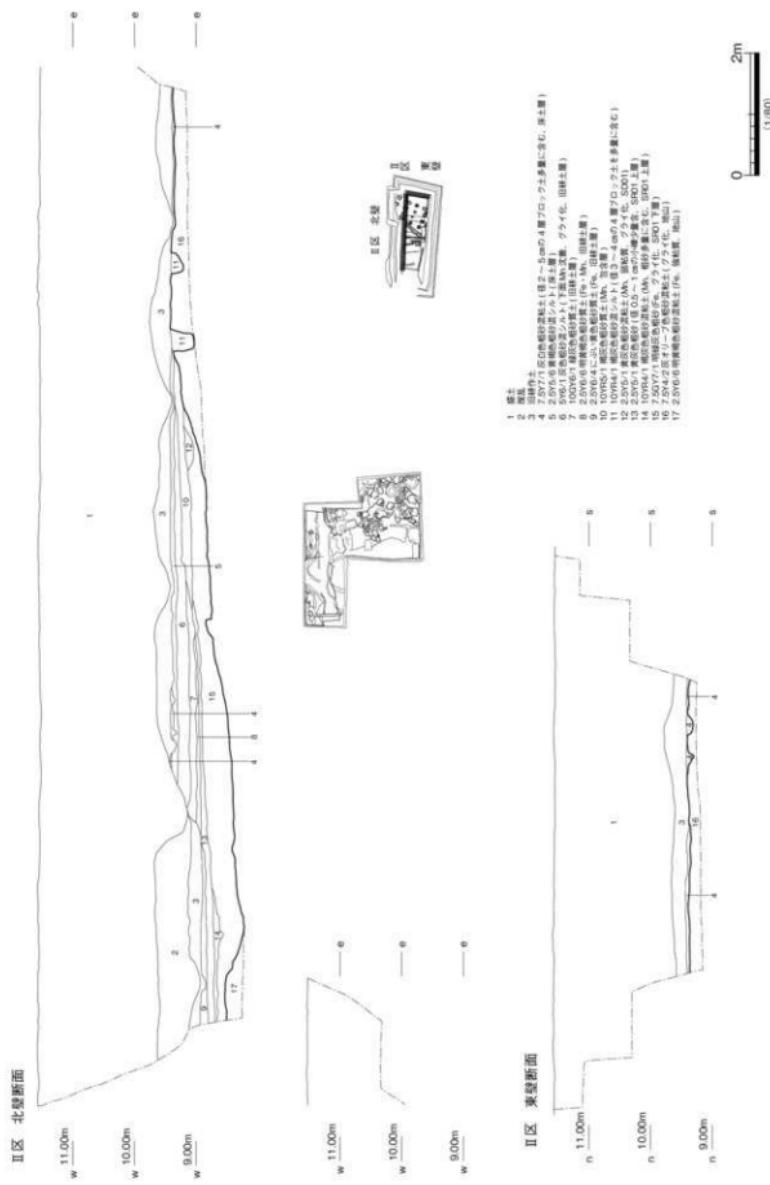
が流下した可能性が考えられた。また、本層下面是、SR04 の流水による浸食部分を除いて、標高 7.8 m 前後で概ね一定して検出され、包含層堆積以前に後述する第3 遺構面上面の削奪・平準化がなされた可能性が考えられた。このことは後述する谷部流水管理のために開削されたと考える SD02 の残存深が、0.3 m 前後と浅いものであったことも傍証とされよう。また、包含層堆積中にブロック土が一定量含まれることは、本層が耕土層として利用されていたことを示唆するものと考えられ、上述した平準化が谷部を含めた耕地化を意図したものであった可能性が考えられる。なお、以下では SR04 を第2 遺構面の遺構として報告する。

第2 遺構面堆積層の下面において、調査区北半部では花崗岩の岩盤を削り込んで流下する、数条の谷状地形の流路堆積 (SR02・SR03) や溝 (SD02) を確認し、南半部では無遺物層である浅黄橙色粘土の安定した遺構面が露出し、多数の土坑群が確認された。これらを第3 遺構面として以下報告する。

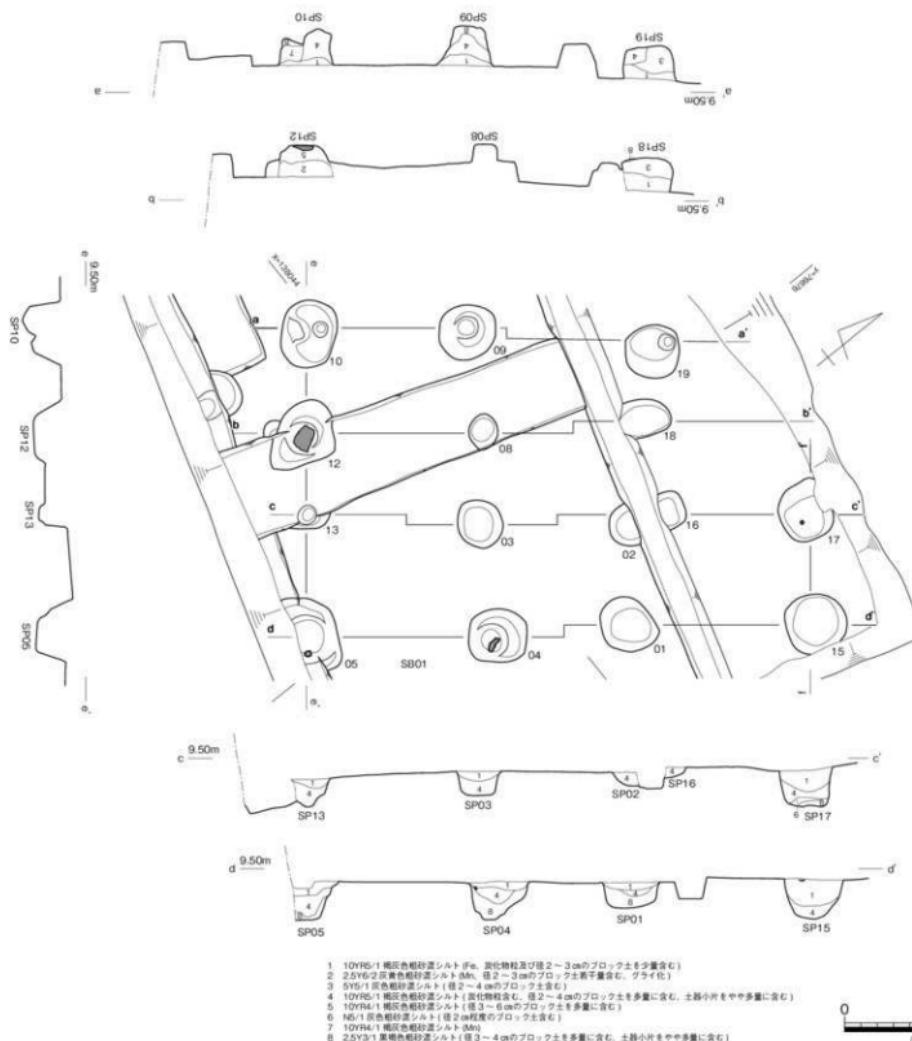
II 区では、宅地化に伴う 1.7 ~ 2.4 m の厚い花崗土の盛土層 (第31図1層) の下に、宅地化以前の旧耕土層 (同図2層) が堆積する。旧耕土層上面の標高は、調査区西半部で 9.7 ~ 9.8 m、東端部で 9.1 m 前後を測り、I 区へ向け概ね 0.5 m 程度の比高差を有する数箇の棚田状の耕地に区画されていたことが判明した。

旧耕作土下には、4 ~ 5 層に分層される粘土ないしシルト層 (同図3・6・7・10・13・14) が水平堆積し、出土遺物等より近世後半以降の旧耕土ないし床土層と判断された。断面からの推測ではあるが、近世後半期にはより比高差の乏しい、連続した小区域の耕地として利用されていたようだ。

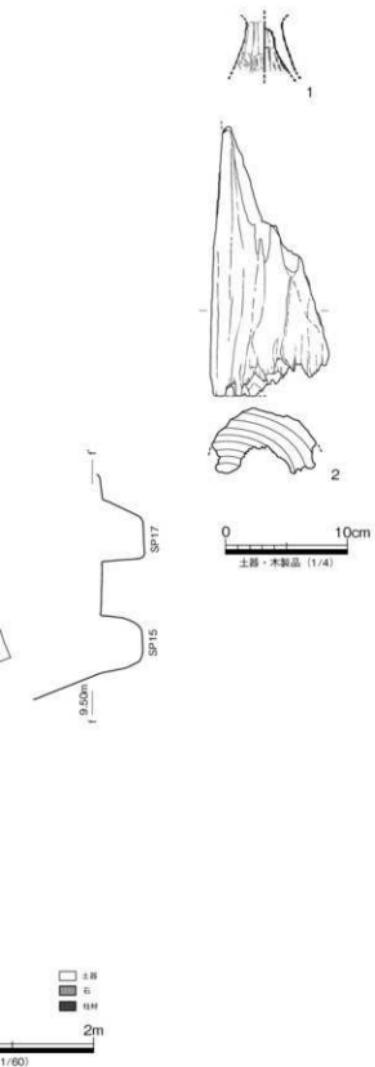
上述した旧耕土層下面で、調査区東半部では無遺物層である灰オリーブ色粘土 (同図4層) が露出し、2 棟の掘立柱建物 (SB01・SB02) が検出された。調査区中央部では、褐灰色砂質土 (同図9層) の緩やかな斜面堆積が確認された。本層は、出土遺物より古代の包含層と考えられるが、調査区東半部では削平され、上述した建物跡との関係は不明である。本



第31図 II区調査区北・東壁土層断面図



第32図 SB01 平面・土層断面・出土遺物実測図



層下面で、南北に走行する旧流路（SR01）や溝（SD01）を検出した。流路下面には、無遺物層である明黄褐色粘土（同図12層）が堆積する。

第3節 遺構・遺物

本節では、出土した遺構・遺物について、時代順・遺構種別毎に以下報告する。しかし、I区からは古墳時代以降の遺構・包含層より、多量の埴輪類が出土した。埴輪を個別遺構毎に報告するとなると、記述に重複が多くなり、煩雑となることが予想される。したがって埴輪類については、個別遺構の項では出土状況等についての報告にとどめ、遺物としての報告は、最後に項目を設けてまとめることとした。

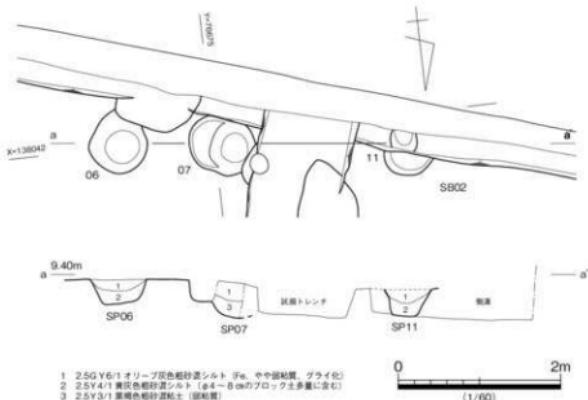
弥生時代～古墳時代

掘立柱建物

SB01（第32図）

II区東半部で検出した南北棟の総柱建物である。現状で、桁行3間（6.30m）、梁間3間（3.79m）、床面積23.8m²、主軸方向N 37.59°Eの建物として復元されるが、調査区を北へ拡張したものの桁行北端の柱穴を確定することができず、さらに建物規模が拡大する可能性は残る。柱穴掘り方は、長軸0.56～0.78mの平面不整隔丸方ないし楕円形を呈し、残存深0.18～0.48m、底面の標高8.82～9.16m、底面は概ね平坦で、断面逆台形状を呈する。桁行の柱間寸法は、1.73～2.27mとややばらつく。埋土は1～4層程度に細分され、柱痕はSP17を除いて認められず、柱材は建物廃絶に伴い転用された可能性が考えられる。SP17の柱痕は、径0.3m程度の円形であった。また、SP05・15・17より柱材と考えられる材小片が出土しており、比較的残存の良好なSP17出土資料について樹種同定を実施し、ヒノキと判定された。なお、SP12底面で根石が出土している。

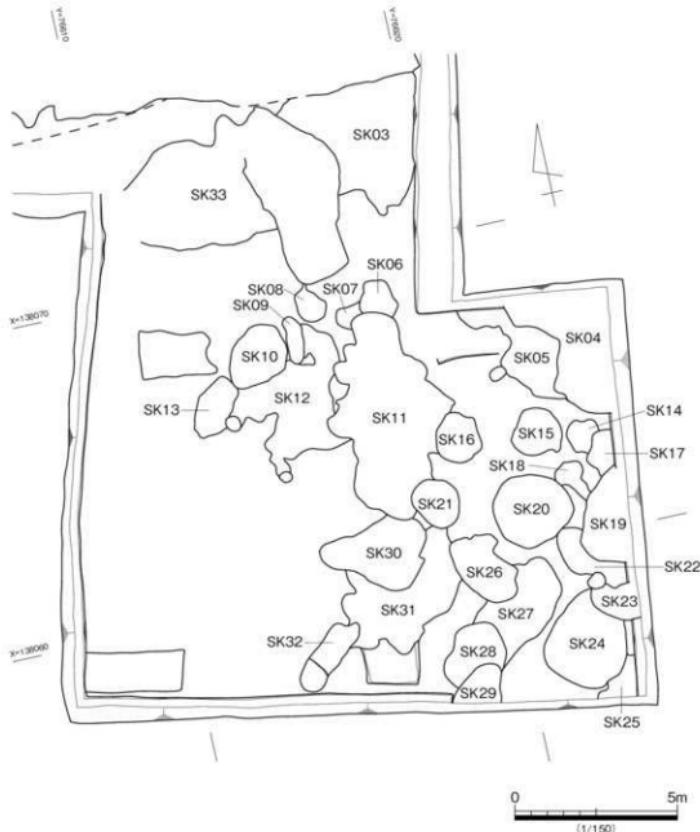
遺物は、各柱穴より出土したもの、いずれも器種不詳の土器小片が多く、図化可能な資料は、弥生



第33図 SB02 平面・土層断面図

時代終末期前後の高杯脚部片（1）のみであった。また、2は、上記SP17の柱材である。腐食により加工痕は不明瞭ながら、下端面は建物機能時の荷重により潰れている。出土遺物が乏しく、本建物の時期を特定することは困難である。そこで、SP17出土の柱材について放射性炭素年代測定を実施し、理化学的方法により、本建物の時期を特定することを試みた。分析の詳細は後掲第5章に譲るが、5世紀前半から6世紀中頃に伐採された材を使用したことが明らかとなり、出土した高杯は混入資料と考えられる。

理化学的方法によって得られた上記年代のうちには、後述するI区土坑群や埴輪窯の経営期間である6世紀前葉が含まれる。建物周辺より、埴輪等の遺物が全く出土しておらず、その点で躊躇されるが、埴輪製作に係る工房等、工人集団に関する建物である可能性を想定したい。立地の面でも、丘陵裾部の

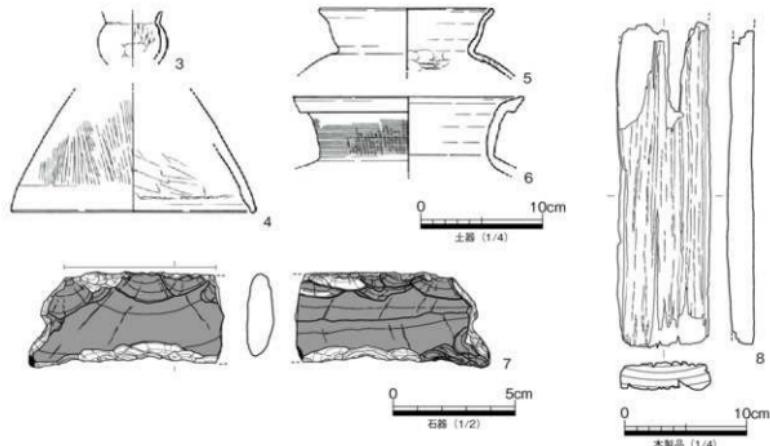


第34図 I区土坑群分布図

標高がやや高く、洪水砂の堆積が認められないながらも、非常に窮屈な斜面地をあえて造成し、本建物が建てられており、遺跡周辺での何らかの開発行為に関与した集団の居住・生産エリアであった可能性が想定される。その点で、周辺で顕著な遺構が検出されなかった5世紀代を想定するよりも、より合理的と考える。今後周辺部の調査により、良好な資料の出土により、建物群の時期が特定されることを期す。



第35図 SK03 平面・土層断面図



第36図 SKO3出土遺物実測図

待したい。

SB02（第33図）

2区東半部で検出した。柱列を検出したのみで、建物遺構とは断定できないが、柱穴規模はSB01と近似し、調査区南側へ延長する掘立柱建物である可能性は高い。切り合い関係よりSB01より先行する。3間分（3.55m）、主軸方向N 83.02°Wの柱列を検出したが、うち西より2穴目は試掘トレンチにより削奪されたと考えられる。柱穴掘り方は、長軸0.6～0.8mの平面不整隅丸方形ないし楕円形を呈し、残存深0.32～0.44m、底面の標高8.88～9.03m、底面は概ね平坦で、断面逆台形状を呈する。埋土は2層に細分され、SB01と近似する。柱痕は認められず、建物廃絶に伴い転用されたと考えられる。

遺物は、SB01同様、器種不詳の土師器とみられる土器小片が若干量出土したのみで、図化可能な資料はなく、時期を特定することは困難である。埋土や遺物の内容はSB01と近似しており、SB01より先行するものの、さして大きな時間差なく建て替えられたものと考えられる。

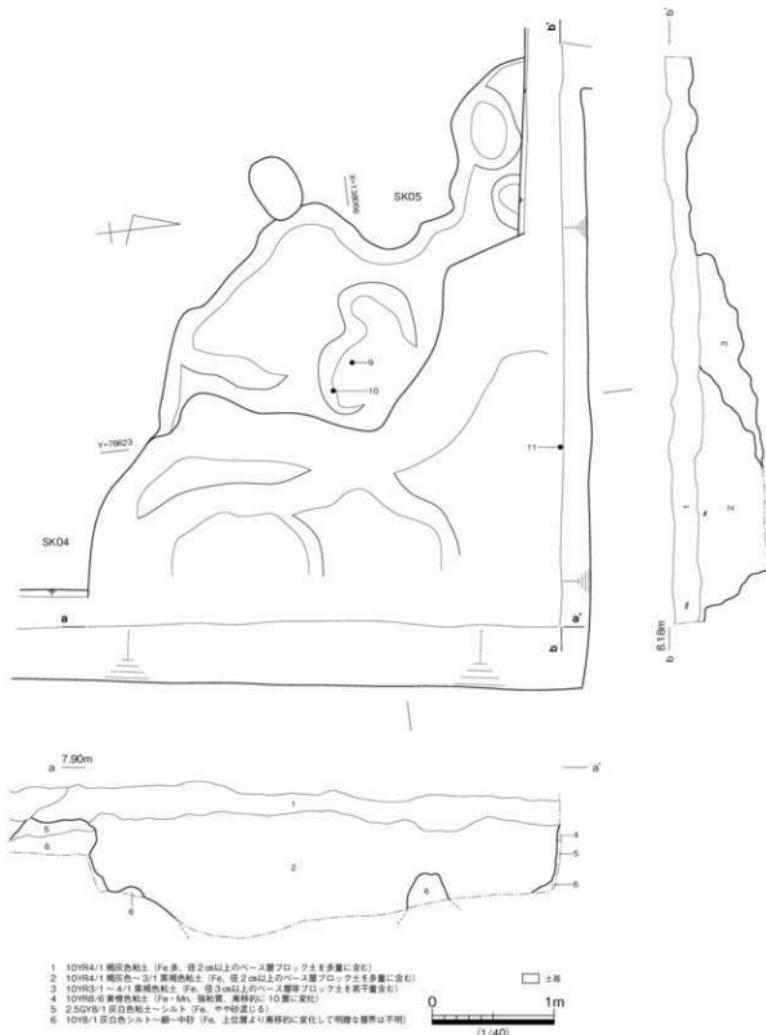
土坑群

I区南半部第3遺構面において多数の土坑を検出した。規模や形状は土坑により大きく相違するものの、後述するように、空間的にも、時期的にもまとまって開削されていることから、性格の相違する土坑の密集ではなく、群として共通の用途・目的をもって開削された遺構と考えられる。以下、個々の土坑の内容について記載し、それらの諸属性について検討することで、土坑群の性格について提示することにしたい。

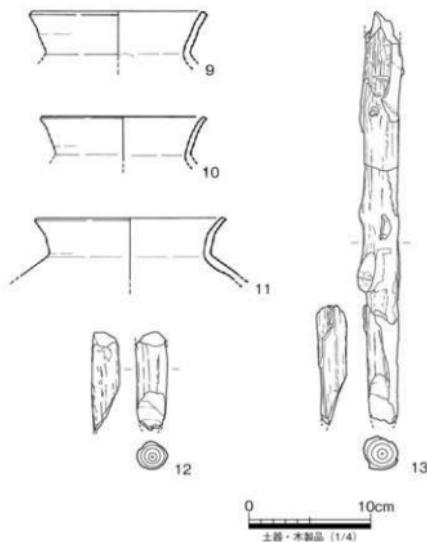
SK03（第35・36図）

I区中央東端部で検出した大型土坑で、北端をSD02に、西端をSX01に切られ、東端は調査区外へ

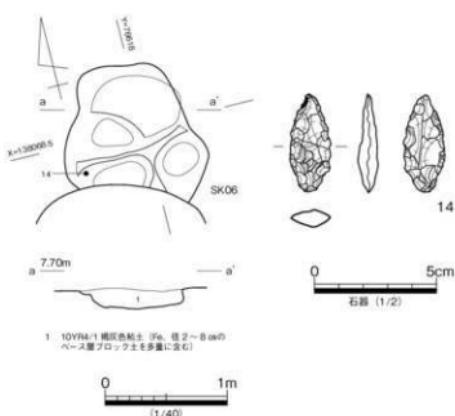
延長する。南北長4.97m以上、東西幅4.15m以上、残存深は最大0.8mを測る。土坑南半部のベース層が灰白色粗～細砂～シルト層となる部分では残存深0.2m程度と、シルト層上面で掘削を終了する一方、北半の強粘質の暗緑灰色粘土層部分では、深く掘り込まれており、ベース層の土質により、掘深度



第37図 SK04・SK05平面・土層断面図



第38図 SK04・SK05出土遺物実測図



第39図 SK06平面・土層断面・出土遺物実測図
樹皮の残る径3cm程の細い材を使用した杭。下端を削り断面レ字状に尖らせる。12も、同様の材を使用した杭である。

が異なることが観察された。また、調査範囲で南北長は5m程度であったが、調査区東壁の土層の観察により、東端部で大きく北へ拡張することが確認された。埋土は、ブロック土を多量に含む褐色粘土の単層で、ブロック土は北へ傾斜して堆積しており、土坑南より人為的に埋め戻された可能性が考えられる。土坑底面には最大0.4～0.5m程度の起伏が顕著に認められ、断面形は一定形状を示さない。

遺物は、土坑北端底部で板材1点（8）が、ほぼ水平に据え置かれて出土した以外は、土器類を中心に埋土中に混在して出土した。図示した以外に器種不詳の土師器や須恵器の小片が少量出土している。3は小型丸底土器である。5は土師器甕である。6は須恵器甕で、MT15型式併行期を前後する時期であろう。4は弥生土器高杯もしくは器台脚部片で、弥生時代終末期前後に亘る混入資料。7は打製石庵丁で、中央部付近で縦に半截する。表裏の素材面には、顕著な摩耗が認められる。

SK04（第37・38図）

I区南半北東隅で検出した土坑で、SK05を切る。北半部と東半部は調査区外へ延長し、南北38m以上、東西3.2m以上、平面不定形の大型土坑である。残存深は最大1.0m以上を測り、底面には起伏が顕著に認められ、断面形は一定形状を呈さない。埋土は単層である。

遺物は、図示した以外に土師器や埴輪等の小片が若干量出土している。11は土師器甕。SK05出土資料と接合した。13は、

SK05（第37・38図）

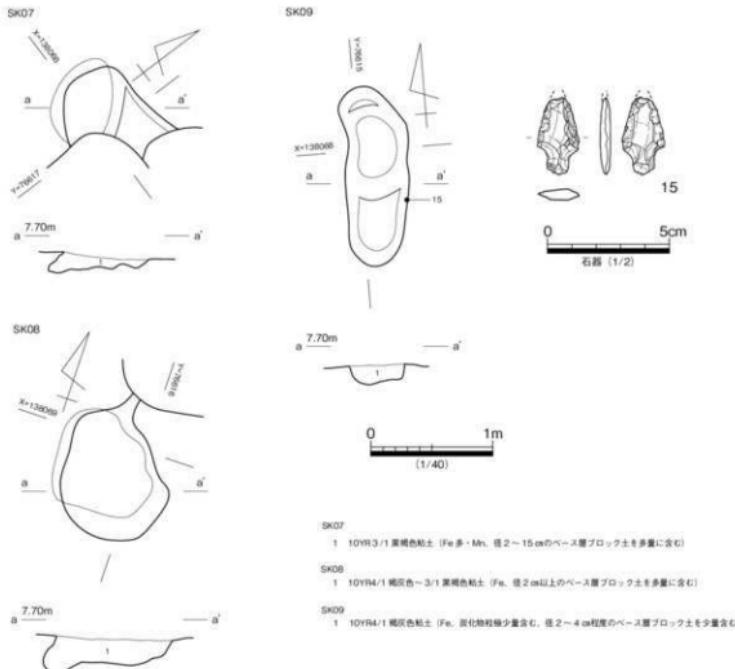
I区南半部北東隅で検出した土坑で、既述したように、東半部の大半をSK04に切られる。南北2.79m以上、東西3.14m以上、平面不定形を呈する。残存深は最大0.5mで、底面には起伏が顕著に認められた。埋土は単層である。

遺物は、図示した以外に器種不詳の土師器や須恵器の小片が少量出土した。また、SK04出土遺物との間に接合関係がある。9・10は土師器甕。9の口縁端部には一部煤が付着する。

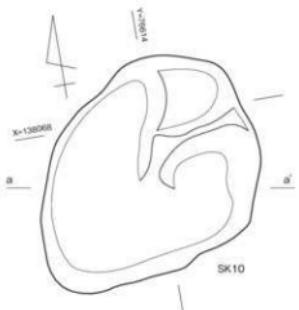
SK06（第39図）

I区中央部東半で検出した。南端部をSK12に切られる。東西約1.17m、南北0.9m以上、平面形は歪な隅丸方形を呈する。残存深は最大0.23mと浅く、断面形は何半部を中心に底面の起伏が顕著に認められた。埋土は単層である。

遺物は、混入資料とみられるサスカイト製の凸基式打製石鎌（14）以外には、器種不詳の土器小片が7点出土したのみである。



第40図 SK07・SK08・SK09 平面・土層断面・出土遺物実測図



- 1: 10YR2/3 黒褐色粘土 [Fe + Mn 多、氧化物を含む、径 2~5 cm のベース層 ブロック土をやや多量に含む]
2: 10YR3/7 黒褐色粘土 [Fe、氧化物が少く含まれる、径 2~15 cm のベース層 ブロック土をやや多量に含む]



第41図 SK10 平面・土層断面図

SK07 (第40図)

I区中央部東半で検出した。東半部をSK06・SK11に切られ、全形は不詳である。東西0.9m以上、南北0.67m以上で、平面形は歪な隅丸方形を呈するとみられる。残存深は最大0.17m前後と浅く、周壁は西壁を中心抉れて、断面形は一部袋状を呈する。埋土はブロック土を多量に含む黒褐色粘土の単層で、ブロック土は土坑北東方向より流入した堆積を示していた。

遺物は、出土していない。

SK08 (第40図)

I区中央部付近で検出した。東西約0.90m、南北約1.06mで、平面形は歪な隅丸方形を呈する。残存深は最大0.30m前後を測り、周壁は西壁を中心抉れて、断面形は一部袋状を呈する。埋土はブロック土を多量に含む黒褐色粘土の単層で、ブロック土は南へ傾斜して堆積していた。

遺物は、器種不詳の土器小片が3点出土したのみである。

SK09 (第40図)

I区中央部で検出した。SK12を切る。南北約1.48m、東西約0.51mで、平面形はやや歪な隅丸長方形を呈する。残存深は0.16mと浅く、断面形は概ね箱型を呈する。埋土は単層であった。

遺物は、混入資料とみられるサスカイト製の打製石器（15）以外には、器種不詳の土器小片が2点出土したのみである。

SK10 (第41図)

I区中央部西半部付近で検出した。東西約1.77m、南北約1.77m、平面形は歪な隅丸方形を呈する。残存深は最大約0.3mを測り、土坑北半部を中心に底面に起伏が顕著に認められた。埋土は2層に細分され、下位層はややグライ化した粘土層で、滞水下堆積の可能性が考えられる。

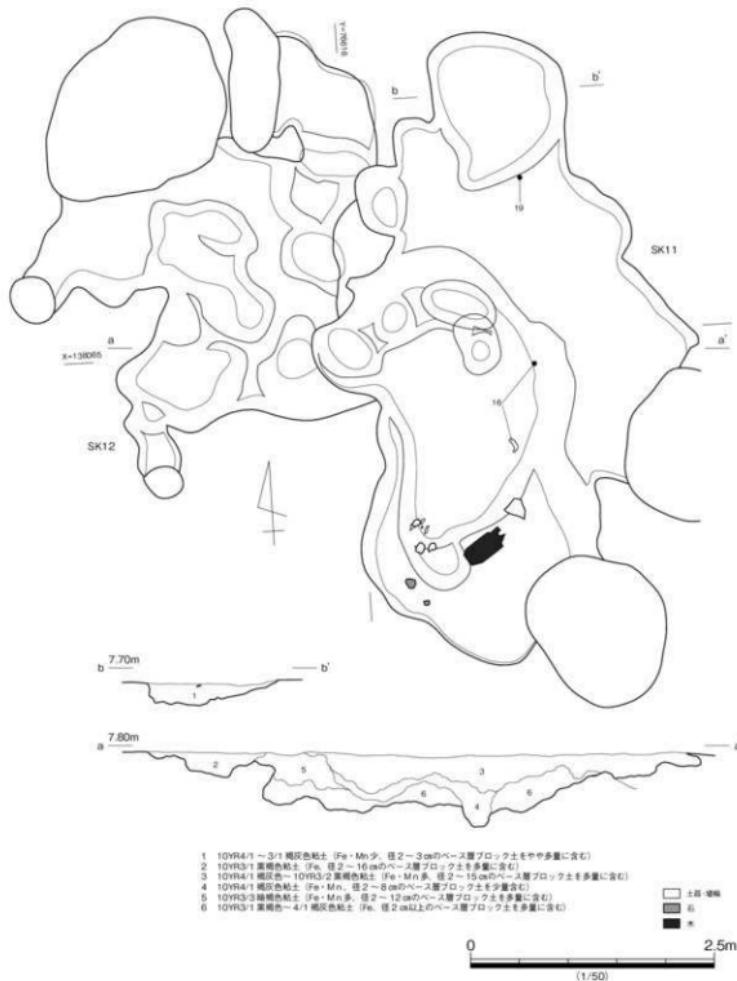
遺物は、器種不詳の土器、埴輪の小片が少量出土したのみである。

SK11・SK12 (第42・43図)

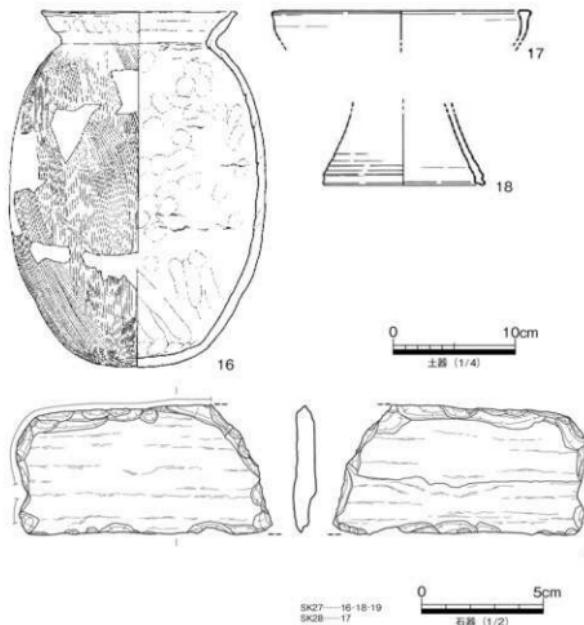
I区南半中央西半部で検出した。SK09、SK10、SK13、SK16等に切られる。当初は2基の大型土坑の重複として調査を進めたが、土層堆積状況の観察や、底面の形状、遺物の出土状況等より、少なくとも5~6基の中・小型土坑の重複、つまりは埋没と再掘削の累積の可能性が考えられたが、個々の土坑埋土が酷似していたこともあり、残念ながら個別の土坑の平面形状等を特定するまでは至らなかった。残存深は最大0.7m前後で、埋土は土層断面の観察により少なくとも6層に細分された。最下層（6層）はほぼブロック土により充填され、中位層（4層）は滞水下堆積の可能性が想定される。

遺物は土坑南端部に大型の破片がやや集中して出土したほか、土坑各所より弥生土器壺や器種不詳の

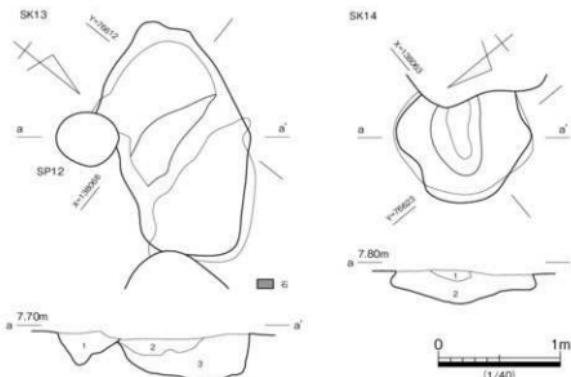
土器、須恵器、埴輪の小片が少量出土した。また、土坑南端部では、長さ約46cm、幅約21cmの板材が、土坑底面に据え置かれた状態で出土した。**16**は、SK11中央部より出土した土器器長胴壺で、全形の半分程度が遺存する。6世紀前葉前後の資料である。**18**は、SK11北半部より出土した弥生土器高杯もしくは台付鉢の脚部片で、中期中葉前後に遡る混入資料である。**19**も、SK11北半部より出土した珪質片岩製の打製石庖丁である。左図右端部を折損する。背部から左側縁部にかけて、刃漬しのための敲



第42図 SK11・SK12平面・土層断面図



第43図 SK11・SK12出土遺物実測図



SK13
 1 10YR2/1 黒色粘土 (Fa. 径2~7cmのベース層と2~3層のブロック土を多量に含む)
 2 10YR4/1 棕灰色粘土 (Fa. 粗砂や砂混じる。径1cmのベース層ブロック土を含む)
 3 10YR4/1~5/1 棕灰色粘土 (Fa. 原生物糞含む。径1~5cmのベース層ブロック土や多量に含む)

SK14
 1 10YR3/1 黒褐色粘土 (Fe+Mn)
 2 10YR4/1 棕灰色粘土 (Fe+Mn. 径1cm以上のベース層ブロック土を多量に含む)

第44図 SK13・SK14平面・土層断面実測図

打が施される。17は、SK12北東部出土の弥生土器台付鉢口縁部片で、18と同一個体の可能性がある。

SK13（第44図）

I区中央西半部付近で検出した。北端部の一部をSK30に切られる。長軸約195m、短軸約1.07m、平面形は歪な隅丸長方形状を呈する。残存深は最大0.41m前後を測り、土坑北半部を中心周壁は抉れて、袋状を呈する。埋土は2層に細分されたが、いずれもベース層ブロック土を含む褐色系粘土であった。

遺物は、後掲する埴輪資料以外に、器種不詳の土師器や須恵器杯蓋、埴輪等の小片が少量出土した。また土坑中央部付近の底面に、人頭大程度の大きさの角礫が据え置かれていた。

SK14（第44図）

I区南半東端部で検出した。南東端部をSK17に切られる。東西10m以上、南北1.0m以上で、平面形は歪

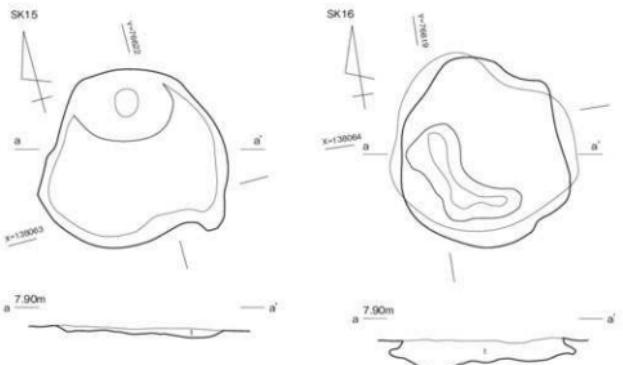
な隅丸方形を呈する。残存深は0.28mで、周壁は一部を除いて底面近くで抉られ、断面形は袋状を呈する。埋土は2層に細分され、下位層には多量のブロック土が含まれる。

遺物は、器種不詳の土器小片が1点出土したのみである。

SK15（第45図）

I区南半東部で検出した。東西約1.56m、南北約1.41m、平面形は歪な隅丸方形を呈する。残存深は最大0.4mで、北端部がピット状に深く掘り下げられ、南半部は断面皿状を呈する。埋土は単層であった。

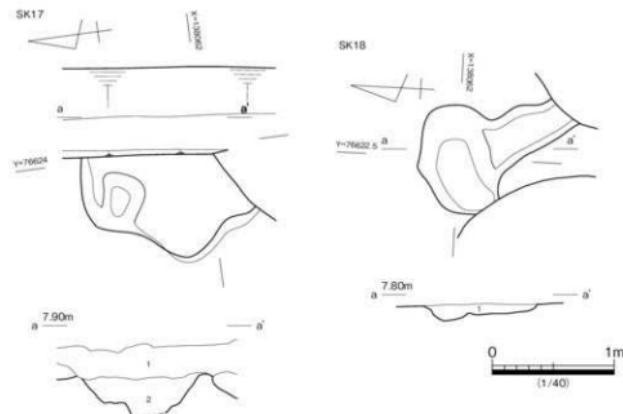
遺物は、器種不詳の土師器や須恵器の小片が極少量出土したのみである。



SK16（第45図）

I区南半中央部付近で検出した。東西約1.27m、南北約1.58m、平面形は歪な円形を呈する。残存深は最大0.26m前後と浅いが、周壁は東西両壁を中心で抉られて、断面形は袋状を呈する。埋土は単層であった。

遺物は、弥生土器壺や器種不詳の

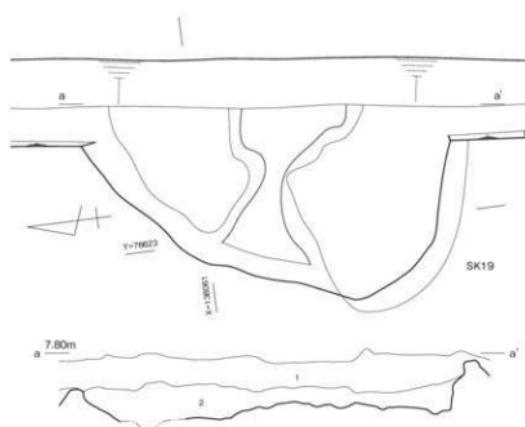


SK15
1 10YR4/1 ~ 5/1 橙褐色粘土 (Fe・Mn 多、径3 ~ 10cmのベース層ブロック土をやや多量に含む)

SK16
1 10YR3/3 橙褐色粘土 (Fe・Mn 多、茶化物粉少量含む、径2 ~ 20cmのベース層ブロック土を多量に含む)
2 10YR4/1 黒褐色粘土 (Fe・Mn 多、径2 ~ 10cmのベース層ブロック土を多量に含む)

SK18
1 10YR4/1 橙褐色粘土 (Fe・Mn 多、径3 ~ 15cmのベース層ブロック土を多量に含む)

第45図 SK15・SK16・SK17・SK18 平面・土層断面図



第46図 SK19 平面・土層断面図

土器器小片が少量出土したのみである。

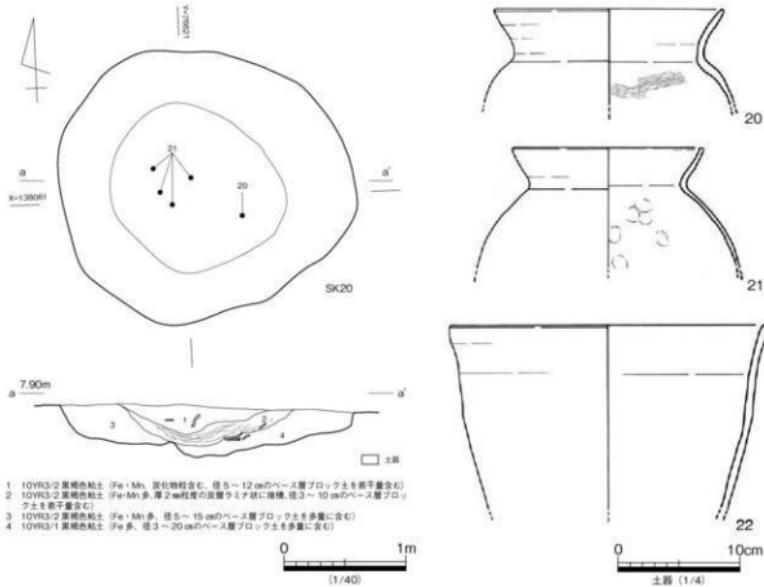
SK17（第45図）

I区中央東端部で検出した。南半部をSK19に切られ、東半部は調査区外へ延長する。東西0.85m以上、南北1.4m以上、平面形は歪な隅丸方形を呈するとみられる。残存深は最大0.44mを測り、北端部は一部ピット状に深く掘り込まれ、南半部は概ね断面逆台形状を呈する。埋土は単層であった。

遺物は、器種不詳の土器小片が5点出土したのみである。

SK18（第45図）

I区南東部で検出した。SK20・



第47図 SK20 平面・土層断面・出土遺物実測図

SK19に切られ、全形は不明である。南北1.26m以上、東西0.89m以上、残存深は最大0.13mと浅く、平面不定形で、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は単層であった。

遺物は出土していない。

SK19（第46図）

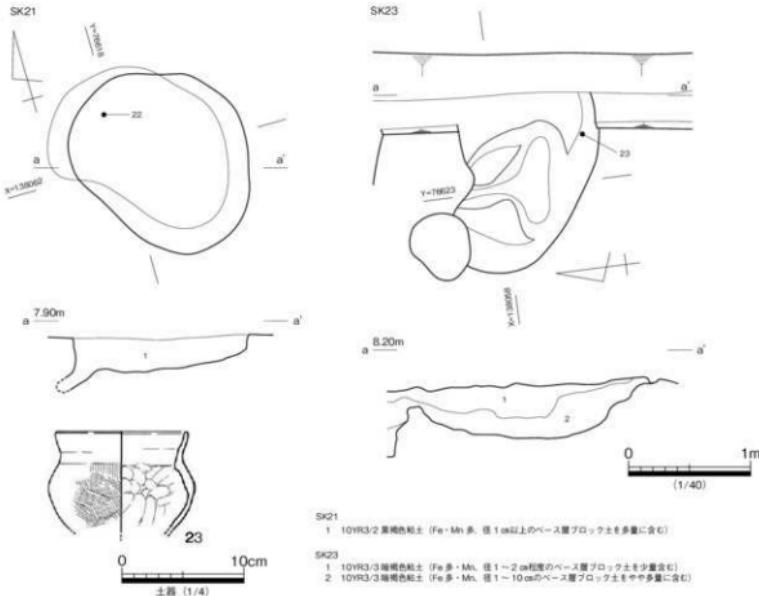
I区南半東端部で検出した。東半部は調査区外へ延長する。東西1.6m以上、南北2.9m以上、平面形は歪な隅丸方形状を呈するとみられる。残存深は最大0.5m前後を測り、底面は起伏が顕著に認められ、断面形は一定形状を呈さない。埋土は単層であった。

遺物は、器種不詳の土師器や須恵器の小片が少量出土したのみである。

SK20（第47図）

I区南半東部で検出した土坑である。東西約2.48m、南北約2.26m、残存深0.42mで、平面形は比較的整った梢円形を呈する。埋土は4層に細分された。上位2層は、下位2層を掘り込むように堆積した黒褐色粘土層で、レンズ状堆積を呈する。堆積状況より、下位層堆積後に再掘削された土坑埋土と考える。多量の炭化物細層がラミナ堆積し、底面に被熱痕が認められなかったことから、自然堆積したものと考える。下位2層はいずれも、ブロック土を多量に含む黒褐色粘土である。

遺物は、図示した以外に器種不詳の土師器や埴輪の小片が少量出土している。20・21は土師器壺で、



第48図 SK21・SK23 平面・土層断面・出土遺物実測図

20は4層より、**21**は1層より出土した。**22**はバケツ状を呈する粗製の土師器鉢で、SK21出土の破片と接合した。

SK21（第48図）

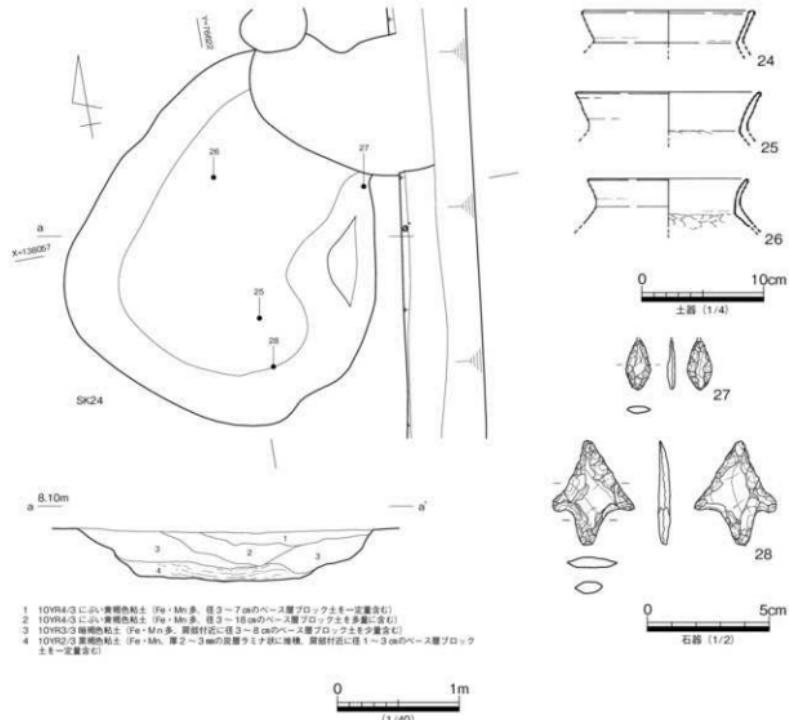
I区南半中央部付近で検出した。東西約1.42m、南北約1.53m、平面形はやや歪な楕円形を呈する。残存深は最大0.27m、断面形は周壁北西部を中心に抉られて、袋状を呈する。埋土は単層であった。

遺物は、上述した土師器鉢（21）のほか、器種不詳の土師器等の小片が少量出土した。

SK22

I区南半東端部で検出した。北半部を中心に、SK19、SK20等に切られる。長軸2.5m以上、短軸1.1m以上を測り、平面形は長楕円形を呈するとみられる。残存深は最大0.67m前後を測り、断面形はU字状を呈する。埋土については、記録化されていない。

遺物は、器種不詳の土師器小片が極少量出土したのみである。



第49図 SK24 平面・土層断面・出土遺物実測図

SK23（第48図）

I区南東隅部で検出した。東半部は調査区外へ延長する。東西1.45m以上、南北10m以上で、平面形は歪な隅丸長方形を呈する。残存深0.42mで、断面形は緩やかな逆台形状を呈する。埋土は2層に細分され、いずれも褐色系粘土が堆積し、下位層中には多量のブロック土の混入が認められた。埋土は、そのまま隣接するSK22へ連続し、明確な切り合い関係は認められなかった。

遺物は、土師器小型丸底土器（23）のほか、土器小片が少量出土した。

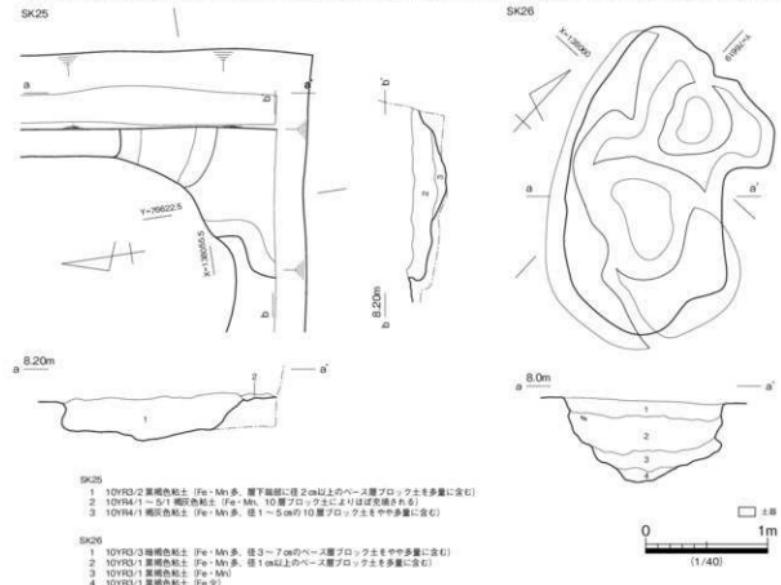
SK24（第49図）

I区南東隅部で検出した。北東隅部をSK23に切られる。東西2.8m、南北3.5m以上で、平面形は不整な楕円形状を呈する。残存深は0.4m、断面形は土坑中央部で、底面が平坦な概ね逆台形状を呈する。埋土は4層に細分され、いずれもブロック土を含む褐色系粘土で、最下層にはSK20上位層と近似した、炭化物細層のラミナ堆積が認められた。本土坑は開削後、一定期間オープンな状況で放置された可能性がある。本土坑からはそのためか、比較的多くの遺物が出土している。

遺物は、図示した以外に器種不詳の土師器等の土器小片がある。25・26は土師器甕で、いずれも器表面の劣化が顕著である。28は大型の打製石鎌、27は小型の打製石鎌で、ともに混入資料である。

SK25（第50図）

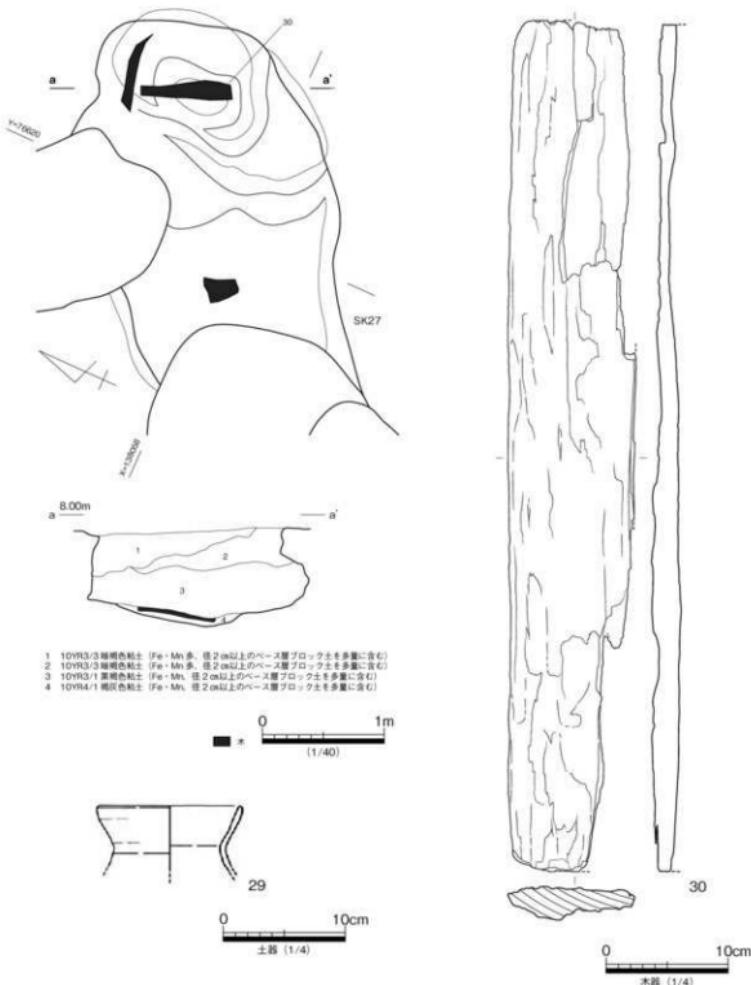
I区南東隅部で検出した。遺構の東及び南半の大半は調査区外へ延長し、また北西隅部をSK24に切



第50図 SK25・SK26 平面・土層断面図

られ、一部を確認したに過ぎない。平面規模は、東西 1.5 m 以上、南北 1.2 m 以上を測る。残存深は 0.3 m で、断面形は概ね逆台形状を呈する。

埋土は 3 層に細分され、いずれもブロック土を多量に含む褐色系粘土であった。埋土の堆積状況や平面形より、少なくとも 2 基の土坑の重複の可能性が考えられるが、平面的に把握することはできなかつた。



第 51 図 SK27 平面・土層断面・出土遺物実測図

遺物は出土していない。

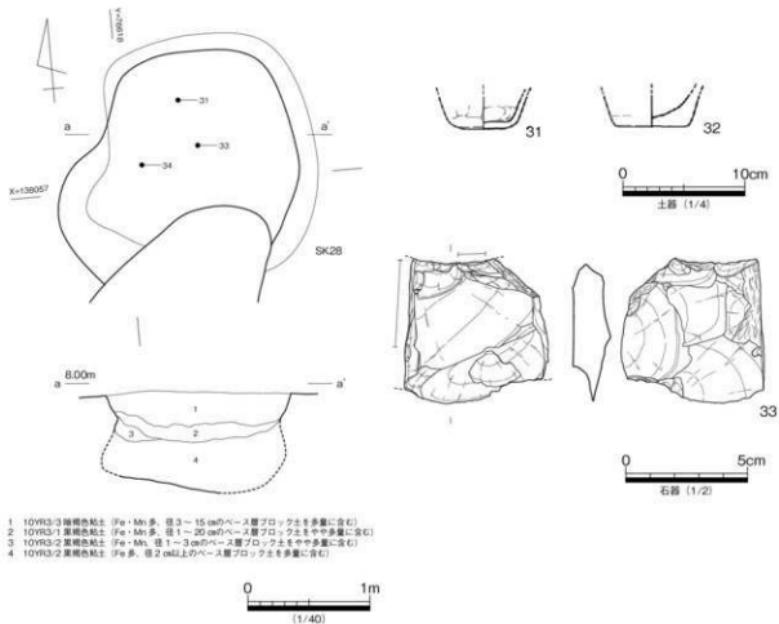
SK26（第50図）

I区南半中央付近で検出した。長軸約252m、短軸約1.29m、平面形は歪な隅丸長方形を呈する。残存深は最大0.66m前後を測り、底面は起伏が顕著で、一部を除いて底面近くで周壁が抉れて袋状を呈する部分もあり、断面形は一定形状を呈さない。埋土は4層に細分され、下位3層中はほぼブロック土で充填される。

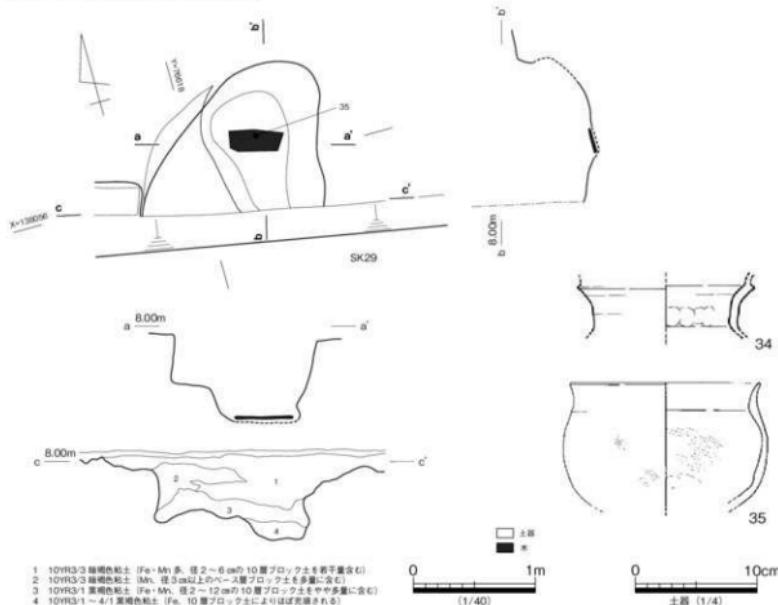
遺物は、器種不詳の土師器等の小片が極少量出土したのみである。

SK27（第51図）

I区南東隅部で検出した。北西部をSK26に、南半部をSK28に切られる。短軸約1.68m、長軸27m以上の、平面形は歪な隅丸長方形を呈する。残存深は最大約0.8m、周壁は一部を除いて底面近くで抉れ、断面形は歪な袋状を呈する。埋土は4層に細分され、いずれもブロック土を多量に含む褐色系粘土が堆積していた。また、最下層上面で長さ約69cm、幅約10cmの板材（30）が、土坑長軸に概ね直交して出土したほか、そのすぐ西側で直交する方向に1点が、さらに南端部付近で1点の板材がそれぞれ出土している。後者2点は、いずれも脆弱なため取り上げることはできなかった。



第52図 SK28 平面・土層断面・出土遺物実測図



第53図 SK29 平面・土層断面・出土遺物実測図

遺物は、主に土坑南半部より、土師器窯等の土器小片が少量出土した。29は土師器小型丸底土器である。

SK28（第52図）

I区南端部で検出した。南半部をSK29に切られる。東西約1.63m、南北2.1m以上、平面形はやや歪な隅丸方形を呈する。残存深は最大0.8mを測り、周壁は東半部を中心に底面付近が抉れて袋状を呈する。埋土は4層に細分され、いずれもブロック土を多量に含む褐色系粘土が概ね水平堆積していた。

遺物は、図示した以外に器種不詳の弥生土器や土師器、須恵器の小片が極少量出土した。また、31は最下層より出土した土師器小型鉢。32は弥生時代後期の窯底部片と思われる。33は、サヌカイト製の楔形石器である。

SK29（第53図）

I区中央南端部で検出した。南半部は調査区外へ延長する。東西1.49m以上、南北1.22m以上、平面形は不整な楕円形を呈するとみられる。残存深は、最大0.7mを測り、断面形は東西両壁が底面付近で抉れて、歪な袋状を呈する。埋土は4層に細分され、下位層を中心に多量のブロック土が含まれていた。

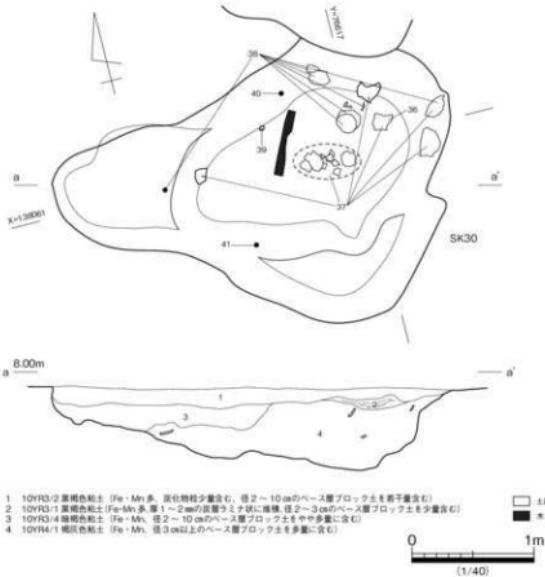
遺物は、下位層を中心に、図示した以外に器種不詳の弥生土器や土師器の小片が極少量出土した。また土坑北半底部で、ほぼ水平に据え置かれた長さ45cm、幅20cmの板材1点が出土した。35は土師器鉢で、

器表面の劣化が顕著。後述する34と、胎土や焼成が酷似する。34は土師器二重口縁壺で、同一個体の破片がSK28より出土している。

SK30（第54図）

I区中央南半部で検出した。北端部をSK11に切られる。東西約3.23m、南北2.3m以上で、平面形は歪な不整橿円形を呈する。残存深は最大0.66mを測り、断面形は逆台形ないしは箱型を呈する。埋土は4層に細分され、いずれもベース層ブロック土を含む褐色系粘土である。

本土坑からは、最下層を中心に比較的多量の遺物が出土した。図示した以外に器種不詳の弥生土器や土師器、埴輪の小片が出土している。また土坑中央床面付近では、長さ約53cm、幅約7cmの板材が、据え置かれていた。37は土師器甕。体部下半外面には煤等が付着した痕跡があり、煮沸等に使用後廃棄されたと考えられる。38も土師器甕で、口縁部内面の一部に炭化物の付着痕を認める。またSK11出土資料と接合関係にある。39は土製鋸鍊車である。胎土は土師器のそれと酷似しており、同時期



1 10YR3/2 黒褐色粘土 (Fe・Mn 多、炭化物少量含む、径2~10cmのベース層ブロック土を若干量含む)

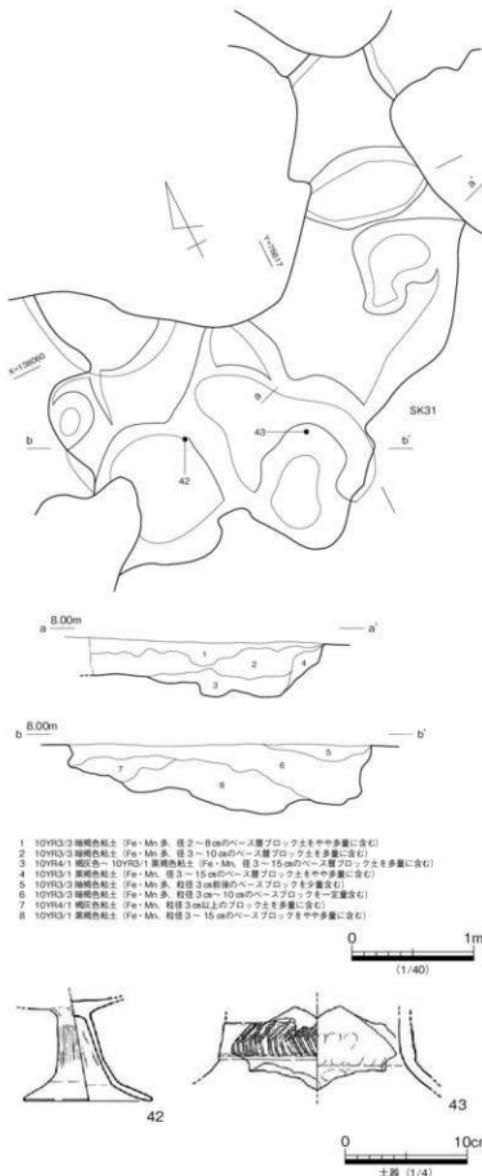
2 10YR3/1 黒褐色粘土 (Fe・Mn 多、径1~2cmの炭化物と共に少量含む、径2~3cmのベース層ブロック土を少量含む)

3 10YR4/4 暗褐色粘土 (Fe・Mn、径2~10cmのベース層ブロック土をやや多量に含む)

4 10YR4/1 暗褐色粘土 (Fe・Mn、径3cm以上のベース層ブロック土を多量に含む)

0 1m
(1/40)

第54図 SK30 平面・土層断面・出土遺物実測図



第55図 SK31 平面・土層断面・出土遺物実測図

の可能性がある。40は含クロム白雲母岩製の勾玉である。腹部の抉りの浅いC字形を呈し、形状より弥生時代終末期を前後する時期の資料と考えられる。41はサスカイト製のスクレイパーで、刃部に連続した細かな加工を認める。混入資料である。

SK31（第55図）

I区中央南端部で検出した。SK21、SK26、SK30、SK32に切られる。東西3.5m以上、南北2.7m以上を測り、平面形は不定形を呈するとみられる。本土坑についても、土層の堆積状況や底面の形状等より、複数の土坑の重複の可能性が考えられるが、調査では個々の土坑の平面プラン等を把握するまでには至らなかった。埋土は2箇所で断面図を作成し、観察を行った。a断面の1~3層やb断面の5・6層は、重複して再掘削された土坑埋土の可能性がある。2・7層はブロック土のみで充填される堆積層で、8層底面には層厚2~3cmの泥炭層とみられる土壤が堆積し、滞水下堆積の可能性が考えられる。

遺物は、図示した以外に器種不詳の土器器等の小片が少量出土した。

42は土器高杯で、杯部を除いてほぼ完形に近く復元される。43は、頭基部に幅広の突帯を貼付し、上面に交差状の刺突文を施す広口壺片で、弥生時代後期後半に遡る混入資料である。また図示していないが、出土遺物のなかに、SK32等と接合する資料が出土している。

SK32 (第 56 図)

I 区中央南端部で検出した。長軸約 2.58 m、短軸約 0.79 m、平面形は歪な隅丸長方形を呈する。残存深は最大 0.43 m 前後を測り、周壁は東西両壁を中心に抉れて、袋状を呈する。埋土は単層であった。

遺物は、器種不詳の土師器等の小片が極少量出土したのみである。

SK33 (第 57・58 図)

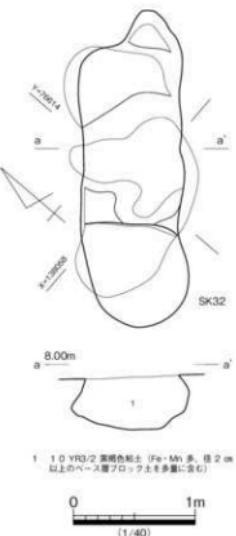
I 区中央部で検出した。南北 3.08 ~ 5.68 m、東西 6.33 m 以上、平面形は不定形を呈し、西端は包含層状の堆積により削奪される。残存深は 0.2 ~ 0.8 m を測り、底面は起伏が顕著に認められた。埋土は 4 層に細分され、上位 3 層中には多量のベース層ブロック土が含まれる。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、石器等が下層（3 層）を中心にコンテナ 3 箱程度出土した。土器類は、小片化したものが多く、図化可能な遺物は限られる。須恵器皿（44・45）と同杯（46）は、いずれも 8 世紀代に下る資料である。これらの資料より、本遺構周辺の土坑群とは異なる性格の遺構として考えていたが、図示した 3 点の須恵器を含め、古代に下る資料はいずれも遺構上面付近で出土したものであり、本来は第 2 層包含層中の遺物が、調査時に誤って混入したものである可能性が高いと判断した。土坑の位置、形状、埋土の特徴等は、いずれも本遺構周辺の土坑群と近似することから、数点の遺物資料をもって、本遺構に異なる性格を付与することも妥当ではないと判断し、当該時期の遺構として報告する。47・48 は、サヌカイト製の楔形石器碎片である。図上端を中心と顯著な潰れが認められる。49 は杭の先端部の小片で、下端側面を斜めに削る。50 は用途不明の材。径約 6 cm の芯持ち材の上端より 5 ~ 6 cm の幅で一側面より切り込みを入れる。51 は、右図下端中央に、幅約 4 cm の矩形の膣穴が残存する建築部材とみられる。径約 7 cm の芯持ち材を使用する。後に転用のため、下端を斜めに切り落とされる。木杭等の木製品の出土は、SK04 等他の粘土採掘土坑にも認められる。

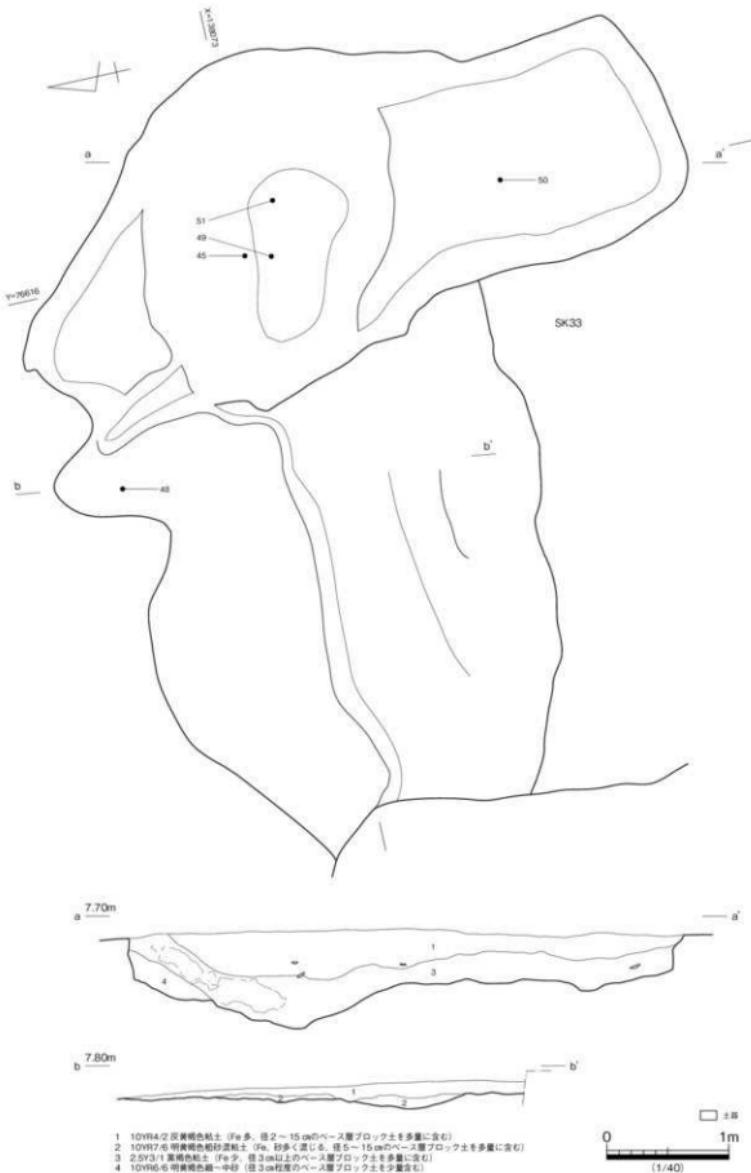
土坑群の性格について

上述した各土坑の内容について、その属性を要約しつつ、性格について以下検討することにしたい。まず土坑群は、古川の氾濫原に向けて緩やかにベース層が下降する調査区西半部及び北側谷部を除いた東南～東端部に集中し、さらに南及び東方向の調査区外へ延長するものと考えられる。土坑分布に若干の粗密が認められるが、検出範囲が狭小なため、有効なグルーピングなど、まとまりを抽出することは困難である。しかし、調査区東際で検出した SK03 や SK04 は、全形は不詳ながら、基盤層を面的に広く掘り下げた可能性が考えられ、中・小規模の土坑が煩雜に重複する、調査区西半～南部とはやや異なる様相を示す。

土坑の平面形は、橢円形や隅丸方形を志向したものも認めるが、全体としてしばしばアーベ状と表現される歪で一定の平面プランへの志向性は乏しく、またその平面規模も長径 1 ~ 6 m 以上と大きく異



第 56 図 SK32 平面・土層断面図

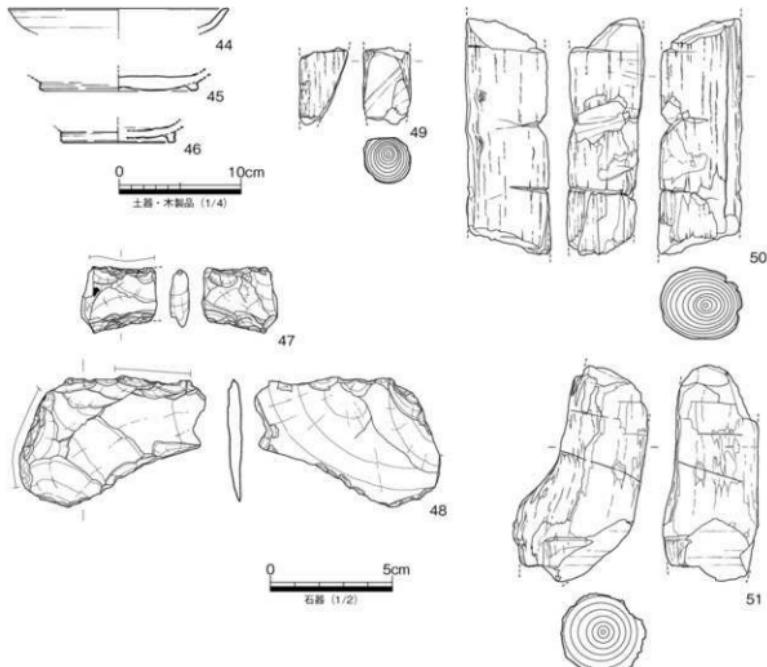


第 57 図 SK33 平面・土層断面図

なり、特定の形状や規模の選択性は認め難い。断面形は、逆台形状、箱状、椀底状、袋状、皿状など多様で、同一土坑であっても部位により異なる。袋状を呈する土坑は、概ね底面付近を水平方向へ0.1～0.2m程度抉るものが一般的で、また袋状となる周壁の拡張は一部に限られ、周壁全周を抉った土坑は確認していない。

掘削深度は、検出面下0.06～1.0m以上と幅を認めるが、0.4～0.8mが多数を占める。1.0mを超えるものはSK04の1基のみで、SK03もその可能性があり、調査区北東部の大型土坑に限られる。底面の形状は、ほぼ平坦なもの、凹凸が顕著なもの、柱穴状の窪みを有するものがある。掘削深度が浅いものに、底面の平坦なものが認められるが、凹凸が顕著なものもあり、掘削深度と底面の形状あるいは断面形状に、明瞭な相関は認められない。むしろ底面が平坦なものは乏しく、底面形状は個々の土坑ごとに多様であり、規則性は見えない。

埋土は、単層ないしは数層に細分された粘土層を主体とする堆積層が、水平ないしはレンズ状に土坑内を充填する。埋土には、周壁の崩落や人為的な埋め戻し等に起因するとみられるブロック土の混入がみられるものや、隣接する土坑間で一部埋土を共有するもの、土坑底面に薄く黒褐色粘土層が堆積するもの、炭化物細層のラミナ状堆積が確認されたものなど、漏水下での埋没の可能性が推定される土坑等があり、掘削後短期間で埋め戻されたものばかりではなく、一定期間オープンな状況下で放置されたもの

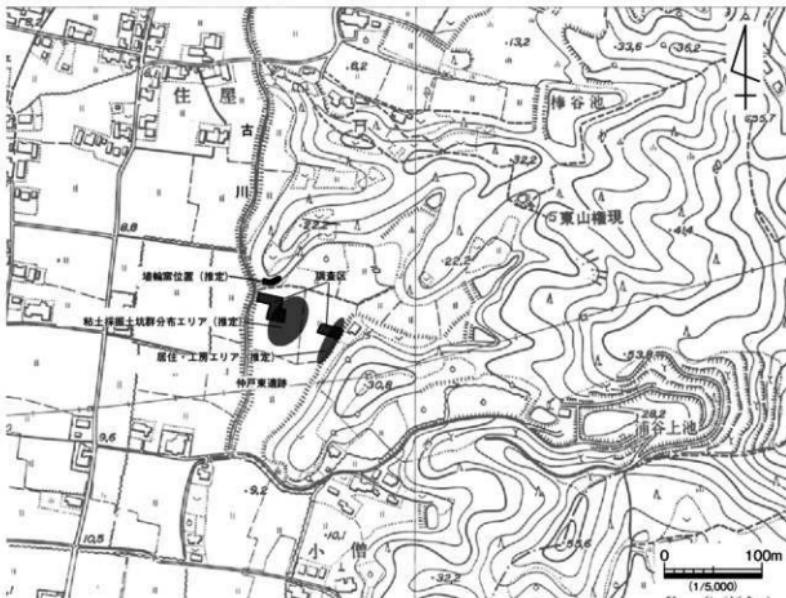


第58図 SK33出土遺物実測図

のが一定数含まれることは確実である。

また、調査区東壁の土層断面の観察において、土坑の開削順序に関する情報が得られた。SK03を埋め戻した埋土の一部（第29図18層）は、土坑南側の深い窪地部分を埋めて堆積し、その下部でSK04、SK05を検出した。このことから、SK04、SK05の埋没は、SK03に先行し、おそらくはその開削もSK03より先行するものと考えられる。一方この堆積層は、南のSK23を埋めて、その北側の深い窪地を埋める土層（同図12層）に切られられており、北部の大型土坑SK03～SK05より、SK23の開削及び埋没が後出することを示している。さらに、この土層（同図12層）下で、SK17、SK19が開削されており、SK17の掘り込み位置と、上述した18層と12層の切り合い位置がほぼ重なることから、SK17、SK19も、SK03～SK05より後出する可能性が高いと判断される。やや説明が煩雑になったが、つまり、調査区北東部に位置する大型土坑SK03～SK05が、南部に位置する中・小型土坑SK17、SK19等より先行することが明らかとなった。これが、調査区西側に広く分布する中・小型土坑群を含めて、大型土坑がすべての土坑に先行するかどうかは調査成果からは実証できないが、大型土坑が一部の中・小型土坑群に先行して、開削されたことは事実として確認された。また、大型土坑出土遺物と、中・小型土坑出土遺物との間に、接合関係のある遺物が出土していないことも、両者が時間差を有することを示しているものと考える。

次に出土遺物では、ほぼすべての土坑で土器小片等の遺物が出土しており、その多寡は各土坑で大きく相違する。多寡が生じた要因を調査によっては明らかにできなかったが、土器小片が土坑内よりレベル差をもって散乱した状況で出土し、意図的に据え置いた状況を呈さず、埋没の過程で混入したと判断



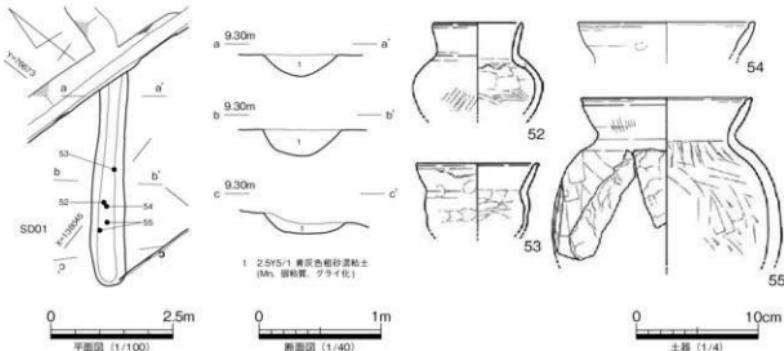
第59図 墓輪窯・工房推定位置図

されるもののが多数であることから、土坑掘削時期の相違による偶発的なものであった可能性がある。また、異なる土坑間で出土した土器片が接合したものも、一定数認められた。接合した土器片は、各々近接した土坑間で出土した例が多く、また意図的に分割して埋めた状況を積極的に肯定する材料にも乏しく、埋没過程で混入したものと考えられる。埴輪片が出土する土坑も一定数あり、後述する埴輪窯の開窯後に掘削された土坑が含まれることは間違いない。土器には、土師器壺・高杯・鉢・須恵器壺などがあり、土師器の頻度が圧倒的に多く、そのうちでも壺の占める割合が高いようである。既述したように、土坑群東側の丘陵裾部を中心と想定され、生活残滓の廃棄場所として、土坑群が利用された可能性が考えられる。

また、長さ30~70cm、幅7~20cmの板材が、SK03、SK11、SK27、SK29、SK30の5基の土坑から出土し、SK13では角礫が出土した。これらも生活残滓である可能性は否定できないが、いずれも土坑底面にほぼ接して、概ね水平に出土しており、意図的に据え置かれた可能性が高いと判断する。しかし、すべての土坑からこうした板材や礫が出土しているわけではなく、また一方でSK03やSK27では複数の板材が出土している。樹種はすべての板材について同定したわけではないが、モミ属とヒノキ属を確認しており、軽くて板材への加工が容易とされる針葉樹が選択されているようだ。上述した理由により、これら板材等の用途については、土坑掘削時の足場として利用した可能性を想定したい。

さらにSK04、SK33からは木杭が出土している。いずれも一側面を削り、先端をレ字状に尖らせたもので、土坑底に打ち込まれたものではなく、他の遺物と混在して出土した。さらに先端部はすべて欠損しており、何らかの用途に使用した後、欠損のため廃棄したものと考えられる。おそらくは、土坑側面を袋状に掘り広げる等の掘り棒として転用された可能性を考えたい。つまり、土坑からの出土遺物には、生活残滓として廃棄されたもの以外にも、土坑掘削に関係する足場板や掘り棒が含まれていた可能性のあることが指摘できる。

さて、出土した遺物の示す時期は、古墳時代中期後葉ないし後期初頭頃である。SK06・SK08・SK09・SK17・SK18等は、器種不詳の土器小片が少量出土したのみで、時期を特定する根拠に乏しいが、埋土が他の土坑と近似することや、出土遺物に土師器壺の体部小片が散見されることから、上述した時期の範疇に含まれるものと考える。つまり、検出された土坑群は、上述した時期幅のなかで掘削・埋没



第60図 SD01 平面・土層断面・出土遺物実測図

したものと判断したい。また、重複状況より土坑掘削期間は一定程度見積もある必要はあるが、出土した遺物からは、土器1型式を大きく越えるものではないと判断される。

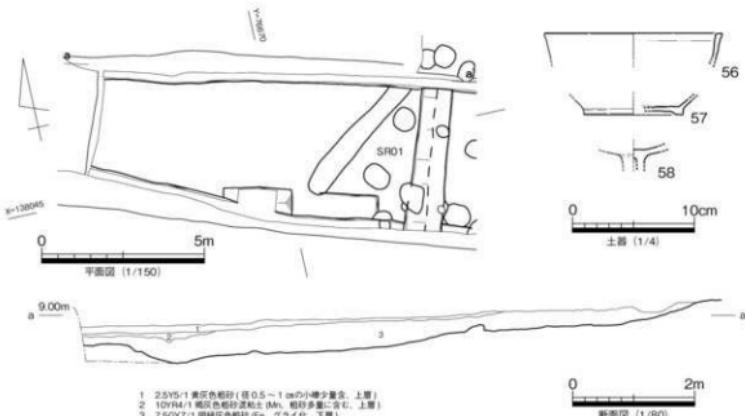
上述した遺構の内容から、これら土坑群の性格については、粘土探掘坑と考えるのが妥当である。そして、近接した位置に埴輪窯の築窯が予想され、それとはほぼ同時性が実証される粘土探掘坑であることより、埴輪生産を契機とするものであったと考えられる。また包含層出土資料ではあるが、窓壁とみられる非常に堅硬に焼けた須恵質の焼土塊（巻頭図版下段）が出土し、埴輪のなかには**401**のような大きく焼け歪んだものもみられる点もこうした想定と矛盾しない。さらにこの点を実証するため、埴輪胎土と土坑周辺の粘土層や土坑埋土の比較分析を実施した。詳細は第5章に譲ることとするが、分析の結果は、土坑周辺粘土の埴輪胎土への利用を積極的に実証するまでには至らなかったが、否定する材料が認められなかった点は、考古学上の解釈を訂正する必要性に乏しいものであると判断される。

つまり本遺跡の性格のひとつとして、近接した場所に工房が営まれていたことが想像され、原料の調達・加工・生産を集約した埴輪生産のコンビナートであったと評価したい。そしてそれは、出土した埴輪の内容や土器の時期差等より判断して、特定の古墳の構造を契機とし、以後継続しなかった可能性が想定される。また、土坑規模が掘削時に必要とした粘土量を反映しているとすれば、必ずしも調査において実証するだけのデータが得られなかつたが、既述したように大型土坑が中・小型土坑に先行して開削された可能性が指摘できる点は、埴輪窯開窯時の多量の粘土を必要とした初期の段階で大型土坑が開削され、中・小型土坑がその後の埴輪数量の調整生産段階において開削された可能性を示唆するものとして興味深い。

溝

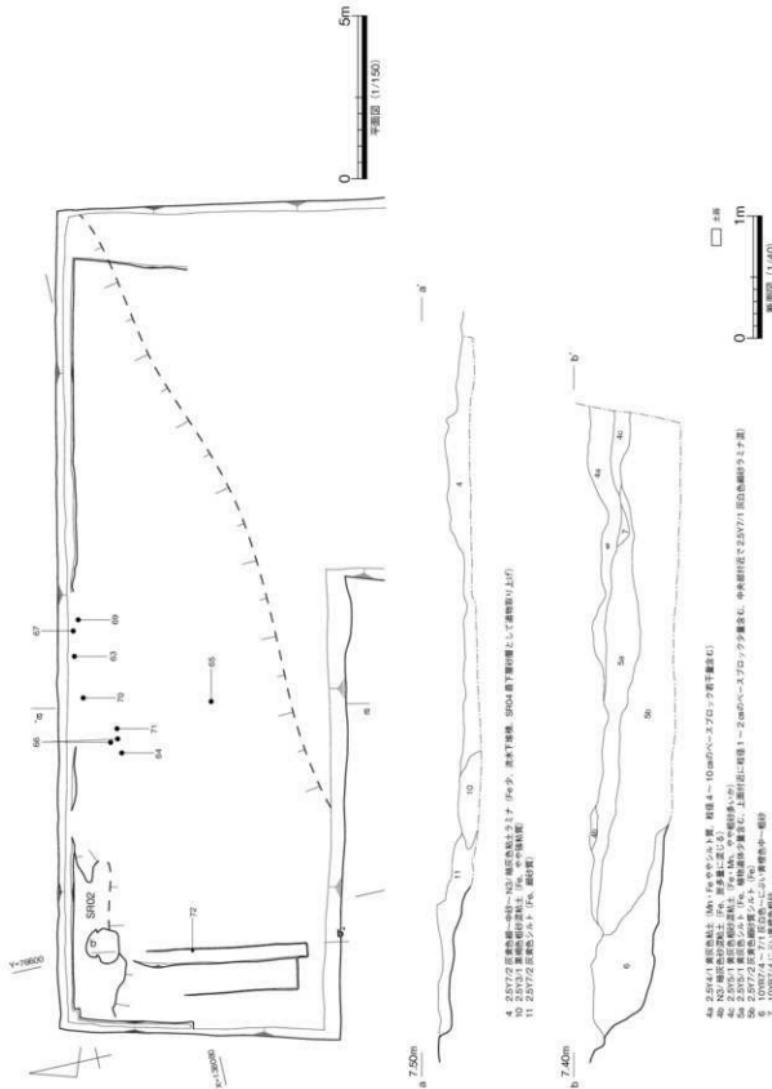
SD01（第60図）

II区中央部で検出した溝で、南端は調査区内で途切れ、北端は北拡張区に延長部が確認されなかつたことから、検出長4.6m程度の直線溝となるか、北端部が大きく屈曲して西へ延長する可能性が考えら



第61図 SD01 平面・土層断面・出土遺物実測図

れる。検出面幅 0.61 ~ 0.67 m、残存深 0.17 ~ 0.21 m、流路方向 N 53.31° E、断面 U 字形を呈する。底面標高は南端部で 8.97 m、北端部で 9.04 m を測り、標高差より南へ流下する可能性が考えられるが、



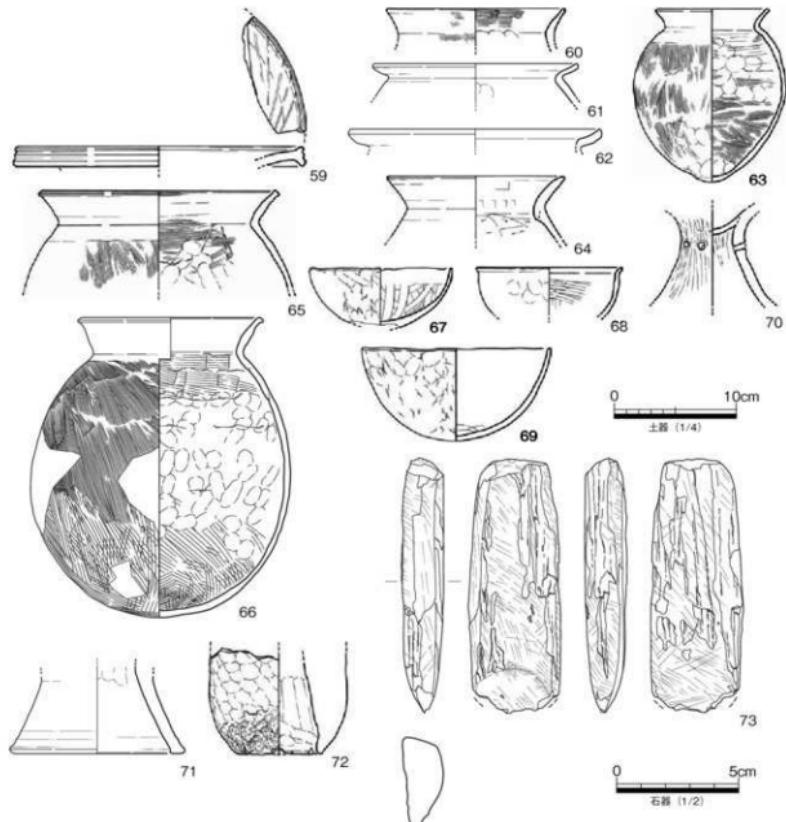
第62図 SR02平面・土層断面図

南端部は途切れるため、給排水路としての機能は想定し難い。埋土は、粗粒砂混じりの粘土が堆積し、流水堆積は認められないことも、上記想定を支持する。

遺物は、土師器壺（54・55）、土師器壺（52）、小型丸底土器（53）等がコンテナ半箱程度出土した。54・55はいずれも布留系の壺で、端部を小さく内側へ肥厚する。55の体部外面には、焼成時の破裂痕を認める。52は小型の直口壺で、比較的調整の丁寧な精製品。53は粗製品で、素地粘土は粗粒を含み、体部は指オサエやナナ調整により整った形状を呈しない。壺体部は球脛を呈し、布留式新相伴行期に位置付けられる。

自然流路

SR01（第 61 図）



第 63 図 SR02 出土遺物実測図